

【更新停止】 それゆけ！
ウマソルジャーV 偽ル
ドルフ伝 with my fate
【第二部 ダークウマソ
ルジャーV編 完】

三十六分儀

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『以前から構想しておりました今後の展開と現実には於ける某重大事件が被る部分が出て来てしまいました。塾考した末、冥福を祈ると共に更新停止をせざるを得ないとの結論に達しました。誠に勝手ながら深くお詫び申し上げます。お読み頂いた方々、お気に入り登録をいただいた方々に於かれまして深くお詫び申し上げます。』

三六分儀 拜

【第一部 ヒーロー劇場編】

伝説の生徒会長 シンザン大先輩を超える！若き皇帝ドルフ。レースをしに来た彼女が入ってしまったのは、ヘンテコなトレセン基地とヘンテコなウマソルジャーVで

あった。新たな突っ込みソルジャーとしてグリーンズズカを助けよう！

【第二部 ダークウマソルジャー編】大食い大怪物オグリン遂に登場！タマモクロスは対抗すべく力を尽くすが・・・一方、ルドルフたち府中のウマソルジャーは出勤を妨害される。しかし意外な相手と共に再びオグリンに挑む！第二部完。

【第三部】開始予定。

※方向性を修正した為、第十四話を削除した上で、一部に改稿し再投稿致しました。
レース無き世界で最強戦士「シンボリドルフ」に憧れる偽者となってしまうドルフ。そんな彼女の明日は絶賛行方知れずである！

ウマソルジャーVとは！今日も町の平和を護る為、熱血とノリと伊達と酔狂で闘う5人のヒーロー達の事である。それがウマソルジャーV。行け行けウマソルジャーV！正義の味方のはずだ、ウマソルジャーV！Dr. マッドタキオンの陰謀と悪の大首領に立ち向かえ！

※・ゴジラシリーズ始め、救急戦隊ゴーゴーフアイブ他作品ネタあります。

※UAが遂に1000を突破しました。この拙いパロディ小説をお読みいただき、心の底より感謝申し上げます。

※UAがとうとう2000まで突破しました。本当にありがとうございます。御座います。

※オリジナルモブウマ娘の死亡がございました。ご注意ください。

目次

| | |
|--|----|
| 【第一部 ヒーロー劇場編】第一話 ウマソルジャーV敗れる！ 偽ルドルフ登場 | 1 |
| 編 | 1 |
| 第二話 誕生！ ブラックルドルフ | 5 |
| レース無き世界にて | 21 |
| 第三話 先陣争い！ 倒せ！ブラックルドルフ 対 トウカイテイオー & シンコウウインディ | 34 |
| 第四話 衝撃、ナレーション乱入 ニセマックイーン登場！ 脅威！ピワハヤヒデの頭 | 47 |
| 第五話 ピワハヤヒデ 対 Victor | |

| | |
|---|----|
| ry ウマロボ！ 大食い大怪獣オグリン 覚醒か！ | 62 |
| 第六話 グリーンズズカは突っ込み疲労中！ 逃げ切りシスターズから逃げ切ろう！ ブライアン&ハヤヒデの帰還！ | |
| いい加減早く目覚めよう！ 大食い大怪獣オグリン！ | 76 |
| 【第二部 ダークウマソルジャーV編！】 | |
| 第七話 大食い大怪獣オグリン 遂に現る！ じゃりん子タマモと行く 名古屋と伊勢湾ぶらり旅 | 90 |
| 第八話 ダークウマソルジャー登場！ | |
| タキオンの恐るべき陰謀！危うし、ボク | |

らのタマモクロス！

103

第九話 ウマソルジャーV 最大の危機

！ まさかの出動不能 敵は常に身内に

あり！

118

第十話 必殺、白き牛乳竜巻落とし！

タマモクロスの修行！ ヤエノムテキ登

場。プリティーダービー?! レースに

何の意味がある？ 困惑、ビワハヤヒデ

とナリタブライアンの変貌！

136

第十一話 大食い大怪獣 オグリンの逆

襲 願いよ届け！ カフェ & タマモ

クロスの戦い！

157

第十二話 商店街のエール 頑張れ ナ

イスネイチャ！ 奇策炸裂！大阪にワー

プ？ ニセマックイーン再び現る！

175

第十三話 大阪決戦！ 潜入！ 無いはずのモノがある！

ブラックに衝撃走る！

深まるウマソルジャーパークの謎。

マッドタキオンのウマ娘探求譚 深まる

ウマソウルの謎！

195

第十四話 決意を新たに。ルドルフ遂に

覚醒か！ 異常事態連発！ シン・オリ

シリウス登場！ 下天は夢か？ 国U軍

総本部 全ては分厚い岩盤の下で。シ

ン・ゴールドシップ登場

216

【第一部 ヒーロー劇場編】第一話 ウマソルジャーV敗れる！ 偽ルドルフ登場編

【第一部 ヒーロー劇場編！ ウマソルジャーV 栄光のヴィクトリー・ロード】

第ゼロ話のあらすじ（ナレーション）

「Dr. マッドタキオンの陰謀で商店街が危ない！

ダークマンハットンCが現れ、混乱する人々。しかし、ヒシアマ長官のタイマン戦法と「ウマソルジャーバズーカ」で勝利したのだった。良くやったウマソルジャーV。絶対に負けるなウマソルジャーV

こうして彼女たちの活躍により、Dr. マッドタキオンとダークマンタツハンCは避けられた。しかし、守られた人々からお礼を言われ、グリーンズズカは突っ込みソルジャーから逃げ切れない。ウマ娘とトレセン学園基地の平和はまだ遠い。世界の平和は君たちに託された。頑張れズズカ！心の平安『も』守る為に！」

【第二話 ウマソルジャーV敗れる!? 偽ルドルフ登場！】

シンボリドルフは新入生である。トレセン学園に入学し、レースで唯一絶対の存在

となるべくしてやって来たのだ。

若くして面接官を圧倒し尽くしたその威圧感。凜々しい風貌。相手を目で射殺出来る程の眼光。全てが普通のウマ娘の枠を超えていた。もはやレースを走るウマ娘と言うより神話に登場する神ウマ娘スレイプニルといった所か。

「ここが日本ウマ娘トレーニンングセンター学園なのか!？」

若きルドルフは少々当惑した。門にはこう書かれていたからだ。

「日本ウマソルジャートレーニンングセンター学園基地」と。

「予め確認したはずだ。ここで間違いないのだが。なぜ別の学園が立っているのか。」

困った彼女は校門の側に立つウマ娘に声をかけた。やけに自信満々かつ堂々と構えていたので頼りになるかもしれない。そう思ったからだ。

「済みません。少し確認させて下さい。ここは日本ウマ娘トレーニンングセンター学園でしようか?」

そのウマ娘はポニーテールにピンク色の変わった勝負服を来ていた。

「ややー何かお困り事でしょうか?ならばこのスーパ―委員長にしてバクシン戦隊の紅一点!ピンクバクシンオーにお任せあれ!!!」

声も動作も大き過ぎる彼女。その上、戦隊モノよりは仮○ライダーバリの奇妙なキメポーズまで。余りのハイテンション振りに、ルドルフは啞然としていた。果たして今の

彼女は素面なのだろうか？もしかしたら本当に何か道草でも喰ってしまったのではと。

「ここは悪の組織 『なんとかかんとか』とその構成員達と戦う為に作られたのです！そして、私はピンクバクシンオーです！」

若き皇帝は一体全体何を言ってるのか、皆目見当も付かなかった。「なんとかかんとか」とは一体何の事だろうか？その謎の適当振りに、思わずこめかみに十字が浮かびかかる。

しかし彼女はそれを抑え、あくまでも冷静沈着に対応しようとする。もしかしたら敵組織の名称が不明、もしくは機密事項であるのかもしれないのだから。

「レースに出て勝つ為に作られた学園ではないのか？名称は日本ウマ娘トレーニングセンター学園では？」

「違います！」

一抹の可能性は一言でばつさりと切り捨てられる。

「私こそ栄えあるスーパードール委員長にして正義のヒーロー ウマソルジャーVのピンク担当！ピンクバクシンオーなのです！！ようこそ、学園基地へ！」

そう言っただけでバクシンオーを名乗るウマ娘が親しげに手を差し出してきた。何度もスーパードール委員長を繰り返す辺り、よほど気に入っているらしい。

（私は降りる駅を間違えたのか？それとも誑かされているのか？もしかすると、ファンとの交流イベントがあり、その予行練習をしているのではないのだろうか？それともこれは胡蝶の夢か何かなのか？）

ルドルフの脳内をバクシンオーは滅茶苦茶にしていた。

故郷ではライオンと畏れられた彼女も、バクシンパワーを相手取るにはまだ経験不足の様である。

「シンボリルドルフだ。宜しく頼む。」

相手が先輩にもかかわらず、敬語を忘れて思わず普段の口調で自己紹介をするルドルフ。すると、名前を聞いたバクシンオーは怪訝な表情を浮かべた。

次の瞬間、奇妙な音が流れ始める。やけに耳に残る、勢い任せの音楽らしきモノだった。

「バクシン！バクシン！バクシン！ バクシン！バクシン！バクシン！バクシン！」

「やや！怪ウマ娘が現れた様ですね。」

バクシンオーはニンジン型のヒーローっぽい機器に戸惑っていた。警報音の停止方法が分からないせいである。

「あのく、この警報音の止め方を知りませんか？」

スーパー委員長でも分からない事はあるのだ。仕方が無い。

ルドルフは思う。

（本来見知らぬ他人に安易に見せるモノでは無いのでは？）と。

何より、警報音がうるさいのだ。かくもしつこく繰り返されるバクシンソング。このままでは脳内に刷り込まれそうである。このままでは明鏡止水の境地が台無しである。早めにとめなければなるまい。

（分からない・・・）

残念ながらルドルフにも分からない事はあるのだ。彼女は生まれてこの方、おもちゃ売り場の玩具に関心を示した事など一度も無い。

生まれながらの戦士にはそんな玩具など視界の中にさえ入ってこなかったからだ。それが遂にあだとなってかえってくるとは、一体誰が想像し得ただろうか？

「バクシン、バクシン、バクシン。バクシン、バクシン、バクシン。」

バクシン警報が先程から流れっぱなしである。それどころか、心なしか疲れた口調に変化していた。更に合成音声とも思えない奇妙な勢いと暑苦しさが感じられる。

「ピンクバクシンオー先輩。もしかしたら、この警報音は貴方の声では？」

待ってました、よくぞ聞いてくれましたとばかりにバクシンオーが更に迫って来る。おでこがやけに光る満面の笑みを浮かべて。

（顔が……ずいぶんと近いな。）

「その通りなのです！何をかくそうこの警報音は私自身の声なのです！デフォルトの音ではぜんぜんバクシン出来なかつたので、それどころか頭痛がしてしまいました。」

アメリカのカートウーンアニメーション作品の様にせわしなく動く彼女。まるで疲れ知らずの太陽である。問題はその恒星に脚が生えており、異常接近や大音声を上げる事なのだが。

「そこで、そこで、勝手に変えてしまいました。スーパー委員長として責任を果たす為には仕方がなかつたのです！おかげで止め方が分からなくなつてしまいました。」

学園基地？の備品を勝手に改造して良いのだろうか？皆の模範たる学級委員長はどこへ行ってしまったのか。

ルドルフは訝しんだ。

更に言うならば、何故なかなか警備員が集まって来ないのだろうか？用をなさないシステムなど変えてもみせよう。彼女は密かに決意した。自分が生徒会長となつて。一体全体、シンザン会長は何をしておられるのか。

この時、バクシンオーは歴史の大きな曲がり角を曲がっている事に、この後も気づく事は無かつた。

（集う5人の戦士たち。怪しいウマ娘と戦うべく参上だ！）ナレーション。

「燃える正義の赤い炎。レッドペガサス！」

「正義が一番・春一番。ピンクウララ！」

「吹き抜ける正義の疾風。グリーンズカ！」

「そして、私こそが爆ぜる正義の桜吹雪。サクラバクシンオーことピンクバクシンオー
なのです！」

「5人揃って正義のウマ娘。ウマソルジャーファイブ！」

ルドルフは困惑を通り越して呆れていた。このような子どももじみたヒーローショー
に興味など無い。早急に公衆電話を探るか、近くの交番にでも行った方が良さそうだ。

「ちよつと待つて。」

グリーンズカが待ったをかけてくる。

「ブルーは？ブルーはまだ来てないの？」

「それだけではないな。ピンクが被っている。」

思わずルドルフも突っ込んでしまった。それが地獄の門を開ける行為と知らずに。

「そうなのよ！助けて！もう突っ込みきれません！」

やや疲れた表情のグリーンズカ。既に突っ込み済みらしい。

「お願い！私と一緒に突っ込んで！」

ルドルフは鬼気迫る表情で迫るスズカに困惑した。今日はこれで何度目の困惑だろうか。これまでのウマ生でこれ程彼女が他のウマ娘に振り回された事など無かった。全く初めての状況に、ルドルフは思わず思索する。

（彼女の疲労振りから推察するに、突っ込み役はかなりの重労働なはず。例えるならば、延々と短距離を繰り返して走り回されている様なモノだ。）

「どうかしたの〜。」

「ブルー 遅いよ!」

遂に最後のソルジャーが登場した。スカイブルーの登場である。

「なんでバナナを食べているの?!」

「ビワハヤヒデにもらったから〜。」

ウララがブルーのバナナを指を咥えて見ている。

「私も食べたい!」

「もう突っ込み切れません!」

この混乱した現場を納めるのは誰だ。大先輩シンザン会長を超えんとするこのルドルフにおいて他にない。彼女は威厳ある態度を取り戻すとズイスイと前に進み出た。

「静まらんか!!!」

皇帝の神威が辺りを制圧していく。かかりぎみだったウマソルジャーたちもようや

く沈静化したようだ。

「ありがとう。おかげで助かったわ。」

スズカは涙を流してルドルフに感謝する。両手を持って感激しながら。

「ねえ、ウマソルジャーの候補生にならない？」

「ウマソルジャーV正規の隊員、レッドペガサスから勧誘されたルドルフ。彼女の最強戦士への道はまだ始まったばかりだ。」ナレーションA。

（藪から棒になんだ！その様なつもりは無い。私はレースに勝ちに来たのであって、ウマソルジャーになる為では無いからな。）

早速ナレーションにまで突っ込むルドルフ。バ体の仕上がりは絶好調だ！

とは言え、ウマ娘たちの上に立つ素質を示せた事は確かだ。その点だけは彼女も自信を取り戻していた。

その時、ウマソルジャーたちに通信が入る。映像が立体的に浮かび上がり、褐色の肌をした長髪のウマ娘の姿が現れた。

「ヒシアマ長官！」

「今、目の前にシンボリドルフを名乗る不審なウマ娘がいるだろう。そいつは怪ウマ娘の可能性がある。先ずは質問、それから警察より先に確保しな！」

長官から目の前のウマ娘こそが偽ルドルフであると通信が入る。

「待て！私の入学はシンザン会長もご存知だ。」

「シンザン大先輩は前の会長だ。今の会長はルドルフ。あんたこそ何ウマ娘で本基地に何の用で近づいた？Dr. マッドタキオンの手の者か？」

ルドルフは今の生徒会長がシンザン会長だと思っていたが、何時の時代の話をしてるんだと一蹴りされる。

「私はトレセン学園に行かなくてはならない身だ。このままでは時間に遅れてしまう。それに、Dr. マッドタキオンなぞ聞いた事も無いのだが。」

未だにバクシン警報がとどろき、慌てるスズカ。

「そんな。」

スズカはショックを隠せない。ようやく見つけた貴重な突っ込み役が身元不明で会長の名前を堂々と詐称する怪しいウマ娘だったとは！これは由々しき自体である。

「ごめんなさい。でも私たちはウマソルジャーV。世界の平和を護る為、この状況に対処します。」

「交渉決裂だな。だが、待ちなあんたたち。正義の味方なら正々堂々とタイマンで勝負しな！」

長官から集団戦法を無視した謎の激が飛ぶ。スズカの突っ込みMPは枯渇しかけていた。

わざわざ一列に並んで次々と襲い掛かるウマソルジャーV。

「キャロットマンはみんなに勇気を与えるヒーローだ！ タイマン勝負に勝ってみんなに勇、ビゴーオオオオ！」

レッドペガサス。キャロットキックを外され、死闘の末に遂に倒れる。

「ウララアアアア！」

ピンクウララ。そのままころんで地面に激突し、破れる。

「さすがは学級委員長！ 花丸です！ バクシンンンンン！」

ピンクバクシンオー。突如として超加速して疲労の末、ヘロヘロ状態で破れる。どこが花丸なのか一切不明だ。どうやら彼女に長時間の乱取りは厳しそうである。

「待ってみんな、私は……。」

思わずためらうスズカ。ようやく見つけた貴重な突っ込み役の正体。次々と突っ込みだらけの破れ方をする仲間たち。この状況では突っ込みが全く追いつかない。

ブルースカイことウンスはバナナ先輩からもらったバナナを食べて戦闘に参加さえしていない。ルドルフはこれ幸いとばかり離脱をはかる。

所がブルーは突然バナナの皮をルドルフの足元に放り込む。彼女はブルーを警戒していなかった為、その皮で滑って転んでしまった。

「イグ・ノーベル賞アタック。成功だね。」

こうしてルドルフはとうとう捕縛されてしまったのだった。

「正義は必ず勝つ！バクシン！バクシン！」

「やるなブルー！キャロット。パンチだ！」

「バクシンピンクさん。その警報音止めてもらってもいい。」

バクシン警報は依然としてけたたましく鳴り響いていた。すると、突如としてバクシン警報はテイオー警報へと変わった。

「テイオー！テイオー！テイオー！ テイオー！テイオー！テイオー！テイオー！」

「やや！これは一体どういう事でしょうか！」

思わず困惑するバクシンオー。今ごろどこかで誰かがしたり顔でもしている事だろう。

「テイオーがいたずらしたんじゃない。」

その時、突如としてルドルフの脳内に出所不明な記憶が流れ込む。その小柄でポニーテールの元気なウマ娘。顔は分からないが確かにこういつていた。

「カイチョーは負けないよ。必ず勝つんだから。だって皇帝だもん。」

（私は、バナナごときに負けるわけにはいかない。私の知らない誰がこの背中を見ているのだ。絶対に！絶対に！絶対にだ！）

テイオーコールにより、謎の復活を遂げるルドルフ。そして、とうとうウマソル

ジャーVを全員倒してしまおうのだった。

それを影から見つめる怪しい姿があった。一体全体何者なのだろうか？

突如として現場に現れたヒシアマ長官。

腰を落として両手を挙げる、野性味溢れるなポーズをとっていた。

「やれやれ。だらしがないね。これを投入するか。」

長官は怪しい光を放つニンジンを見せる。そして、倒されたウマソルジャーたちに食べさせ始めたではないか。

ペガサス「キャロットリコピンパワー、全員復活！」

ウマソルジャーVはニンジンパワーで復活した。ちなみにブルーは寝てしまった。

長官「ウマソルジャーは何度でも復活するさ。あたしたちこそいくら負けても懲りないヒトの夢そのものなんだからね！」

脅威のニンジンパワーによりゾンビの如く立ち上がるウマソルジャーたち。

「ニンジン！ニンジン！ニンジン！ ニンジン！ニンジン！ニンジン！」

ピンクバクシンオーはいつも通りだった。

「キャロットマーン。メイクアップ！」

「色々混ざりすぎー！」

再び突っ込むスズカ。彼女の突っ込み坂は果てしなく遠く、そして険しい。突っ込み

MPの回復を要求しよう。

「偽ルドルフ強すぎく。このまんまじゃ勝てないよ。」

ブルーが寝言を寝ながら言う。ならばとばかりにペガサスは凜々しい顔つきで叫んだ。

「あれをやるぞ!みんなのニンジンを一つに!」

すると、ニンジンが100万ボルトの輝きを放ち、巨大なニンジン型の武器に変形合体した。

「説明しよう。ウマソルジャーバズーカ改とはく(以下省略)。」

「Dr. マッドタキオン!」

ルドルフの方に向き直る悪の天才科学者 Dr. マッドタキオン。ルドルフを見つめる彼女の双眸は、怪しく輝いている。

「ルドルフと言ったかな。何も知らない相手に説明するのも私の役割らしいからね。」

身の危険を感じるルドルフ。案の定、彼女は怪しげなコーヒートを片手にやって来た。

「ウマソルジャーバズーカ改の威力はかなりのモノだ。きみが勝つ為にはこのコーヒートを飲み、巨大化するしかない。紅茶もあるが。レースとやらに出る前にポロポロになりたくはないだろう?」

しかし、ルドルフの答えは決まっていた。

「悪いが断らせてもらおう。」

「ほう。なぜかな？理由を聞かせてもらっても？」

「私はドーピングに頼って勝つつもりなど毛頭も無い。これが答えだ。」

タキオンはクツクツと笑う。

「良い心構えだ。まるで本物のシンボリドルフを前にしているようだね。それでは観戦させてもらうか。」

遂にウマソルジャーバズーカ改はエネルギーを充填し始めた。

長官「余計な電源を切りな。」

ペガサス「了解！ウマソルジャーバズーカ改内圧力上昇。」

スズカ「大人しく捕まって。バズーカ内圧力上昇。非常弁閉鎖。薬室内圧力上昇。」

長官「バズーカへの回路を開きな！」

ペガサス「回路、開くよー！」

スズカ「全エネルギーをバズーカへ。強制注入機作動。」

長官「バズーカ安全装置解除しな。」

スズカ「安全装置解除。セーフティロックゼロ。圧力発射点へ上昇。あとゼロ、二。最終セーフティ解除。圧力限界へ。」

タキオン「ほう、今度は私たち文字通り一網打尽に言うわけか。これはなかなか

かに面白い。」

タキオンは怪しげにクッククックと笑う。

ウララ「前方に偽ルドルフとDr. マッドタキオンを確にーん。距離は10メートルだよ!」

耳を聳する様な起動音が辺りに鳴り響く。発射時間は既に目前だ。

(だがしかし、どうすればいい)

ルドルフは考える。自分はレースを走る為にここに来たのだ。怪我を負う事はは厳禁だ。しかし、ここで自分がよければ背後の商店会が被害を被るかもしれない。

長官「レッド、操縦をスズカに渡せ。」

レッドペガサス「スズカ、渡したぞ。偽ルドルフ対グリーンズズカ。これで実質タイマンだな!」

スズカ「……。」

突然、ルドルフは上空高く飛び立った。それも本人が驚くほど高くあっさりと。

(いつの間にか身体能力が向上しているだと?なぜだ?)

スズカ「軌道修正。ウマソルジャーバズーカ改。発射!」

まばゆい光は誰も居ない上空でぴったり10メートルだけ伸び、その場で光の網の目が絡み付いた。

ルドルフは華麗にバズーカの攻撃を避けると怒りを露わにする。

「一体何をしているのだ！ 負傷者が出たらどうするつもりだ。」

「説明しよう！ あれは捕縛に特化した自称バズーカ砲だ。特別怪我は負うまい。更に私たちはたいていの事はたんこぶで済むから安心したまえ。」

しかし、自称我等が会長？ 見事な身体能力だね。素晴らしい素体だ。はやりこちら側に付かないか？」

しかし、ルドルフはその申し出を断る。

「なら仕方ないね。また会おう。皇帝陛下殿。」

こうしてDr. マッドタキオンは去って行った。

「ちっ！ 逃がしたか。悪いけど、あんたは基地に来てくれないか。タキオンとの関係者かもしれないからな。」

それからエアジャーカールに調べさせた。だが、存在を実証する情報が如何なる場所にも無かったときさ。もちろんお役所にもな。当然だが日本ウマ娘トレーニンングセンター学園なる施設はどこにも存在しない。」

長官は両手を挙げてこれ以上行動する意志がない事を伝える。

（今のウマソルジャーバズーカ改はエネルギーの再充填に時間がかかる。仕方がないね。）

「もしも、タキオンと無関係ならウマソルジャー候補生としてあんたを超法規的に面倒を見るよ。奴に目をつけられた可能性がある。その代わりに役割を果してもらうことになるけどな。このままだと路頭に迷う事になるよ。どうするつもりだい？」

ルドルフの目的地はただ一つ。トレセン学園。それだけだ。

「信用出来ないな。私は捕まりそうになつたのだから。」

「手荒な真似をして申し訳ない。拒絶されて当然だ。だが、警察にとつ捕まると最悪入管行きになつちまつてな。かなり面倒くさい事になるからね。それから繰り返しになるが、シンポリルドルフという名のウマ娘はうちの生徒会長として既に存在するし。ここにあるのは日本ウマソルジャートレニングセンター学園基地だ。日本ウマ娘トレニングセンター学園なる施設じゃない。」

そうヒシアマゾンは断言する。ルドルフもこれには単なるファン感謝祭の予行演習とは思えず、思わず押しだまつてしまう。そんな彼女に長官はこんな提案をしてきたのだった。

「そうだな。先ずは、その商店街にある公衆電話で手当たり次第に電話してみな。それでトレニングセンターにたどり着ければそれにこした事はないが。自分で確かめて自分で納得するのがタイマン並に一番手っ取り早く済むからね。」

ヒシアマ長官はテレフォンカードと小銭を投げて寄越すと、受け取つたルドルフは素

早くその場を離れたのだった。

「今すぐ迎えなくていいの?」

ウララが長官に聞く。

「タイムマン勝負を受けた上にバズーカの射線を空に向けさせたんだ。悪いウマ娘じゃないだろう。それに、念の為密かに護衛をつけてあるから大丈夫さ。」

(突っ込みルドルフさん。無事に帰ってくればいいけれど……。今は信用されないだろうし。)

一方、スズカは声をかける事が出来ず、その場で左回りに旋回する事しか出来なかった。

ついでにバクシン警報はまだ鳴りっぱなし。ブルースカイは長官にたたき起こされていたのであった。警報音について、後に2名のウマ娘が説教を食らったのは言うまでもない。

【商店街にて】

「おかけになった電話番号は 現在 使われておりません。おかけになった電話番号は 現在 使われておりません。 ツーツーツー……。」

残念ながら、全ての電話番号が不通であった。それでも何とか粘ろうとする ルドル

フ。しかし、胃袋は正直者だった。体力の低下を脳に疲労と音で伝達して来る。これに焦りが加わり、じわじわと冷え汗が流れ出て来る。

その時、一人のウマ娘が声をかけて来た。飾らない雰囲気です庶民的な感じのウマ娘である。

「どうしたの？誰も出てくれなかった？アタシはナイスネイチヤ。日本ウマソルジャートーニングセンター学園基地のソルジャー候補生だけど。あなたも？」

レース無き世界で 続く

第二話 誕生！ ブラツクルドルフ へレース無き世界にてへ

カレンチャンは合気道が使える。強い！絶対に強い！

抜刀と納刀もやれそう。

【前回までのあらすじ】

（ウマソルジャーVは偽ルドルフの前に壮烈な敗北を遂げてしまった！彼女はテイオーコールにより圧倒的パワーを発揮したのだ！更にDr. マッドタキオンまで登場し、危うしルドルフ！貴重な突っ込み梓獲得争奪戦が遂に始まったグリーンズカの心情は如何に！一方、商店街にて独りたたずむルドルフ。孤独な彼女に謎のウマ娘が声をかける。ルドルフの明日はどっちだ!?) ナレーション。

【商店街にて】

（ナイスネイチャはウマソルジャー候補生である。常に安定した成績を残して、ヒシアマ長官の信頼も厚い。何より気取らない庶民的雰囲気商店街というフィールド効果によって激増しているのだ。ナイスネイチャは商店街にて最強の呼び声も高い、隠れた

強戦士である。) ナレーション。

ルドルフはしばしば逡巡した。もしかしたら自分を搦め手で捕らえようとしているのではないか。そう疑ったのだ。

「ネイチャはそんな事しないよ!」

突如として小柄で大きく左右に広がった髪型のウマ娘が話しかけてきた。

「君は、何者だ?どこから来た?」

「マーベラスだよ☆トレセン基地から来たの!」

トレセン基地はある意味分かる。しかし、果たしてマーベラス☆とは何を指すのだろうか? 一体全体何のことか分からず、ルドルフは訝しんだ。

「マーベラスサンデー。サンデーと言わず、毎日がマーベラスらしいけどね。」

ネイチャがフオロー?する。マーベラスが何なのか、ルドルフは未だに分からない。

「マーベラスとは一体何なのかな?」

「驚き!奇跡!可能性だよ!あなたも私も私もネイチャもみんな みんなマーベラス☆この宇宙で唯一の真実在。」

思わず頭を抱えるルドルフ。中央は全てが地方と比べて段違いとは聞いていた。だが覚悟を決めて、ミスターシービーをはじめ、尽く粉碎し尽くすつもりで上京したのだ。

しかし、結果はご覧のあり様である。さきほどから翻弄されっぱなしである。「我ながら情け無いな。このようなたいらくでは。」

珍しくウマ娘前で項垂れるルドルフ。すると、マーベラスが近づいて来て、なだめてくれる。

「そんな事ないよ☆ 今のあなたはとつてもとつてもマーベラス☆」

気弱になった自分をなだめてくれるのはありがたい。しかし、連発されるマーベラス☆に戸惑うルドルフ。そこでネイチャに視線を送って助けを求めるも。

「先ほどからマーベラス☆（キラツ）しか言わないな。」

「そういう子だからね。」

ルドルフは考える事を止めた。

「今のあなたはうちのウマ娘保護プログラムの対象ってわけ。受け入れてもらえないかしら？」

ルドルフは再び考え始めた。

確かに今の自分は文字通り天涯孤独の境遇である。まさか実家まで電話番号自体が存在しないとは。つまり、最後の駆け込み寺が消滅したのだ。

（このありさまでは警察に保護を求めても、同じかもしれない。入管に收容されるワケには絶対にいかない。）

(更にウマ娘と人間は管轄が異なる。よつてたどり着くのは結局ウマソルジャー学園基地であるべきなのだ!) ナレーション。

「何か困ってるのかい? ネイちゃん。」

のんびりした雰囲気の商店街のおつちゃんが声をかけてくる。やたらとガタイがいい。他の店の店員たちも体格がしつかりとしていた。ルドルフは思う。様々な意味で中央はレベルが違うのだと。彼らはどうやらナイスネイチャの知り合いらしいが。

「新しい候補生の子かい?」

「まあ・・そんな所ですね。」

目が不自然に泳ぐネイチャ。何かを察したおつちゃんはつくね棒をはじめ何かと包んで渡して来た。

「ネイちゃんはとつてもいい子さ。悪い様にはならないよ。腹減ってんだろ? これでも食べて元気出しな!」

思わずゴクリとツバを飲み込むルドルフ。

「冷めないウチにたべなよねー。」

遂にルドルフはタレの香りに陥落した。

ルドルフ、ナイスネイチャ・マーベラスサンデー・商店街のおつちゃん、つくね棒に敗れる!

【日本ウマソルジャー・トレニングセンター学園

生徒会室にて】

「紹介しよう。トレセンビッグV 皇帝戦士 『会長』だ。」

出迎えたはトレセンビッグVの一角、女帝 エアグルーヴだった。さつそく会長を紹介する彼女。しかし……。

「ただのぬいぐるみではないか！」

磨き上げられた、如何にも高そうな立派な机。社長でもなかなか座れなさそうな立派な椅子。そこにはトレセン基地の会長にしてトレセンビッグVの一角、シンボリドルフのぬいぐるみが乗せられていた。

これにはルドルフも突っ込まずにはいられない。ちなみにスズカは既に突っ込み済みである。

「ですよー。」

ネイチヤも完全に同意する。会長がぬいぐるみなどずいぶんとぶっ飛んだ学園基地だ。

「この通り、シンザン大先輩は既に卒業されている。名簿を見るか？そこに歴代の会長の写真も飾られているだろう。」

「Vサインとは穏やかではないな。いや、ある意味穏やかなのか?！」

カミソリシンザンの異名を取った偉大なウマ娘。しかし、写真では案外はつちやけて
いる。ルドルフは思わず嘆息した。

(私の超えたい偉大な先輩が……。)

理想像が思わぬ形で破壊されてしまった。負けるな未来の絶対戦士!

「前会長は5冠ウマソルジャーだからな。ローマ数字とVictoryと掛けてVサインというわけだな。」

ルドルフはあつさり復活した。

(Vサイン。フツツ。悪くないな。)

ルドルフは徐々にこの世界のノリに毒されてきたようである。

「そんでもって皇帝戦士。我らがシンボリルドルフ会長は7冠ウマ娘つてわけ。滅多に姿を現さない伝説の聖戦士。そういう所、カッコイイよねー。(私には絶対に無理だよねー。)」

「7冠……だと?!」

再び動揺するルドルフ。

(6冠ならまだしも更にもう一山乗り越えて7冠とは。)

重圧! 圧倒的重圧! 今回ばかりは彼女も自分がシンボリルドルフと名乗っている事に違う感覚を覚えてしまった。

（遂にルドルフは9冠ウマソルジャーになる事を固く心に違ったのである！）ナレーシオン。

（勝手に私の心の内を決め付けないでしてもらいたいのだが。）

（しかし、ここまで来たらもう5【V】冠+指2本で7【VII】冠、更に+2【IX】で9冠ウマソルジャーを目指すしかない！）ナレーシオン。

（そもそもウマソルジャーではないのだが。しかし、名前が同じなだけの異なる役割ではあるが7冠か。既にこれ程の記録が達成されてしまったとはな．．。

まさか、私は5冠どころか7冠まで破らなければならないのか!? いや、冷静沈着にならなければ。ここの会長は私自身ではないのだから。）

（記録破りのプレッシャーに襲われるルドルフ。しかし、貴重な突っ込み役が足りない為、なかなか適切なアドバイスを受けられないぞ！）ナレーシオン。

（ルドルフのステータスに【記録破りのプレッシャー（通し矢）】が追加されました。）別のナレーシオン。

「そこで会長と被る名前を名乗っている件についてだが。」

なぜそこから話を始めるのだろうか？ 保護プログラムについての話から始めるべきではなからうか。ルドルフは訝しんだ。

「そもそもの話し。シンボリルドルフって正直言いにくいしな。アナウンサーがそう

「言ってるんだから間違いない。」

ヒシアマ長官が妙な事を言い始める。不敬ではないだろうか。ルドルフは再び訝しんだ。

「ラ行が連続するのが辛いとか何とか。」

マーベラス☆「じゃあ、とりあえずシンボリドルフで☆」

エアグルーヴ「ら抜きならぬ、る抜きか。なる程。」

なぜかそれに乗っかるエアグルーヴ。

「てっ、貴様ら! ゴホン。では話を戻すぞ。」

エアグルーヴはノリ突っ込みを取得しました。(ナレーション。)

「ノリ突っ込み。いいね! とってもマーベラス☆」

荒れる生徒会室。先代時代の静寂は既に存在しなかった。

(この私が偽物扱いとはな。非常に屈辱的だ。もはや、ここまで来たならば実力で認めさせるしかないのか……。)

憤るシンボリドルフ。誇り高き彼女にとって、文字通り噴飯ものの会話が交わされていた。

「あの、まずはウマソルジャー名としてブラックルドルフはどうかしら。ちようど黒は誰もいないし。それに、黒は皇帝戦士に憧れるには相応しい色だと思うのだけでも。本

名は後で考えるのはどう?」

「ブラックルドルフ!カッコイイね!とつてもとつてもマーベラス☆」

「いいじゃないか!あたしは問題ない。ウマソルジャー5人相手に勝てるしな!試験期間は必要だが正規扱いでも構わん。」

(身元確認とか色々すつ飛してる気がするんですけど、気のせいですよー。)

ヒシアマ長官の同意に突つ込むナイスネーチャン(ナイスネイチャ)する。シンボリルドルフはとりあえずブラックルドルフになった。

(伝説の皇帝戦士 シンボリルドルフに憧れるあまり、自分自身がシンボリルドルフと勘違いしている彼女。遂にブラックルドルフのソルジャー名を与えられたぞ!長きに渡る9冠ウマソルジャーへの戦いの日々。その火蓋が今切られる!)ナレーション。

「私がシンボリルドルフのはずなのだな。(そして、私のレースはどうなってしまうのか・・・。なるべく早くトレセン学園に戻りたいのだが・・・)」

「ブラック?どうしたの?」

突然、突つ込むブラックルドルフ。彼女は「誰一人として」ボケをかましていないにも関わらず、虚空に向かって突つ込みをしていた。スズカが心配するのも無理は無い。

「ブラック。あなた疲れているのよ。今日は本当に大変だったから。」

(ブラックルドルフを受け入れたつもりはない・・・のだが・・・)

勝手に話が進むにも関わらず、ブラックは突っ込みなかつた。既に突っ込みの残弾数がゼロとなっていたのかもしれない。

(いや、そうではない。そうではないはずだ。私は疲れてはいるが、正常なはずだ。まともたのは私だけか!)

ブラックは突っ込み症候群の初期症状を起こしていた。そんな彼女は今すぐ癒されなくてはならない!しかし、スーパークリークは北海道に出張中である。

こうして色々ウマ娘省のお偉方や各方面に根回しがなされ、「ブラックドルフ」が誕生したのである。

〔体育館にて〕

「そういうわけで、今日から日本ウマソルジャートレーニングセンター学園基地に所属したブラックドルフだ!仲良くしてやってくれ。ブラックと言うだけあって実力は折り紙だからな。ヒシアマ長官として保証しよう!」

不在の会長に代わり、長官が演台でブラックを紹介する。まずは第一印象が重要だと彼女は意気込む。

「紹介にあずかったブラックドルフだ。宜しく頼む。私は栄光ある・・・」

「ウマ娘とは決断により己を形成する者である。その決断に責任を取るウマ娘である。」

偉大なるウマ娘とはその様な・・・」

「唯一抜きん出て並ぶモノ無し。これこそが我がモットーであり・・・」

「戦力の適切な集中、そして徹底抗戦と見敵必殺こそ基本ドクトリンにして・・・」

延々と自己紹介から演説を続けるブラック。彼女は長話を好むようだ。しかし、候補生達はお偉方の長話自体には慣れていた。その為、いつも通りのバ耳東風といった所で特に気にしてもいない。

（突っ込みとは体力と精神力を大幅に消費してしまう、極めて高度な格闘技術なのだ！サイレンススズカやナイスネイチャが尊敬されているのはそういう事である。）ナレーシヨン。

しかし、ボケた会話や突っ込み所全開の展開そのものには何の疑問も持たれない。あくまでも「突っ込み」とは「格闘技術・マーシャル・アーツ・CCC的な何か」に分類されるのだ。

実力もヒシアマ長官直々のスカウトということに疑問視もされなかった。あのタイマン長官に認められたのだ。今さら食ってかかる意味など無い。まともに正面からやったらどうなるのか、想像するまでもない。

しかし、それにもかかわらず、候補生の中には彼女を快く思わないものがいた。恐れを知らぬ勇士、シンコウウインディである。彼女は長話が気に入らなかったのだろうか？

そうではない。では内容が気に入らなかつたのだろうか? そうではない。

(ぐぬぬっ! このウインディちゃんを差し置いて、カラーネームを取るなんて!)

Dr. マッドタキオン「説明しよう。ウマソルジャー名に色の名前入る事は、大変名誉ある事なのだ。」

彼女は最凶の噛み付きならぬ噛み切りウマソルジャーとなるべく、日夜歯を磨き抜き、ニンジン畑の周辺に無許可で穴掘りをして鍛錬? を積んできた。その切れ味は同僚にも恐れられている程である。

しばしば暴走機関車の如き噛み付きグセを発動してしまい、そのせいで候補生止まりだったのだ。その頭を飛び越え、いきなりほとんど正規待遇となつたのがブラックである。

余り面白くないウインディ。彼女にはその自慢の前歯による恐るべき切断技がある。その牙でブラックとの直接対決を望むんでいたのだ!

(危うし、ブラックドルフ! 恐るべきシンコウウインディの前歯が迫る! 負けるなブラック! 負けるなウマソルジャーV! 世界の夜明けは君たちにかかっているのだ! ルドルフは新世界で生き延びる事が出来るのか。

次回に続く!) ナレーション。

続く
!

第三話 先陣争い! 倒せ!ブラックドルフ 対 ト
ウカイテイオー & シンコウウインディ

【前回までのあらすじ】

(遂にブラックドルフとして「トレセン基地」日本ウマソルジャートレニングセン
ター学園基地に(入隊)入学したブラック!期待されし突っ込み新人として、D r・マッ
ドタキオンの陰謀を打ち砕け!9冠ウマソルジャーの栄光が君を待っている!)ナレー
ション。

ルドルフ「入隊するしかなかった。この表現の方が正しいと思うのだが。そもそも私
のレースは一体全体どうなってしまうのか。五里霧中とは将にこの事だな・・・」

(細かい事を気にしない事も正義!)ナレーション。

【ブラックドルフ 対 シンコウウインディ !

襲いかかる脅威の前歯】

その前に、ブラック出現に悩むウマソルジャー候補生がいた。彼女に与えられた名は
「トウカイテイオー」。絶対戦士だったり皇帝戦士だったりするシンボリドルフに憧
れる、一人の少女である。

【トウカイテイオーの憂鬱】

(分かつてるさー。まだボクは最強でも無敵でも無いって事くらい。)

最近トウカイテイオーは面白くない。グレてトレーニングしまくったり、暴飲暴食を避ける為、ハチミールの歌をカラオケですつと歌ったりしているだけだ。肝心のハチミールは全然飲んでいない。気分では無いからだ。

それどころか、原因不明の「ボンヤリとした不安」が彼女を包み込んで離さない。ライバルのマックイーンも今は不在である。彼女にモヤモヤした気持ちも打ち明けられず、どこか悶々とした気持ちを抱え込んでしまっていた。

夕暮れ時の自室でボンヤリと聖戦士ダンバイン！ではなく皇帝戦士の肖像画を眺めるテイオー。沈む夕日に照らされたカイチヨウ。

(いつもカツコイイな！カイチヨウは！でも・・・。)

いつもならば彼女の気持ちを晴らしてくれる憧れの絶対戦士。

カイチヨウ。神聖な存在である。憧れの存在である。自分がウマソルジャー候補生になったのは彼女の握手会での出会いがあったからだ。しかし、この漠然とした不安に追い打ちをかける出来事が起こってしまった。

よりによって、突如としてブラックルドルフというカイチヨウもどきが現れてしまったのである。大事件である。候補生抜きでほぼ正規待遇というではないか。実力の程

はヒシアマ長官直々のスカウトが立派に証明している。その実力が折り紙付きである事はもちろん分かっていた。

しかし、彼女にとって憧れの存在は唯一無二の存在で無ければならない。しかし、ブラックはカイチヨーもどきである。

テイオーはカイチヨーの写真集を全巻フルコンプリートした上、観賞用・保存用・使用用・特典付き観賞用・特典付き保存用・特典付き使用用と揃えてきた。だからこそ嫌という程分かってしまう。あのブラックが若き日のカイチヨーに見た目が何から何までうり二つだと。

それどころか、彼女と同じ「唯一抜きん出て並ぶモノ無し」という格言を吐いたのだ。まるで、こう主張しているかのよう。

(自分こそがカイチヨーの後を追う正統な存在であると。) ナレーション。

「ボクはいつかカイチヨーと同じ部隊で闘うんだ。それなのに。」

(このままではテイオーがダークホースに差し切られてしまうぞ! 危うしテイオー!) ナレーション。

「ボク、闘わなきゃ。カイチヨーもどきからカイチヨーを護るのはボクしかない。」

こうしてテイオーは密かにブラックに対してタイマン勝負を挑む決意を固めたのだった。

(カイチョー不在。マックイーン不在。いつの間にか、テイオーはシットリテイオーへと変化しつつあった。)

ナレーション。

その様子を影からうかがう怪しいウマ娘がいた。何をかくそうDr. マッドタキオンである。ちなみにダークマンハッタンCにはウマソルジャーVにを倒されてしまった後、有給休暇を取得させている。

「彼女はテイオー君か。確か好みはハチミーなるベトベトのかなり濃い飲料だったはずだが？」

前回、タキオンはマンハッタンに間違つて紅茶を用意してしまった為敗れた。その為、テイオーを怪ウマ娘の素質問あるならば、まずは彼女が好きな飲み物を調べなければならぬ。

実はハチミーを既に用意していたのだが、最近彼女はハチミーを全く飲んでいない。おかげで、この飲み物で正解か悩んでいたのだ。

(うん、これは難しいね。再現性に難有りと。精神的にも不安定ではこちら側との連携にも難有りと。今の段階で巨大化して一万倍の力を与えても、逆に何かしら干渉を受ける可能性も考慮に入れるべきかな?)

実験データを集めたかったものの、タキオンは一端立ち去る事にした。

〔ブラックドルフ 対 シンコウウインディ!〕

襲いかかる脅威の前歯〕ナレーション。

今日のテイオーはいつも通りカワイイ。ハチミールの歌をとて楽しんで歌っているからだ。

〔ハチミールはカイチョーもどきを倒したら飲むんだ♪〕

所が唐突にハッピーハチミールタイムに終わりが訪れた。

「イタイナー。誰だよもー。こんなところに穴を掘ったの。」

テイオーは人参畑の周囲に掘られた穴にはまつたのだ。

甲高い声で犯人を詰めるテイオー。その様子をざまあ見るとばかりに飛び出して見下ろすウマ娘がいた。言わずもがな、シンコウウインディである。

「ウインディちゃんの大勝利なのだー!!!」

これでブラックもイチコロだ!このシンコウウインディちゃんこそブラックを超えるウマソルジャーなのだ!」

子どもの様にはしゃぐシンコウウインディとそれをジト目で眺めるテイオー。ウインディとしては相手が悔しがつてくれないといまいち面白くない。

「なんで悔しがらないのだ!せっかくなシンコウウインディちゃんはようやく大勝利したのに!」

「はあ。こんなんで カイチョーもどき、どうやって『超える』のさ。それに倒すのはこの最強無敵戦士のテイオー様さ！」

へヘンと穴に落ちたまま腕を組んで見上げるテイオー。実はいつもの彼女とは少し様子が違うのだが、ウインディは気が付かない。

いつも通り懲りる事を知らない彼女。いまいち勝った気が付かない。テイオーに煽られて「ウガー！」と前歯を剥き出しにして威嚇する。額に少しばかり汗をかき始めたとき、テイオーが口を開く。

（それならどっちが先にカイチョーもどきを倒すか競争しようよ！）ナレーション。

「ヒシアマ長官つてさ。タイマン勝負を押ししてたよね？」

目を皿の如く見開くテイオー。

「それならタイマンでどっちが先にカイチョーもどきを倒すか競争しようよ！しよう。する。『倒す』。」

ブラックを倒したい！燃える闘魂 ウインディはたまたまここに強力なライバルを見出した。最もテイオーのカイチョー好きは有名だ。その先陣争いに彼女が名乗りを上げるのは当然だろう。

「ようしっ!」

闘志を漲らせるシンコウウインディ。ある意味、出会う相手は間違っていないなかったよ
うだ。こうして、タイマン勝負先陣争いが始まってしまった。ブラックドルフの全く
預かり知らぬ所で。

全てはカイチヨーもどきを倒す為に。

(頑張れ ティオー! 頑張れ シンコウウインディ!)

カイチヨーもどきを倒すんだ! ナレーシヨン。

【対 ブラックドルフ 昇降口にて】

「何だこれは?」

ブラック(仮名)は困惑していた。「はだしのジョー」なる全く意味不明な文書?が靴
箱に放り込まれていたからだ。

(あしたのジョー?なのか?)

打つべし! 打つべし! あのボクシング漫画の金字塔を愛読するウマ娘は実は以外に
多い。特に過酷な環境からレースの世界で腕一本での上がつてきた者達には人気が
高い。最もこの世界ではブラックが居た世界の様なレースは無いのだが。

(開催はされてはいるが、あくまでも陸上競技の一種目に過ぎないのが残念だ。大勢の

ウマ娘と人々を惹きつける華に欠ける。」

こうして当然ながらタイムマン勝負にブラックは現れなかった。

【食堂にて】

激辛麻婆豆腐。メイシヨウドトウが頼んだ一品である。

「あつーイタつーハヒーー！」

ピンクバクシンオーが悶絶していた。通常の3倍の辛さの激辛なのだから。しかし、ドトウは特に何も言う事無く食事を済ませてしまう。

「完敗です……。」

バクシンオーは激辛麻婆豆腐に負けた。すると、ちょうどグリーンズカが食堂に姿を見せる。

「この席、空いてますか？」

「あ、あいて、いいですよ……。」

激辛に敗北したバクシンオーの隣に座るズカ。同じウマソルジャーV同士、仲良く団欒の時間を楽しもうとしていた。しかし、彼女の平穏な一時は唐突に儚くも終わってしまう。

「たーのーもー!!！」

大音声でトウカイテイオーが乗り込んで来たからだ。

「恐れ多くもカイチヨーっぼいカイチヨーもどきはどこだあ!」

「カイチヨーもどきとは失礼な!」

バクシンオーがバクシンの的に反応、

「あ! いた。」

あつさり見つかつてしまったブラックドルフ。ハチミーの歌を歌い上げながら、なぜか途中からテイエムオペラオーが合流して来る。

「どつちがカイチヨーと一緒に闘うか勝負だ!」

「一人のウマ娘を巡つて争うとは、なんて悲劇的なんだ! 止めたまえ君たち。争いは可憐な華と違つて何も生まないというのに♪」

何気に仲裁に入ろうとするオペラオー。彼女は実は以外にも常識的である。表現方法が風変わりなだけで。

「あー、もううるさい! 静かにして!」

「君のハチミーの歌はいつもと違う音色だ♪可憐な君には似合わない♪」

オペラオーとやり合うテイオー。食堂は明らかに騒がしく、おかしな仮面を被つたウマ娘が増えていた。

「これでは話がすすまないな。仕方がない。外に出るぞ、テイオー。オペラオー? さん。

仲裁に感謝する。しかし、決着はつけなければならぬらしい。」

「ボクは見届ける事しかできないのか♪それがくオペラオーのさくさくめく♪」

【競技場にて】

「で？さつさとブラツクルドルフと勝負がしたいって？テイオー。」

ルドルフはヒシアマ長官が間を取り持つ事を少しだけ期待していた。

「ならタイマンだ！正々堂々勝負しな！」

どうやら相手を間違ってしまったようだ。

「シンコウウインディちゃんが先なのだー！」

地面の穴から突如として飛び出して来た彼女。手には「はだしのジョー」が握られている。

ウインディ「テイオーより先に送り付けたぞ！」

ヒシアマ長官「そうなのか、ブラツク？」

ブラツクルドルフ「確か・・・そうだったと。」

ヒシアマ長官「なら話は早い。ウインディが先だ！」

ヒシアマ長官の裁定により勝ち誇るシンコウウインディ。既にブラックに勝った様な勝ち誇った表情を前歯と共に見せつける。テイオーに向かって。

「いいから、さっさと始めてよー。次ボクの番だからね。」

「ではブラックルドルフ 対 シンコウウインディ のタイマン乱取り勝負、始め!」

ドカンと土がめくり上がり、ウインディが大口を開けて突進する。短距離における瞬発力はかなりのもので、ルドルフは体捌きで避ける。

(この瞬発力は! 出来る! 正規の隊員になれないのは惜しいな。)

地面すれすれを飛ぶウインディ。大地の僅かな起伏を基点に今度は回転しながら跳びかかる。凶暴な前歯がギリリと光る!

「だが、単純過ぎてコースは丸わかりだ!」

ルドルフは先程と同様に体捌きでかわそうとするが、

「引つかかったのだ!」

ルドルフと交差する瞬間、ウインディは閉じていた両手両足を広げた。ブラックは3本目まではかわしたものの、右手に上着が文字通り引つかかってしまった。バランスを崩すルドルフ。

しかし、次の瞬間ウインディの視界は暗転した。服を掴んだ右手を基点に、払い腰をしかけられてしまったからだ。そのまま、寝技で固められてしまい、ウインディは自慢

「待ちな!その勝負、このマックイーンが引き受けた!」

その場でヤケに絵になる立ち姿をした彼女。イカした表情で親指を立てながら、自身を指さして。

((誰?) かしら?) だよ?) だ?) マイケル・ジャクソン?)
その場の全員が総突っ込みをした。

次回 ニセマックイーン登場!

第四話 衝撃、ナレーション乱入 ニセマックイーン登場！ 脅威！ビワハヤヒデの頭

【前回までのあらすじ】

（ニセルドルフを倒せ！トウカイテイオーはカイチョーもどきを倒さなければならない！一方、単純に前歯を使いたいだけのシンコウインディ

ゴールドシップ「うるせー！○○○ちゃん、ドロップキック！」。

しかし、仕掛けたウインディはブラックルドルフに倒されてしまった！頑張れテイオー！無敵最強テイオー様がニセルドルフを倒すはずだ！君の使命は決まっている。

ゴルシ「うるさーい！これ以上はこのマックイーン様が黙ってないぜ！」（ゴールドシップに乱入ペナルティ）

ナレーションはゴールドシップの攻撃を受け、沈黙しました。次回からは替わりましてナレーションBがお送り致します。

【ナレーションに乱入!?ニセマックイーン登場！】

突如として現れた謎のウマ娘。ニセマックイーン。

明らかにマックイーンでは無いマックイーン。本物の彼女はポケもシリアスもシリ

アルもこなすパクパクの名女優である。しかし、こんなに背は高くもないし、スタイルも異なる。何より勝負服のスタイルも色も全然違うのだが。

「ゴルゴル星より現れし、このマックイーン様をお探しかい?」

「誰? じゃましないでよ。もおー!」

テイオーは腕を振り回して怒った。タイムマン勝負に水を差されたのだから当然である。

「それに、マックイーンの勝負服は赤くない!」

「あれ? おかしいな。〇ー〇〇〇ツ〇〇つて言っただけけれど。まっいいか、それも面白そうだし。」

勝手に納得するニセマックイーン。テイオーはその様子をジト目で警戒する。

「ゴホン! それでは気をとり直して。まずはそう焦るなつて、なあテイオー。」

さつさと勝負服を換装してマックイーン風に着替えるニセマックイーン。その素早い着替えにはテイオーも思わず目を見張る。

「ほほほほ、パクパクですわ。」

「マックイーンはそんな事言わない(案外言うかもね)。」

テイオーに突っ込まれるニセマックイーン。だが、黒いサングラスに仁王立ちしたまま動じない。そして唐突にテイオーの方を振り返つて言う事には、

「分かんないのかテイオー。ブラックを倒した所でカイチヨーが喜ぶのかよ。内ゲバもいいところだぜ。あいつだったら、そんな事許さないだろーな。ガッツが足りないんだよ、ガッツがさー!」

「それは・・・そうかもしれないけど。だったら、ブラックドルフって誰なのさ。」

調子を狂わされてうなだれるテイオー。

「テイオーと言ったかな?」

ブラックドルフが近づいてきて思わず汗ばむ彼女。ニセルドルフのはずが本物そっくりの風格を纏っているものだから堪らない。

(本当にそっくりだ。昔のカイチヨーに・・・ボ、ボク、どうすればいいんだろう。)

「なぜそこまで焦るのだ。」

「・・・?!」

黙るテイオー。しかし、ブラックドルフの真つ直ぐ見据えた視線からは逃れられない。

「勝負あつたな。」

判定を下すヒシアマ長官。しかし、流れに水を差す野暮な真似はしない。先ずは、テイオーと「ルドルフ」の邂逅を見守る事にしたようだ。

「何も焦ってないよ!第一、ニセモノが本物みたいな事を言うなー!」

「今はこの私がニセモノかどうかは関係無い。『そこは気にしなうぜ。(ニセマックイーン)』君は今まで他のウマ娘にわざわざ突つかかる真似をしてきたのか?レースはどうした?この勝負はテイオーの名にふさわしい王道たるものだろうか。私には脇道に見える。真つ直ぐゴールを見据えるウマ娘に、この様なぶざまな勝負は必要ない。ただレースで決着を着けるだけだ。何が君に脇道へとそらさせた?」

「……。」
謎の迫力に思わず押し黙るテイオー。ぐずつき、そのまま肩をすくめると、走り出してしまった。

「危なかつたな。ありや、怪ウマ娘化寸前だったぜ。お疲れさん。ここじゃ、安心してあたしはボケ役もこなせない。ヒジヨーにキビシーー!」

「怪ウマ娘化だと?」

驚くブラツクルドルフ。初めてピンクバクシンオーと会った時の事を思い出す。怪ウマ娘を倒す。その時はトレセン学園基地が作られたと言っていた。

「聞いていなかったのか。Dr. マッドタキオンのダークマンハツタンCだって、元はウマソルジャーの候補生なのさ。早い話が同士打ち、自分のケツを自分たちで拭いているだけさ。」

そうこうしているうちに集まる五人の戦士達。その名も。

「出たなニセマックイーン！今日こそこのレッドペガサスがキャロットキックでたおす！」

「グリーンズスカ！マックイーンの子モノは放つてはおけないわ。」

立ちはだかるウマソルジャーV達。しかし、ブラックを入れても3人しか揃っていない。

「ブルー！ピンクウララ！後、誰かしら？」

「ピンクバクシンオーです。ピンクバクシンオー。ピンク被りで忘れないでくださいスズカさん。」

ピンクバクシンオー登場！

「バクシンレーダーに感有り！怪ウマ娘が近くにいますよ！」

ブルースカイ「また壊れてたりして〜。」

「してません！委員長クオリティーですから！」

「今日も騒がしいな、お前ら。」

ウララはまだ到着していなかった。足が一番遅かったからである。

トレセンビッグV候補生、ナリタブライアンはぼやいた。

【暴発！ ビワハヤヒデの頭 出撃せよVictoryロボ！】が開始されました。

モブウマ娘「大変だ!栗東寮が毛むくじやらに!」

慌てたウマ娘が駆け寄って来る。幸い巻き込まれた被害者はいない。タイムン騒ぎで大勢のウマ娘達が闘技場に居たおかげである。

ヒシアマ長官「まさかDr. マッドタキオンの仕業か?!てか、ニセマックイーンは?」
ニセマックイーンは既に姿を消していた。

スズカ「タキオン、おかしな薬品をよく作っていたから。」
しかし、ナリタブライアンは訝しんだ。

「そいつはおかしな話だ。まだタキオンが基地の科学者だった時、姉貴はわらにもする思いであいつに頼った。結果は惨敗。タキオンの奴は姉貴の頭に負けたのさ。さすが姉貴。」

ヒシアマ長官「フジはどうした?栗東の寮長だろう!」

モブウマ娘「それが行方が知れずで!」

ヒシアマ長官「仕方ない。ニセマックイーンは後回しだ!先にあの毛むくじやらを何とかするぞ!」

ブライアン「クソツ!門限を守れと言ったのはどこのどいつだつ。」

【さくらば!・ウマソウルジャーV wish my fate タキオン始動編が開始

されました。」ウマ娘たちの記憶の同期を開始します。

く 唯一抜きん出て並ぶ者無し く

日本語訳としてはそうなる英文が見える。ここは栄えあるトレセン学園の生徒会室。シンボリルドルフの根城である。

しかし城主たる『独裁者』ルドルフが目指すは既に次の段階にこそある。

くあらゆる全てはウマ娘の幸せの為に く

その為の学園。その為のウマソルジャーV。そうではないかね？覚悟を決めた以上は逡巡など無意味ではないか？

(フジキセキ……)

ルドルフの憂いに満ちた眼差しに一人のウマ娘の姿が浮かび上がる。

ちようどその時、足音が部屋の前でコツコツと音を立てて止まった。

「呼んだかい。」

部屋に入って来たのはヒシアマ長官ことヒシヤマゾンである。タイムマン長官はやや疲れを感じる表情で命令を伺う。

ルドルフは内心想う。昨今取り巻く状況はトレセン学園にとって好ましものではない。更には時間が美浦 栗東内紛からさして経っていない。だからこそ迅速且つ果断に対処しなければならない。

「ビッグV 会長として命じる。ウマソルジャーVの指揮官としてフジキセキを捕縛しろ。ウマ娘対策課の者達が動く前にだ。わかるな?」

しばしの沈黙と共に両者の間を無言の矢飛び交う。しかしその矢を皇帝は受けきり、そしてなお長官を見つめるのだった。

「分かった。」

【記憶の同期を正常に完了致しました。】

「フジ先輩……。あなたはなぜ?」

悲しむスズカ。何が起こっているのかブラックルドルフには分からない。勝手に周りは納得し始めたのでいつも通り訝しんでいた。

「4時の方角、距離400、怪ウマ娘、来ます!」

遂に闘技場に大量の白い髪をなびかせたウマ娘が現れた。ピワハヤヒデそのウマ娘である。

「はははははっ!私は!私は遂に私自身の髪を制御したぞ!」

やけに高いテンションで喜ぶビワハヤヒデ。ブライアンもはなをすすりながら涙ぐむ。

「ずいぶんと苦労したからな。姉貴は。やっと爆発頭から解放されたか。」

「ブライアンさん。あなたのお姉さんが怪ウマ娘になっているのだけれど。タキオンに負けてるけれど。様子もおかしいと思うのだけれど?」

それを聞いたブライアン。先ほどとはうって代わっていきなり怒髪衝天を突き、拳を振り上げた。

「許さんタキオン! 私が姉貴を助ける、邪魔するな!」

「いきなり突っ込むのは止めた方が……。それに、突っ込みソルジャーは私の役目だから。」

しかし、ブライアンはスズカの制止を振り切って、そのまま大量のビワハヤヒデの髪に飛び込んでしまった。すると、たちまち凄まじいくせ毛に縛り上げられて動けなくなってしまう。彼女は複雑怪奇に絡み付く髪質を捌ききれなかったのだ。

「ブライアン。私のカワイイブライアン。今日からサラサラストレートヘアとは永遠におさらばだな。」

「クソが! 姉貴! 目を覚ませ! 姉貴の悩みを私は分かかってやれなかった!」

まさか実の姉から髪質を改造されると思わなかったブライアン。その脳裏に数々の

思い出が甦る。

昔話をしよう。まだ幼かった頃の話だ。ビワハヤヒデは頭を洗う度に滅茶苦茶な髪型になってしまふのをからかわれた事があった。深く傷ついた彼女はしばらく頭を洗う事を止めてしまった。その結果、ハヤヒデの頭はクサクなってしまった。

昔話をしよう。まだ幼かった頃の話だ。ある日ビワハヤヒデは完璧に髪を整えて友だちのウマ娘の誕生日パーティーに行こうとした。しかし、突如として突風が彼女を襲う。幼かったハヤヒデの頭は一瞬にして滅茶苦茶になってしまった。彼女がようやく髪を整えて着いた時には既にパーティーは終わっていた。

昔話をしよう。まだ幼かった頃の話だ。業を煮やしたビワハヤヒデはバリカンで自分の頭を勝手に刈り上げてしまった。結果は悲惨を極めた。あちこちハゲてしまい、長さもバラバラだったからだ。彼女はしばらく学校を休んだ。

(ロクな思い出がねえ!)

ブライアンは悩む。確かに怪ウマ娘は倒さなければならぬ。しかし、ウマ生史上初めてビワハヤヒデは自分の髪を完全に支配している。長年隣で見てきたからこそ分かる。

(いっその事このまま、今の方が幸せかもしれないな。なあ、姉貴……)
彼女の心が揺れかけたその時、ブラックルドルフが吠える。

「甘ったれるかビワハヤヒデとやら！己の髪さえねじ伏せられないウマ娘がダービーを制覇出来るものか！ブライアン！ハヤヒデの目を覚まさせるぞ！」

【校舎裏にて】

一方、テイオーは本物に怒られた時の様にシユンとしてしまっていた。

（ボク、何やってるんだろう。勝手に暴走までして。結局何がやりたかったの？）

「走りたかったのさ。」

校舎の影から突如として現れたニセマックイーン。なぜかキラキラしたオーラを放っていた。

「誰だよ、もー！」

テイオーはニセモノのカイチヨーに負けてすっかりしよげ返っていた。

「宇宙ウマ娘、超能力ウマ娘、未来ウマ娘、異世界ウマ娘。ゴルゴル星から来た正義の使者。恋はダービー。好きなものを選びな。」

「意味わかんない！」

「ブラツクルドルフもか？」

ニセマックイーンの問いにテイオーはうなづく。

「あいつはカイチヨーさ。あたしが保証するよ。あのカイチヨーに怒られた時と同じ感覚だったろ？」

「・・・それはそうだけど。」

肯定したくは無いが、体は正直だった。確かにあれはまさに皇帝の神威の一端であった。まだ未完成ではあるが。

「あいつはまだ力不足だ。助けてやってくれ。てか、助ける。」

「エー。」

「ほれほれ。このまんまだと怪ウマ娘討伐の手柄までニセモノに盗られちゃうぞ。それでもいいってか? テイオーさんよ。あと、ハチミー後でおごるからさ。一番高いやつ。機嫌直しなよ。な?」

しばしば逡巡するテイオー。しかし、答えは初めから決まっていた。

「ボクは・・・必ずカイチョーと同じ『レース』で戦つみせるんだ。だから、こんな所で立ち止まったりしない!」

「いい『レース』を期待してるぜ! テイオー。」

ニセマックイーンはサングラスを外すと眩しそうに彼女の背中を見つめるのだった。(ゴールドシップはクールに去るぜ。)

【闘技場にて】

次第に白い大量の髪の毛が巨大なウマ娘の姿を取り始める。もはや一刻の猶予も無

い中、ブラックは叫ぶ。

「長官！早く対策が必要だ！」

「任せな！クソっ！フジめ、やりやがったな！ トレセンビッグVにヴィクトリーロボの発進の許可を求む！」

「仮権限だが、私が許可を出す。最も姉貴に簡単に勝てると思わない事だ。」

「ブライアン、あなたどちらの味方なの？」

「私はいつだって姉貴の味方さ。」

どうにか脱出したブライアン。それにもかかわらず姉貴を称えるシスコンぶりに、内心スズカは呆れていた。

ブラックルドルフ「ヴィクトリウमारロボ？はまだなのか？」

モブモブウマ娘「大量の毛髪で身動きが取れないとの報告が！」

無数の触手の如きビワハヤヒデの頭。まるで現代のメデューサにさしものウマソルジャーVも苦戦する。

(このままでは基地が！)

もはやここまでかと思われた時、一人の小柄なウマ娘が現れた。

「最強無敵のテイオー様。ここに復活！」

「テイオー!?脇に抱えているのはシンコウウインディ!どうして簀巻きに?!」

突っ込むスズカ。すると、影からブルースカイがユラリと現れた。

「私が捕獲しといたのさ。全然大変じゃなかったけどね。後は説明通りによろしく〜テイオー。ZZZZZ。」

「ボクに任せて!」

どことなく遅しくなったテイオー。全身をなぜか迷彩にして、小脇に無理やりシンコウウインディちゃんをかかえている。おそらくはそのせいだろう。

(「テイオー。良く帰ってきたな。頼りにしているからな。」)

ブラツクルドルフは実際そうしたセリフは言っていない。しかし、テイオーはブラツクがそう褒めたこと「認識している」。(それで良いのだ。)ナレーション)。すると彼女は反射的に嬉しくなってしまう、勝手にアドレナリンで大興奮していた。

「ウインディちゃんを放すのダー!」

暴れようとするシンコウウインディ。しかし、簧巻きにされているせいで、歯噛みする事しか出来ない。

「そうか!そういう事か!でかしたテイオー!」

ブラツクはブルースカイとテイオーの意図に気づいて褒める。今度は本当に褒めているのだから問題なからう。テイオーは照れ隠しにそっぽを向いた。

(ボク、結構嬉しいのかな?でも、カイチョー程では無いけどね。)

ブラックルドルフの言葉は確かにテイオーの脳内物質に影響を与えている様だ。

ブライアン（姉貴の髪、一束ぐらいもらってもばれないな。ぬいぐるみの中綿にでもするか。）

スズカ（ブライアン……。声に出てる。）

（遂にブラックルドルフとトウカイテイオーの夢のタツグが実現したぞ！リーサルウエポン、簧巻きのシンコウウインディが遂に火を噴く！次回！決着と大怪物オグリーン現る！次回もみんなで見よう！）

復活したナレーションB。

続く。

第五話 ビワハヤヒデ 対 Victory ウマロボ
! 大食い大怪獣オグリン 覚醒か!

【ビワハヤヒデ 対 Victory ロボ!】

(前回までのあらずじ。暴走するビワハヤヒデの頭を止める!)

ニセルドルフに憤るティオーとシンコウウインデイ。

しかし、ニセマックイーンに諭されたティオーは再び闘う決意を固めるのだった。ブルースカイの助けを借りて、簧巻ききのシンコウウインデイと共に立ち向かえ! ナレーシヨンB。

【怪ビワハヤヒデ 対 ティオー&ウインデイ】

「ウインデイちゃんをはなすのだ!!」

激しく歯噛みするウインデイ。簧巻きにされているのだから当然である。ティオーはウネウネ動くビワハヤヒデの中に彼女を放り込む。

「どんどん噛み付いちやって!」

華麗なティオーステップで次々毛髪を捌いていくティオー。大量の髪がカミキリムシの如く切られていく。流石は凄まじい切れ味を誇る前歯である。効果は抜群だ!

「うがー！なんでこんな事に！」

「ウインディにはちょうどいい薬だ。散々嘔み付きで試験落ちしても懲りないときたかならな。」

ヒシアマ長官は腕組みしながら勝手に納得していた。

「行くぞテイオー！」

ブラックは髪の毛をウインディちゃんの前歯にとりあえず挟み込む。

「もう、でも任せて！」

簀巻きウインディは逃げられない。おかげで工場の切断機の如くかみ切るしかない。

みるみるうちに切断されていくビワハヤヒデの髪。そこら中に白い美しく髪がたまっていく。

「力こそ正義！ウマソルジャーVに敵はいない！」

レッドペガサスは腕組みしながらご満悦だった。

一方、ナリタブライアンは十分な量の髪を確保したのでご満悦だった。

「なーんだ。サイキョームテキのテイオー様の前では、」

「ウインディちゃんを忘れるなー！」

「ごめん、ごめん。後でハチミーおごるからさ。機嫌直してよ。」

気が付けばほとんど丸裸になっしまったビワハヤヒデ。

「テイオー。よくやったな。」

ブラックに褒められるテイオー。ニセルドルフにも関わらず、まるで神経を直接弄られたかの様に勝手に嬉しくなってしまう。簀巻きのウインディをほつたらかして照れていた。

「こ、今回だけだからね! (でもブラックがカイチョーもどきなのは納得してなんだから。)」

(とりあえず一件落着したブラックとテイオーの対立。今後ますますの活躍が期待出来るだろう。) ナレーシヨンB。

「姉貴……。今助けてやるからな!」

「後はハヤヒデ自身を捕まえるだけね。元に戻せるといいけれど。それとウララはまだ?」

心配するグリーンズズカ。ウララ不在のまま話は進む。

(果たして怪ウマ娘化したビワハヤヒデは元に戻せるのか!) ナレーシヨンB。

「おっと、そう上手くはいかないよ。彼女はバナナの誘惑には勝てないのさ。」

「Dr. マッドタキオン! やっぱりお前の仕業だったのか! 必殺、キャロットマンキーツク!」

ビコーペガサスはキックをお見舞いしようとするも、大量の毛髪に邪魔されて上手くいかない。

バナナを手にして現れたタキオン。さっそく皮を？こうとするが、こちらも上手くいかない。

「この科学者に有るまじき萌え袖が！」

（自分で自分に突っ込むタキオン。しばしば考える彼女。引きちぎろうにも頑丈な繊維のせいで直ぐには出来ない。ならば、腕まくりをするのが良いだろう。頑張れタキオン！）ナレーションB。

「それには及ばないよ。ここにちょうど良い生きた切断機があるからね。シンコウウインディ。簧巻きにされたままでいいのかな？良いように利用されて満足かい？」

「つ、疲れたのだ・・・。」

「しまった！ウインディが！」

せつかく最後の直線で差し抜けそうにも関わらず、噛み付いたせいで勝機を逃した時の様である。G1短距離初代王者でも噛み付きは止められないのだ。

「そうかいそうかい。ならば、はい！強壮剤。」

「もう、いやなのだー！」

しかし、簧巻きにされているため、楽々液体を口に流し込まれるウインディ。復活し

た前歯は萌え袖をあっさり食い千切った。

「これでバナナの皮を剥くのに支障をきたす事もない。」

さっそく剥かれたバナナがハヤヒデの口に入れられる。

バナナ大好きビワハヤヒデ。かなり大きなモノにもかかわらず、たちまち5秒で咀嚼してしまった。バナナ先輩と言われる所以である。

「バナナを食べたビワハヤヒデくんは巨大化して復活する! 一万倍もの力を手にして! カフェの時は失敗したが、おのれウマソルジャーV!」

「カフェなのに紅茶を用意したあなたのせいでは?」

スズカは突っ込むが、巨大化は止められない。

ペガサス「ヒシアマ長官! もうアタシたちムリー!」

(山のような髪の毛に埋もれるペガサス。しかし、ピンチにはヒーローが駆けつけるものだ!) ナレーションB。

ピンクウララ「格納庫のロボットが復活したよ!」

ブルースカイ「シンコウウインディにあらかじめかみ切らせておいたのさ。ただ再整備が大変でね。ネイチャにも手伝ってもらったよ。」

ヒシアマ長官「ブラック・テイオー。今までよくやったな。でかした! Vict
ory ウマロボ 発進だ!」

ウマソルジャーV（（（みんなのニンジンをついにー！）））

百万ボルトの輝きを放ち、遂にウマロボがやって来る。

「何だ、これは・・・？」

来たのは五台の巨大な芝刈り機だった。どう見てもロボ的な何かには見えない。色がピンクなのはどういう事情だろうか。

ウマソルジャーV（（（変形合体！ウマソルジャーV Victory ウマロボ
見参！）））

五人がそれぞれの芝刈り機に乗り込むと、ウゴウゴ言いながら、合体しだす。その間、ブラックルドルフとテイオーは野次ウマ娘たちの避難誘導をしていた。

（カイチヨールはカッコイイのは当然だけど、ブラックも結構・・・。）

まるで本物の如く現場を指揮するブラックにテイオーはカイチヨールの面影を重ねざるを得なかった。十分では無いにしろ、憧れの彼女に近づかんとする迫力は認めざるを得ない。

（ボク、負けない！ブラックには負けない！）

決意を新たにするテイオー。遂にブラックをカイチヨールと闘うまでのライバルだと認めたのだ。

（もちろん、サイキョームテキのテイオー様は負けないけどね！）

巨大化したビワハヤヒデ。再び髪を鞭の様にしならせ、

合体したVウマロボを攻撃して来る。

このままではブライアンの時の様に、髪に絡め取られてしまうだろう。危うし! Vウマロボ。危うしウマソルジャーV。

「あれをやっちまいな! タイマン必殺技だ!」

ヒシアマ長官が叫ぶ。すると、ウマ娘ならば全員が持つ謎空間。背後のアイテム空間から巨大なニンジン型の剣が取り出された。

「Victory キャロット ソード だ! キャロットマンの勇気をみんなに! 凶刃! 無敵! 最凶!」

ダーティー・ハリー症候群にでもかかったのか、ハイになるペガサス。グリーンズズカその様子に少し引いていた。

(勇気にしては言葉使いが物騒な気が……。これが正義のウマソルジャーVの姿なの?)
襲いかかる巨大ビワハヤヒデの髪を、燃えるニンジンソードが焼き切っていく。当然独特の凄まじい悪臭が放たれているのだが、気にはしていない!

レッドペガサス「やった! これがキャロットマンキックの力だ!」

グリーンズズカ (キックは全然関係気が……)

攻撃が通用しない事を悟った巨大ビワハヤヒデ。遂にまえかきをして突進の前兆を

見せてくる。

「まずいな。Vウマロボ は変形合体の芝刈り機だ。あれだけの質量をまともに受けとめればバラバラになってしまう。タイマン技で何とかしな！」

「委員長でも無茶ですよー！」

焦るヒシアマ長官に困るピンクバクシンオー。だが、ペガサスは諦めない。

「もう一度、五人の力をニンジンソードに！」

「セイちゃん。もうむくり〜。」

すると、ペガサスはふところから五本のニンジンを取り出した。

「じゃあこれ食べて！ヒシアマ長官からもらったの。」

「むがつー！」

ペガサスは寝ようとしていたブルースカイの口にニンジンをつっ込んだ。ニンジンのリコピンパワーが正義のウマ娘を立ち上がらせる！

「これはドーピングでは？」

ブラックは訝しんだ。

「細かい事を気にしない事も正義！」

ブラック「全然細かくない気が。」

ペガサス「勝てば良からうなのだー！」

スズカ「それ、ヒーローのセリフじゃないと思うけど。」

戸惑うスズカ。彼女の突っ込みライフポイントはゼロに近い。

テイオー「避難誘導終わったよー。(レッドって以外と天然鬼畜なのかな?)」

ヒシアマ長官「よくやったなテイオー。これで心置きなくアレがやれるな。全員退避ー!退避ー!」

高熱で燃え上がるニンジンソード。ウマロボは襲いかかるハヤヒデを前にぐるりと巨大な日輪を描く。それがバリアの役割を果たしてハヤヒデは前には進めない。

((((ニンジン焼き袈裟切りアタアツク))))

炎の日輪を斜めに切り裂くVウマロボ。ハヤヒデはとっさに髪の手でタテを形成する間に合わない。そのままタテは焼き切られて、彼女は爆発した。ついでにDr. マッドタキオンも爆発した。

「おのれ!ウマソルジャーVうううっ!」

スズカ

「何でタキオンまで爆発するのー!」

ペガサス「正義は必ず勝つ!参ったかDr. マッドタキオン!」

ブルースカイ「ウララ、結局間に合わなかったね。」

スズカはもう突っ込む事しか出来なかった。大穴には元の大きさに戻ったハヤヒデ

が倒れている。直ぐさま駆け寄るブライアン。大穴にさっそうと飛び込むと、容態を確認する。どうやら命に別条は無い様だ。

「姉貴！目を覚ましてくれ、姉貴！そこまでクセ毛に悩まされていたとは知らなかったんだ。クソッ！何が生徒会だ！何がトレセンビッグV候補生だ。私は姉貴の事を何にも……。」

ハヤヒデは目を開く。クセ毛という言葉に反応したのだ。

「サラサラ流れるストリーヘア。一度は手にしたっ……。ブライアン。お前は自分の髪を大切にな……。」

「姉貴いいいいいい！」

悲痛な叫び声を上げるブライアン。繰り返すが命に別条はなく、ウマソルジャー生命にも特に問題は無い。しばらく休めばそれで十分だろう。

「姉妹で髪質が違い過ぎた。それが今回の悲劇をもたらしたのか。だが、ダービーは自分の間お預けだな。」

（ダービー？『恋はダービー』、確かテイオーの持ち歌だったはずだけど。）スズカは訝しんだ。

一方、ため息をつくブラックルドルフにテイオーが近いてきた。

「その……。さっきのブラック。ちよつとカッコよかったよ。ちよつとだけだからね！」

「お互いよくやったな。テイオー。」

ブラックはテイオーの頭を撫でる。テイオーも満更でも無さそうな表情だ。

（その時！ブラックルドルフ、いやシンボリルドルフの脳内に電流が走る！）ナレーションB。

（これは、この光景を、私は前に見た気がする。確か、

有馬記念か・・・。）

困惑するブラック。知らないはずの記憶が蘇る。当然、

彼女はまだ有馬記念には出走した経験などない。ましてや後輩を褒め称えるなど有り得ない。

（テイオー。きみはいつたい何ウマ娘なんだ・・・？）

一方、こちらはグリーンズスカ。突っ込みウマソルジャーとしてやってきたものの、ふとブラックの「ダービー」と言う言葉に反応していた。

（ダービー？逃げ切りシスターズの持ち歌かしら？逃げシス・・・。）

こうして、数々の出会いと波乱の展開を見せたビワハヤヒデ事件。遂に幕を下ろしたのだった。

事件解決後、シンコウウインディには特別功労賞が授与された。一方、ブライアンとビワハヤヒデは忽然と姿を消してしまった。トレセン基地のお偉方ビッグVさんがあ

ちこち火消しに回るハメになったのも当然である。

また、いつの間にかフジキセキが怪ウマ娘として認定されており、寮のウマ娘たちが大騒ぎする事となった。

【商店街にて】

ブラックはナイスネイチャ・マーベラスサンデーと商店街に来ていた。

「ブラックちゃん、ありがとうな。これ持つてつてくれ。」

焼き鳥屋のオッチャンが色々クシを包んでくれる。

「ほら、ネイちゃんの分もあるからさ。」

「アタシは、ほら、大して活躍してないからさ……。」

「そんな事ないよ！ネイチャはマーベラスだよ☆」

渋るネイチャ。実際は簀巻きのウインディを上手になだめすかしながら、器用に駆動系に絡まっていた毛髪を取り除いていたのだが。

「ありがとう。実はやる事があってね、先に帰るから。オッチャン、ブラックとマーベラスの事宜しくね。」

ネイチャはそそくさと商店街を後にする。その後ろ姿には諦めが張り付いていた。

「彼女には自信が無いのか？」

「とつてもいい子だし、いつもいいところまでいくんだけどねえ。この前だって商店街

に被害が出てないか確認してくれたし。」

オッチャンは優しく、しかしどこか寂しげにネイチャの後ろ姿を見るのだった。

「まだまだマーベラスが足りないんだね☆ならもっとマーベラスにしないとね☆」

【カサマツトレーニングセンター学園基地にて】

その頃、カサマツでは大変緊迫した事態が発生していた。

「カサマツにて〇の微細な精神活動を確認! 警戒態勢を要します。食欲腺、線量が微増しています!」

「特殊災害警戒態勢 第一種警戒態勢を取れ。カサマツ基地より日本ウマソルジャー・トレーニングセンター学園基地直ちに打電! 直ちに移行の恐れなくも、第二種警戒態勢に移行の可能性あり! 警戒を要すると!」

大怪獣オグリン。脅威の食欲腺を放つ怪ウマ娘が遂に復活しようとしていた。

(しよせんは地方では抑えられないかもしれないという事か!)

カサマツの長官は悔しかった。しかし、時は来たのだ。

(もしもの時には中央のウマソルジャーに託するしかない。)

(中央だけでは足りなければ、関西に応援を頼むかもしれない。名古屋の味噌カツ・手羽先・名古屋コーチンのラーメン店は恐らくは守りきれまい。〇は関西で食い倒れるか? それとも中央か? 防衛ラインを東西に張らなければならぬのは痛い。ウマソル

ジャー総攻撃というわけか。白きイナズマに応援を要請するか？)

カサマツの長官は名古屋の名物料理の事を考えると、

ひたすら胃袋が痛かった。彼女には今すぐムスタコが必要である。

【タキオンの秘密基地にて】

カフエ 「オグリン・・・。」

(トレセン基地に新たな危機が迫る！白きイナズマとはいったい何ウマソルジャーなのか！暴食因子O細胞とはいったい何なのか？謎が謎を呼ぶ展開に君はついて来られるか?!)

次回

【グリーンズカ 逃げ切りシスターズに巻き込まれる?!】ナレーションB。】

第六話 グリーンスズカは突っ込み疲労中! 逃げ切り
シスターズから逃げ切ろう! ブライアン&ハヤヒデの
帰還! いい加減早く目覚めよう! 大食い大怪獣オグ
リン!

【前回までのあらすじ】

(タキオンのバナナにより、巨大化して一万倍もの力を得たビワハヤヒデ。髪質を巡ってすれ違うブライアン。しかし、遂にその姿を現したVictory ウマロボがハヤヒデを倒す! ハヤヒデとブライアン姉妹、そしてブラックとテイオーは新たな関係を構築し得たのであった!

ー ナレーションB。

【日本ウマ娘トレーニングセンター学園 生徒会室にて】
「会長。ブライアンとビワハヤヒデが目を見ました!」

エアグルーヴが息せき切った様子で部屋に駆け込んで来る。先ずは水を飲ませて落ち着かせるルドルフ。

「二人の容態は？」

「それが、妙な事を口走ります。ここは日本ウマソルジャートレーニングセンター学園基地ではないのか。

自分たちはウマソルジャーになる為であつてレースは鍛錬に過ぎないなどと、言うのです。」

両手を顔の前で組み、思わずウームと唸るルドルフ。

「会長？」

「続けてくれ。私が最初に聞くべきなのは良い報告では無い。悪い報告だ。」

エアグルーヴも意を決して報告を続ける。

「あの二人があのような事を言うとは信じられません。トレーナーの事も知らないようでした。少なからず二人のトレーナー側もショックを受けている様です。」

次は腕組みして悩む会長 シンボリルドルフ。額には上杉景勝の如く深い縦じわが刻まれてしまい、お得意？の寒いギャグも最近はとんとご無沙汰だ。一方、エアグルーヴのやる気が下がらないのが不幸中の幸いという事か。

「そうだろう。ウマ娘とトレーナーは一心同体の関係だ。二人は怪我をして治療中だつ

たはずが？主治医を呼ぶように。投薬に何かしら問題があった可能性がある。このままでは最悪、優れたウマ娘の未来が閉ざされかねない。」

会長同様に悩むエアグルーヴ。

「やはり、例の件が？」

「現在調査中だが、必ずしも上手くはいってはいない。困ったものだ。エアグルーヴ。テイオーの様子も心配だ。マックイーンが様子を見てくれているのだが……。オペラオーとドトウも目が覚めないままだ。」

「はい……。」

女帝が部屋を出た後、独り生徒会室に残されるルドルフ。思わずシンザン前生徒会長の写真を仰ぎ見る。もちろんVサインでは写ってはいない。昭和の大横綱、野武士古武士の如き風格を湛えていた。如何にも頼りがいのある風貌をしている。ひるがえって自分はどうか？彼女は自問自答する。

「シンザン大先輩。これが私たちウマ娘の『可能性』のですか？先輩の記録を破り、新たな可能性に踏み出した、この私への試練なのですか？」

写真のシンザンはルドルフの問いに答えなかった。

【保健室兼医務室にて】

ナリタブライアンはベッドで機嫌を損ねていた。両腕を頭の後ろに回し、片方の膝を

立てていた。口ではドカベンのイワキの如く草をもてあそぶ。

「姉貴。私たちは夢でも見ているのか？赤の他人がトレーナーとか記憶が無くなっているなどとほざきやがるし。挙げ句の果てにメソメソ泣きやがる。こつちの気も知らないで。私は気に入らねえ。」

一方、ハヤヒデも混乱から憤りを覚えていた。

「ブライアン。行儀が悪いぞ。」

素行不良の妹をたしなめるビワハヤヒデ。しかし、彼女もまたブライアン同様困惑していた。

「私も日本ダービー？の夢はどうしたただの言われて辟易している所だ。チケットの事はなだめるつもりが逆に大泣きされてしまった。悪いことをしたとは思うのだがな。」

「しかし、私たちは人々の為に怪ウマ娘と戦う。今度こそ、汚名をそそぐ機会を欲していたのだが、そんなウマ娘はいないときた。人間をウマ娘を守り、実社会の役に立ちたいからこそ、わざわざトレセン基地に入隊したというのに。それこそが優れた身体能力を持つ、ウマ娘の論理的な存在意義ではないのか？」

「さすが姉貴だ。全くだ！ウマ娘は社会を守る為にいるつてのに。逆に世話をやかれるとはな！面白くないっ。」

二人は無然とした表情で医務室に居るしかなかった。

【前回までのあらすじ】

（一方、突っ込みライフポイントが尽きてしまったグリーンスズカ。彼女は有給休暇を取得して堤防の道を走っていたのだが・・・。）

【日本ウマソルジャートレーニングセンター学園基地

美浦寮の長官室にて】

【アイドル（ウマドルです！）、ウマドルソルジャー

ファル子登場！ 逃げ切りシスターズ緊急結成！】

「ヒシアマ長官。私、休暇をもらいたいのですが。」

疲れた表情でグリーンスズカが立っている。耳は垂れ下がり、尻尾も荒れていた。

（新兵が良くかかる突っ込みシヨックにかかってしまったか。普段は天然ボケ体質だからちようどいい組み合わせだったと思ったが、あたしのマネジメント不足だ・・・。）

「分かった。ただ、カサマツ基地より大食い大怪獣オグリンに動きがあるかもしれないのさ。ヤツの暴食腺の線量が増大中という報告を受けていてね。無理は言いたくはないが、余り長くは休めない。それでも構わないか？」

「はい・・・。分かりました。緊急招集に応じられる様に府中市市内で待機してます。」

こうして、スズカはしばしば戦士の休息を取るのだった。

(突つ込みソルジャーってこんなに疲れるなんて……。入隊式が懐かしい。私ってウマソルジャーに合つてなかつたのかな。)

堤防を風に吹かれてあるくらい彼女。黄昏て河川敷を見ていると橋のたもとで妙なウマ娘を見かけた。

「ふん、ふふん、ふふん、ふん♪」

輝いて見えた。眩しくてキラキラしていて。自分は確かに突つ込みソルジャーとしてレギュラー入りを果たした。これは大変名誉な事だ。それだけが、彼女のこれまでの全てだった。しかし、本当にそうなのだろうか？自然と誰も見ていないにもかかわらず、笑顔で精一杯踊る彼女。

会社帰りの疲れたリーマンの如きグリーンズズカには眩しかった。一曲分を踊りきると彼女は自然と拍手をしていた。

「ありがとう☆ファル子、まだまだ歌っちゃうよ♪」

そのまま一生懸命歌って踊る彼女に、自然とスズカもからだだが動く。いつの間にか合の手を入れていた。

「ファル子！ファル子！」

披露のせい、いつの間にか深夜帯のテンションと化したスズカ。一通り歌を歌い上

げたファル子が近づいてきた。

「会員番号1番さんのつもりだったけど、ファル子たち、ユニット組んで絶唱しちゃう? ウマドルソルジャーだしね!」

「それはモブにも私たちにも厳しいから止めておきましょう。」

休暇中にもかかわらず、突っ込みソルジャーとして活動してしまいうスズカ。職業病だろうか。しかしファル子はうなだれない。キラキラした目でスズカを見つめる。

「ファル子、いつも校門で待ってるから☆テイオーの恋はダービーにも負けないから見ててね♪」

こうしてスマートファルコンキラキラしながら笑顔で堤防を走り去って行った。

(恋はダービー?ダービー。ブラックがこの前言ったかど・・・。)

もしかしたらアイドル(ウマドルです!)ソルジャーも良いかもしれない。グリーンズズカはファル子の後ろ姿を憧れる様に見つめていたのだった。

【競技場にて】

「ブラックく。レース?しよーよ!」

ビール事件以来、ヤケにレースをしたがるテイオー。走りたくてうずうずした様子だ。

「ほら、ほらー!テイオー様の華麗なテイオーステップを見よ!」

ブラックを挑発する彼女。ブラックルドルフはヤレヤレと行った様子で応じる事にした。

「しかし、ここには大規模なターフは存在しないのではないか？」

「運動場があるから大丈夫！いこ、いこ！」

【運動場にて】

確かに運動場はあった。スタンドに楕円形のゴム片が固められたのコース。その中には砲丸投げ用の金網や、土がまかれた走り幅跳び用のコース、サッカー用のフィールドがあった。向こう側には野球場らしきスタンドが見える。脇には巨大な夜間用のライトスタンドがいくつもの建てられている。

「えへへ。立派でしょー！」

しかし、それだけでは無い。周囲には巨大な電波塔がいくつもの建てられている。回転式のレーダーに、白い球体が建物の先に据え付けられているのが見えた。待避壕らしきモノも掘られている。

（トレセン学園には決して無かったものだな。ピワハヤヒデ事件では幸い使用されなかっただけかもしれない。もしも鎮圧されていなかったら・・・。）

笑顔でエへへとそれらを見せて来るテイオー。ブラックは彼女に違和感を感じ無いワケにはいかなかった。

わない。次第に差が縮まり、遂には並ぶこと無く追い抜かされてしまった。たつぷり3200メートルを走つても関わらず、ルドルフはまだ余裕を見せる。

(は、速い。)

敗れたテイオーはトラックで寝つ転がり、肩で大きく息をしていた。

テイオー「もー！トラック速すぎだよ。」

ブラック「あの方に追い付きたいからな。そして必ず追い越してみせる。」

テイオー「あの方？それって誰の事？」

ブラック「シンザン会長の事さ。」

テイオー「ふーん。もうカイチヨウが記録を破つたのに。」

ブラック「そのシンザン会長では無い。それに、私はまだ破つていないからな。この脚で。」

ブラックは自慢の両脚を示す。逞しく鍛え抜かれた筋肉は機能美さえ感じさせるものがあつた。テイオーは思わず見惚れてしまった。しかし、同時に底知れぬ不安も込み上げてくる。彼女はその感情をライバルには悟られまいと押し隠した。

「ブラックって、本当に別の世界から来たのかもね。」

「そうかもしれないな。私は早くトレセン学園に帰りたいのだが。五体満足でな。」

ブラックが高射砲を見る。黒々とした砲門に車輪に光が反射していた。つや消し塗

装をした方が良いのではないだろうか。

「テイオーは怖くないのか? 戦う事が。」

「ないと言ったらウソになるけどね。でも、みんなを守りたい。それだけ!」

テイオーは真っ直ぐした目でブラックを見つめる。そんな彼女を子ども扱いするのは、かえって失礼かもしれない。そう考えたブラックはこれ以上は何も聞かなかった。

「でもブラックに惨敗する覚悟は決めてないから。そうだ、ハチミー飲も! ハチミーハチミーハチミー。ハチミーをー舐めーるとー♪」

「ご機嫌なテイオー。しかし、内心ではブラックに再び再挑戦する覚悟を決めていたのだった。」

「さっきから気になっていたのだが、あれは一体全体何なんだ?」

ブラックが指さす方向には不気味な目玉が空に張り付いていた。

「ハヤヒデを倒した後で見えるようになったよね。何か嫌な予感がする。」

こうして、2人のウマ娘はハチミーを飲み販売車まで走って行ったのだった。

ブラックは考える。この世界ではウマ娘の力を戦う事に使っている。だからこそ、自分の世界の様にレースを大祭典として国民的スポーツにする余裕など無いのだろう。

(果たしてどちらがウマ娘のあるべき姿なのか。戦う事を止めたウマ娘か、それとも……)

テラスでハチミツを飲む2人。一方、不気味な目玉があかね色の空から2人を見つめていたのだった。

【学園基地の校門にて】

「逃げ切り♪（逃げ切り♪） 逃げ切り♪（逃げ切り♪） だつて☆」

「あの一、お二人ともいったい何をされているのですか？」

スマートファルコンはアイドル「ウマドルです！」ソルジャーなので当然である。しかしグリーンズズカとは珍しいにも程がある。

「また巻き込まれてしまって・・・。」

「笑顔！笑顔！ウマドルですから☆」

「は、はい！」

困惑するピンクバクシンオー。ついでにチラシと一緒に配る事になってしまい、いつの間にかウマドルユニットの応援メンバーと化していたのだった。

（アイドル「ウマドルです！」。やりたいことが熱心に出るなんて、いいな。）

ズズカは意識はしていなかったが、自分自身の新たな可能性を感じていた。

【カサマツ基地にて】

「長官！カサマツ山にてOの音声らしきモノを確認致しました！」

「解析にかけて再生しろ！」

「はっ！」

緊迫感がカサマツ基地の司令室を包み込む。思わず冷え汗を流す長官。

「解析完了致しました。これよりデータを再生致します！」

「ザッツ、ザッツ・・・・」

ノイズが酷い中、遂に音声が発せられた。Oこと大食い大怪獣オグリンはこう言っていた。

「私は・・・ザッツ・・・もつ鍋に・・・ザッツ・・・になりたい・・・」

長官は立ち上がり、即座に発令した。

「特殊災害警戒態勢 第二種警戒態勢発令！」

Gの活動が声、動きなど物理的に確認されたぞ！」

それを待ち構えていたかの様にユラリと背後からウマ娘が現れた。

「うわさのヤングエリートのお出ましか。」

「その通り！うちの定番みたいやな。オグリン・・・。うちと勝負しようや！」

白い稲妻ソルジャー タマモクロス登場！

【タキオンの秘密基地にて】

カフェ 「オグリン……。」

【次回予告！】

（ブラックとテイオーは絆を新たにし、スズカはファル子に巻き込まれる形でアイドル「ウマドルです！」活動に参加した。様々な形で交流するウマ娘たち。しかし、その平穏な日常に危機が迫る！遂に動き出す大食い大怪獣オグリン！果てしてウマソルジャーVは食料を守り切る事はできるのか！

【トレセン攻撃命令！】

大食い大怪獣オグリン 対 白い稲妻 & 強き母性

遂に芦毛の怪物 中央に上陸す！】ナレーションB

【第二部 ダークウマソルジャーV編!】第七話 大食い
大怪獣オグリン 遂に現る! じやりん子タマモと行く
名古屋と伊勢湾ぶらり旅

【前回までのあらすじ!】

(穏やかな日常の中、ブラックはテイオーと親睦を深めていた。一方、ブラックはウマ娘の存在意義についての認識、そのズレについて考えざるを得なかった。

その一方で、グリーンズカはスマートファルコンによって逃げ切りシスターズの活動に巻き込まれてしまっていた。ズカは自身の巻き込まれ体質からは逃げ切れるのか?

更に事件後、ピワハヤヒデとナリタブライアンは以前として行方不明のままである。

しかし、時間は待つてはくれなかった。遂に大食い大怪獣オグリンが目覚めたのだ! オグリンの覚醒を感じ取るカフェ。危うしカサマツ基地!世界の平和はタマモクロス、君に託された!!) ナレーションB。

【カサマツ基地にて】

隔壁内部の探知機が反応し、基地内部にけたたましく警報音が鳴り響く。

「特殊災害警戒態勢 発令！」

第三種警戒態勢を取れ！

○が活動を開始した！○が活動を！」

遂に大食い大怪獣オグリンが活動を開始した。眠そうに目をこすった後、「ほっふっつ！」と独特の音声で鳴き声が聞こえてくる。

鳴き声を聞いたカサマツ長官は少しばかり安堵する。オグリンの調子があったからだ。

「まだやれる！絶対調ならば『ほっほっつひっふっつ！』と鳴くはずだ。ヤツはまだ本調子ではない！メーサー、音波砲で畳みかける！」

この二種のメカは対オグリン用に開発者された秘密メカである。それが今、遂に怪ウマ娘に向かって照射されようとしていた。

モブウマ娘ソルジャー

「メーサー光線照準固定！暴食音声対消滅音波砲自動追尾装置問題無し！いつでもいけ

ます!」

D.R. マッドタキオン「説明しよう! 暴食音声対消滅音波砲とは大食い大怪獣オグリンの発する暴食音波を対消滅させる特殊メカなのだ! こちらのメーサーには『殺獣』の文字は無いから安心したまえ。」

その直後、通常電源が落ち、司令室は即座に赤い非常灯に切り替わってしまった。

「どないしたんや? 長官?」

モブウマソルジャー「主電源をやられました!」

「何でやねん!」

モブウマソルジャー「メーサー、音波砲共にシステムダウン! 非常停止装置により強制的にロックされております! 使用不能! 使用不能! 何者かによりハッキングを受けております!」

カサマツ基地の外部では、タキオンが基地の電源ユニットと全てのメカを同時にハッキングしていた。以前、府中にいた際、エアシャカールから盗み出した情報をもとにしたのである。彼女はあらゆる情報を収集せずにはいられない性質なのだ。

(まさか、カフェがオグリンと話し合いたいとはねえ。どちらにせよ、連中に先んじられるワケにはいかなしいね。それでもダメならウマ娘省の防衛隊にでもカタを着けさせるとするか。)

一方、基地内部は大混乱をきたしていた。長官は重々しい雰囲気でも口を開く。

「これでカサマツ基地は瀕死のタヌキというワケか……」

「ウマソルジャー鉄道警察当局に対して応援要請及び非常警戒態勢発令！名古屋全名物に対して非常警戒態勢発令！タマモクロス、指揮権は大坂に一任された。出動許可は既に下りている！思う存分やりたまえ！名古屋基地、大坂基地に緊急電だ！」

「言われるまでも無いで。うちの出番や！」

颯爽として隔壁の前に現れる白い稲妻。拳をゴキゴキと音を立てながら、自信満々の様子で大食い大怪獣オグリンを待ち構える。

「さあっ！うちとやろうや！オグリン。」

内部ではオグリンがお腹をグーグー鳴らしていた。ずいぶん空いたとばかりに大きく鳴り響く。すると、至近距離にいたモブウマソルジャー達が次々と膝を着き、動けなくなってしまう。

カサマツ基地の長官「オグリンはグーグー腹を鳴らすと事で周囲のすきつ腹のウマ娘達を完全に空腹にし、役立たずにしてしまう。よって、あらかじめ何日間も食い溜めをしておく必要があるのだ。通信にはノド電話、遮音性のヘッドフォン装着、そしてこの

特別設計の耳栓が役に立つ!」

タマモクロス「あいつらすきっ腹やったんか?!さすがにあほちややうか?!新喜劇かいな?!」

因みにあらかじめ弁当を食い溜めをしていたタマモクロス達は満腹状態で無事である。こうしてタマとまともなウマソルジャー達はオグリンの大食い音波を防ぐ事が出来たのだった。

カサマツ長官「ヘッドフォンと耳栓を装備したとしても、あのグーグー音をすきっ腹の状態で聞いてしまうと、止めどなく暴食に走ってしまう。気を付けなければならぬ。対音波砲は本来、燃費が悪いウマ娘が長時間オグリンと戦う為のメカだったのだが。人間ではたちまちやられてしまう。ヤツの周囲にいればすぐにすきっ腹になってしまうからだ。現在、遠隔メカは使用不能。詰んだな。」

タマモクロス「何のためのヘッドフォンと耳栓なんや?」

カサマツ長官「味方の対音波砲対策である!」

隊員A「無念ですが、もはや打つ手がありません。因みに現在の効果範囲は1メートルにも満たないようです。」

既に基地から支給された弁当を食べてしまい、空腹で倒れた隊員達から判明した事である。仕方なくタマは生き残った隊員達をまとめると撤退した打診した。

「長官、ウチらは一端退くで。」

「撤退を許可する。サンプルが欲しい。可能ならば、ついでに間抜けも一人持って帰ってきてくれないか。」

「しやーないな。ほな、行くで。」

一端撤退するタマモクロス達カサマツウマソルジャーたち。もはや隔壁の突破は時間の問題となっていた。カサマツ基地は陥落するのだろうか？するのだ。

最後の時を待つウマソルジャー達。彼女たちは冥土の土産とばかりに山盛りの弁当を食べながらフアランクスを組んで備えていた。すると、とうとうヤツが姿を現した。恐るべき茸毛の怪物。「大食い大怪物オグリン」である。

雄々しく起立するその姿に恐怖する隊員達。みな弁当を食べる手が止まる程の恐怖を味わっていた。

一方、しばしばオグリンと目を合わせる白い稲妻ソルジャー。目をパチクリさせ、それから、タマは我に返って突っ込む。と言うよりも突っ込まざるを得なかったのだ。

「身長30センチって何やねん！（ビシッ！）。竹の物差しぐらいしかないやん！普通大怪獣言うたら40とか50メートルはあるもんやろ！むしろカワイイ妹みたいやなー。聞いてたのとマルでちがうわ。むしろ、ワシワシしたくなるわ。」

タマは思わずまだ幼い時の姉妹の事を思い出していた。

「ウチのチビたちよりちっこいなあ。小型犬かいな!」

目の前の大食い「大怪獣」オグリンの身長は30cmほどしかなかった。どう見ても大怪獣というサイズ感では無い。

「えらいカワイイな。ほぼほぼぬいぐるみやないか。

ほれ、アメちゃんたべるか?」

「いかん!よせ!タマモクロス!」

止めようとするカサマツ長官。しかし、オグリンはアメちゃんを舐めてしまう。

大食い大怪獣オグリンをあやすタマモクロス。彼女自身に大勢の兄弟姉妹がいた為、その姿が姉属性を刺激してしまったのだ。

【東海道本線 名古屋駅までの 車中にて】

車内アナウンス「JR東日本をご利用くださいまして、ありがとうございます。この電車は東海道線、対音波大食い特別電車、名古屋行きです。」

タマモクロス達はガタガタ揺れる電車に乗っていた。車窓からは川が見える。キラキラと日光を反射していて眩しい。

「電車で移動って何やねん!ただの通勤やないか!ついでに言わせてもらおうと、なして

名古屋行きなら名鉄名古屋行きやないんや?」

タマは脇を固めるウマ娘の鉄道警察の警官に質問する。山盛りの弁当を食べながら。「モグモグ。私鉄は鉄道警察の管理外だからです。特別車にて特別ダイヤにて運行されております。モグモグ。」

「食べながら離すのでやめーや。てか、そこはウマ娘省の防衛隊やないんかい!カサマツから木曾川までけっこう距離あるんやなー。」

「今しばらくのご辛抱を。モグモグ。」

「あんたらええ根性しとるな。」

今、タマは自分の膝の上にオグリンを乗せている。同じ芦毛の事もあり、一見すると年の離れた姉妹の様にも見える。むしろ事情が事情で無ければ、微笑ましい光景であった。オグリンはアメちゃんをくれたタマモクロスに良く懐いていた。

(なして、山間部の寂れたところでケリをつけないんや?名古屋は大坂には断然負けるにしても、とりあえず大都市やないんか?)

ウマ娘警官(カサマツ基地の主電源が落ちましたからね。最悪の場合、東海三県範囲内にて倒す腹積もりの様です。)

それを聞いてタマモクロスは惘然とした。

西は鈴鹿山脈、東は愛知と静岡の県境、最悪箱根山で固める積もりらしい。

様はつまり、愛知県内の名物料理を犠牲にして時間稼ぎをし、他の名物料理を守る算段だ。だからこそわざと南下させたのだろう。

しかし、活性化もしていない状態でなぜ南下させたのだろうか？当分は岐阜県で時間稼ぎに徹するべきではないだろうか？

(気に入らん。にしても、オグリンさつきからアメちゃんしか食べてないやん。どこが大食い大怪獣やねん。大人しゅーて逆に心配になるわ。)

名前と実態のヒドい乖離。自分のお腹を枕にしてお眠のオグリン。タマはこの怪ウマ娘に道頓堀飛び込みキックを食らわせる事が出来るのか、心配になってきてしまった。

(いや、オグリンはうちが倒して手柄にするんや。今回の食費は全てウマ娘省持ちやし、ぎよーさん手土産持ち帰ってチビたちを喜ばしてやりたいんや。そやないと、うちは……)

(家族に楽をさせたい彼女。小柄ながらここまででのし上がってこれた理由である。大切なヒトの為に自分の心を犠牲にする。それが正しいヒーローの在り方なのだ！頑張れタマモクロス！白い稲妻でオグリンを倒すのだ！)

ナレーションB。

ウマ娘鉄道警察警官がメニューを知らせてくる。

(名古屋で味噌カツ、いろいろ、手羽先を食べさせ、様子をうかがう算段となっておりま
す。)

思わず首をかしげるタマ。いかんせん奇妙な事を言い始めたからだ。

(いいんか？食べさせて活性化しよつたら、めんどろやろ？)

(適度に満腹にして状態を安定化させた後、知多半島でトドメを刺します。その際はど
うぞ宜しくお願いします。)

とどめを刺す。その表現にタマは余り良い気持ちにはなれない。中には手段を選ば
ない凶悪なウマソルジャーもいるが、彼女自身はそうではなかったからだ。

(なして、ウチが選ばれたんや。えらくきな臭いな。今回の任務。)

タマモクロスは訝しんだ。

(スーパークリークにも無理ちやうか？これ。なんかあかんわ。)

こうして名古屋に上陸？した大食い大怪獣オグリン。銀時計前の地下街でさつそく
味噌カツを頬張る。しかし、その量です極めて深刻だったのだ。

「そこは『超大盛り』やないんかい！(ビシッ！)」

なぜか先ほどから「並」しか食べない大食い大怪獣オグリン。

「大怪獣どころか大食いですらないやん！ウチ、もう突っ込みきれんわ。」

（おかしい。あのオグリンが「並」を注文するはずや無い。なぜや?）

疑問を感じつつすつかり別の意味で伸びてしまった彼女。しかし、笑顔で隊員達が山盛りの味噌カツを持って来る。

「タマモクロス様。すきっ腹を避ける為にお食べになつて下さい。」

「正直今は脂っこいもんはキツイんや。いつもなら言われなくてもぎよーさん食べるんやが。」

彼女は朝から大量の弁当を支給されていて、お腹は全く減つてなどいなかっただ。もちろんオグリンのすきっ腹音波対策である。

「まさか、満腹がここまで辛く感じるとは……。こんなん初めてや。」

「逃げてはいけませんよ。」

「なんでウチがこんな目に遭わないかんのや!」

その後は名古屋港水族館でオグリン御一行はシャチのショーを貸切で楽しんだ。大怪獣は大水槽の魚を食べたがると思われたがそんな素振りにはマルで見せない。いつの間にか安心してショーにしゃぐタマモクロスにオグリン。その後、フェリーで知多半島に渡航し、日本のノルマンディーと言われる絶壁を見る。その素晴らしい迫力に特撮のロケ地に使えそうだと思うタマだった。

更に貸し切りの伊良湖温泉で露天風呂と海の幸を大いに満喫する。タマは生まれて初めてのカキのバター焼きに大興奮していた。更にその旅館は同時に太平洋と伊勢湾を眺められる立地にあり、申し分のない見事な光景が広がっているではないか。オグリンとゆつたりと温泉につかった後、タマモクロス達は既に生産が終了した牛乳ビンを飲む。

（これで背が伸びたらええのにな。にしても、オグリンの背が伸びへんなあ。これだけ食えばいい加減ある程度回復するはずなんやが？）

浴衣に着替えた彼女は椅子に座って思案していた。果たして彼女に大食いでも大怪獣でも無いオグリンを倒せるのだろうか？一方、タマの悩みを知らないオグリンは楽しんで窓から海を見てのんびり「ほっひっふっ」と過ごしている。それにタマモクロスは満を持して突っ込む。

「これ、ただの食べ歩きと観光やないか！お昼のテレビ番組やないんやぞ！（せや！オグリンがまた鳴いたで！そろそろ交代要員こんかな〜）」

そうこうしている内に、ようやく追加要員のウマソルジャーが部屋に入ってきた。

（ようやくと応援がきよったか。クリークかいな？）

しかし、来たのはクリークではなかった。

「ただいま到着致しました！」

来たのは長距離バクシンオーだったのだ。

【次回予告】

（以上、タマモクロスと行く、名古屋 伊良湖岬の観光案内でした。次回はいよいよ大坂で食い倒れる予定です。よい子のみんなは串カツの二度漬けはやめようね。タマモクロスと勝手に約束しようね！）ナレーションB。

第八話 ダークウマソルジャー登場！ タキオンの恐るべき陰謀！危うし、ボクらのタマモクロス！

【前回までのあらすじ！】

（遂に復活した大食い大怪物オグリン！黒の科学者 Dr. マッドタキオンによりハツキングされるカサマツ基地！流言飛語とSNSにマスコミ各社の報道が過熱する。増大する社会不安を前にウマソルジャーは立ち向かう！

「まだそこまでやってないだろ。またぶっ飛ばされてーのか？（ゴールドシップ談）」
時代はハイブリッド戦争に突入、遂に内乱に突入する。

「てめーはあたしを怒らせた。ゴルシちゃんドロップキック！（ゴルシ談）」

ナレーションBはゴールドシップの攻撃を受け、一時的に沈黙しました。代わりにまして、ナレーションCがお送り致します。

しかし、オグリンは至つて問題なく名古屋と知多半島を観光していた。タマモクロスもこれまで出来なかつた娯楽に大満足だ！（ナレーションC）

「あたしも混ぜろ〜！」。ゴ、ゴールドシップさん。これ以上ナレーションBをで下さい。

「Aは深刻な改変を勝手にやったからな。ゴルゴル星にしてやった。Bもだ。」
（止めて下さ、わっ・・・）ナレーションBはゴールドシップの攻撃を受け、完全に沈黙しました。

「ダークウマソルジャー登場! タキオンの恐るべき陰謀! ボクらのタマモクロス!」
「いやー、大坂から伊良湖って結構遠いですね! この長距離オグリンオーをもつてしても時間がかかりましたよ!」

相変わらず大音声で動作も大きな彼女。急行したのか額から汗を流している。タマモクロスはコップに水を入れて、差し出した。

「府中からわざわざお疲れさん。まずはこれでも飲みや。」

「お心遣い感謝します! ではまずは一杯!」

コップをがぶ飲みする。長距離バクシンオー。

「まだまだあるで。遠慮無くのみなはれ。ぶぶ漬けもあるで。」

なぜか京都弁になるタマ。バクシンオーは特に疑問視せずにぶぶ漬けまで食べしまった。頭が下がり、トロンとした表情になる彼女。

「何だか眠く・・・なって・きま・。」

すると、そのまま眠り込んでしまった。その様子をうかがう。タマモクロス。

オグリンは「ほっほっひっふっふっ！」と鳴いている。どうやら絶好調のようだ！

「ピンクバクシンオーが大坂から来るはずないやんけ。あほんだら。ついでに言うとかとな、バクシンオーは

短距離走で優勝してるんや。長距離選手やないで。」

とりあえず素早く、緊急避難用の縄梯子で縛り上げるタマ。バクシンオー？はいい夢でも見てるのか、

「日本ダービー、天皇賞、有馬記念……ぐへへ。バクシンーバクシンーバクシンー！」
と寝言をほざいている。寝ても覚めても大音声の彼女にタマは困惑していた。

「なんやこいつ……。ウマソルジャーより芸人適正あるんちゃうか？てか、警備員さんおらへんやん。どないなってるんねん。ここの警備は！」

耳をそばだたせるタマモクロス。すると、通信機から雑音が繰り返し聞こえてくるではないか。

「通信もダメやん。妨害されとる。」

その雑音は一樣にこう言っていた。

「「「カワイイカレンチャン！ カワイイカレンチャン！ カワイイカレンチャン！

カワイイカレンチャン！」「」」」」」

「か、かわ、か・い・い・??? てっ、何でやねん! (ビシッ!)」

危うく突っ込みにより洗脳? 効果のあるらしき怪電波らしきモノをはね除けるタマ。関西ウマソルジャー代表は伊達では無い。しかし、よりいっそう理解不能な状態に陥る彼女。とにかく、異常事態が発生している事は間違いないようだ。

「あかん。オグリ、お姉ちゃうと避難するで。」

「ほっほっほっふっふっ!」

「ほっほっほっふっふっ!」

オグリンの調子はますます絶好調だ!

逃走経路は既に用意してある。非常階段では無い隠し通路がこの旅館にはあるのだ。大戦の際、ひそかに掘られたモノを地下通路として改修してあったモノだ。

ベランダの壁を突っ込みチョップの容量で破壊すると、少し離れた部屋に入る。そこから外の様子をうかがうと、他の廊下はカワイイ連呼の元隊員、現オタ集団で溢れていた。仕方なく、障子や窓を破って部屋から部屋へと移動すると、外へ出る地下通路にたどり着いた。そこを抜けると、何とか開けた場所にでる事が出来た。

「これでひとまず脱出成功やな。」

「困を欠く。これは城攻めの常套手段ではないかね、タマモクロス君。カフェ。」

「ガオー。」

ダークマンハッタンCの出現に驚くタマ。そのすきに突然現れた味方のはずの警備員とウマソルジャー達が集まってきて捕らえられてしまった。

無防備と化したオグリンはそのままカフェの怪光線を浴びてしまう。

「オグリン！くそっ！何しよる！タキオン！」

「む〜り〜。」

更になぜかお腹を空かせているソルジャーまでいるではないか。オグリン対策は万全の筈である。つい先程まで弁当をたらふく食べていた隊員達がすきっ腹なワケが無い。

「タキオン！ウマソルジャーに何しよった!?!」

憤るタマモクロス。これに悠然と高所で構えるタキオン。

「説明しよう！カレン君の熱心なファンになつてもらっただけさ。自分から勝手に全てのエネルギーを彼女の応援に使ったのさ。洗脳など彼女にはもとより必要ないのだよ。本当に自ら彼女の元に馳せ参じるのだから。実に見事なお手並みだ。素晴らしい。」

背後にはカレンチャンが手を振りながら可憐に立っていた。コテコテのタマモクロスとは色々な意味で住む世界の違う住ウマ娘らしい。なにせ、まとうカワイイオーラも迫力がある。

（合気道。使う必要もなかったな。）

カレンチャンは可憐に手首を返しながらそう思っていた。

「それからバクシンオー君?と云ったかな。彼女にもね。いざオグリンが暴走したとしても、すぐには役に立つまい。」

タキオンの言葉を聞いて、思わず首をかしげるタマモクロス。

「分からへんな。オグリンが暴走したら、それこそ手下が必要なはずやで。なしてわざわざ手数を減らしたんや?」

「ついでに突っ込ませてもらうと、萌え袖ポロポロやん。飼い犬にでも噛まれたん?」

しかし、タキオンはタマの突っ込みを無視して話を進めてしまう。

「君はあのバクシンオーが府中のバクシンオーで無い事には気がついてるかね?あれこそダークウマソルジャーVのダークバクシンオーなのさ。」

「何やて?!おかしなことばかり言いよるからに!」

「更にオグリン。いや、『オグリキヤップ』が操られている事には気がついてるかな?そして、その信号が切り替わりつつある事を。これはアクション1からアクション2と言っちゃ所かな。」

「何やて?!」

驚くタマモクロス。そういえば先程からオグリンは明らかに活性化しつつある。

「ウチは何をみとつたんや!オグリンに攻撃するなや。やるならウチにやらんか!」

自分自身に腹が立つ彼女。しかし、タキオンはそのままスルーして話を進めてしま
う。

「カフェの怪光線で治療を試みている最中なのだが。長距離バクシンオー君？はこちら
側で回収しておくから安心まえ。」

すると、ムクリとオグリンが起き上がる。身長が一気に167センチまで伸び、よろ
りと顔を上げた。そして、急にキリツとした表情でまともな事を言い始めるではない
か。

「私はオグリキャップ。よろしく頼む。ここは……どこだ？カサマツ基地に海は無い
はずだが。ん？ほっほっほっひっふっふっ！」

しかし、しばらくするとまた元に戻ってしまうオグリキャップ。

「なん、何やて?!」

先程から驚いてばかりいる彼女。タキオンは困った表情を浮かべている。

「ここではカフェの出力に限界があるな。仕方があるまい。研究所に連れて帰ろう。」

「ふざけんなや！ウチが許さへんで！」

暴れるので仕方なく簀巻きにされてしまったタマ。しかし、相変わらずタキオンは無
視して話を勝手に進めてしまう。

「ここで、『オグリキャップ君』の誘導を断ち切れない以上仕方があるまい。カフェの怪光線による正常化とオグリンの保護が優先させよう。あそこのバクシンオー君は……そうだな。タマモクロス君。君の手柄としたまえ。交換条件といこうではないか。」

どちらにせよオグリキャップ君はどちらでは正気には戻せない。それはカサマツ基地の対応から分かるはずだ。次はいよいよ更に強力な効果を持つメーサー光線が出る。君も当然その威力は知っているね? そうなれば彼女の安全の保障はもはや無いも同然。

これが最後の機会なのだよ。そして、私たちだけが彼女を正常化出来る可能性がある。君に選択の余地は殆ど残されていない。(そして、ダークウマソルジャーVからの解放はカフェの願いなのだよ。)」

高所で椅子に腰掛けるタキオン。泰然とした様子でタマを見下ろす。

「さあ、タマモクロスくん。君の給料と君の良心とを天秤にかけたまえ。私はどちらに傾いても構わない。君が君自身に裁かれるだけだ。」

「ただの強迫やないか!」

「ではメーサーの後継機の話に心当たりは全くないか? 第一カサマツ基地のウマソルジャーは無力だったではないか。」

「……。」

思わず黙り込むタマモクロス。それを使う事になる前にカタを付ける。出来る限り

正氣に戻したいりそれが今の彼女の願いだった。しかし、ダークウマソルジャーの出現は事態を悪化させている。ウマ娘省の高級官僚が事態を憂慮する可能性は捨てきれない。どうにかなったとは言え、既にビワハヤヒデが起こっているのだ。更にウマ娘省直轄の防衛隊が、今頃知多半島の付け根に防衛ラインを張ろうとしているはずだ。

「その沈黙が答えだ。元はと言えば、カフェもダークウマソルジャーVの一員だったのだよ。私が『違法改造』とやらで正氣に戻したのだが、この様だ。今では悪の科学者扱いさ。」

「何やて?!」

次々発覚する新情報に驚愕するタマモクロス。しかし、

証拠は無い。ますます混乱する彼女であった。

突破として、猛烈なサクラ吹雪が舞い始めた。おかげでタマの混乱状態にいつそう拍車がかかってしまう。

「バクシン！カワイイカレンチャン！バクシン！カワイイ！バクシン！カワイイ学級委員長！学級委員長はバクシン？カワイイ！アハハハ！逃がしませんよ!!バクシン！」

途中で乗り込んで来る長距離バクシンオー?。明らかに先ほどよりパワーを増して復活してきたのだ。さっそくカフェを見付けると例の忙しいポーズを取る。

「まさか! カレンのカワイイを誤変換してみせたの?! でも、そのピンクのサクラ吹雪、カワイイね☆」

「これはこれはカワイイカレンちゃん! カワイイバクシン委員長に続けえ! これはこれは。『ダーク』マンハツタンCさんではありませんか! 学級委員長がお迎えに上がりましたよ!」

「さあ、今こそみんなの5つのウマソウルの真の力を一つに!」

「タキオンは珍しく驚いて表情を見せた。」

「どうやら彼女は無意識の内に並列思考を行っているのか? それとも、オウムの様に意味も分からず音を並べているだけなのか。いずれにせよ、これは計画に狂いがでたね。」

「一方、カフエはカワイイバクシン委員長の誘いに首を横に振って拒絶する。」

「カフエ「お友だちがかわいそう・・・。」

「タキオン「相変わらずお早いお着きで。」

「バクシンオー?」「バクシン突破してきました! 学級委員長ですから!」

「タマ「それさつきから何にも・・・ゼエゼエ・・・関係あらへんやん!・ゼエゼエ・・・。」

「遂には突っ込み疲労症候群を引き起こしたタマモクロス。彼女の体力は限界に近い。ウマソルジャー達にとって、突っ込みとは高度なマーシャルアーツ・武術である。しかし、タキオンはそれをことごとく回避してしま

った。もはや、タマに体力は殆ど残されていなかった。

「タマ、委員長に敗れる！」

（違うわボケツ。スーパークリークは……スーパークリークはまだかいな……。）
すると、ようやく通信が回復を始める。

（こちら知多半島防衛ライン臨時指揮所。突如、府中のサクラバクシンオーの裏切りにより、防衛ラインが貫通された。スーパークリーク隊員は北海道での戦闘により未だ母性本能が十分に回復せず。至急応援は不可能！『別回線暗号通信』更に極秘情報ですが、現在トレセン基地にて内紛の気運が高まりつつあり。』）

（せやかて分かつとるわ。クリークにこれ以上無理はさせられへんし。こんな時に、府中は、トレセン基地は何をやつとるねん！サクラバクシンオーが裏切つた?!トレセン基地の内紛が関係しとるんか?もう・何が何だか?）

タマモクロスは通信を誤魔化す様にタキオンに向き直る。

「それにつけても、間が悪いところにきよつたな、タキオン。」

「相手の嫌がる事をやるのが基本というモノだ。タマモクロス君。しかし、ダークバクシンオー君の復活がこうも早いとは。単騎で突撃するだけの事はあるという事か。自己回復機能はかなりものだな。」

彼女を破城鎚代わりにしたまではよかつたのだが。仕方があるまい。撤退するとし

ようカフェ。カレン君!」

合気道を使おうとするカレンチャンに、撤退を渋るカフェ。しかし、タキオンはもう一刻の猶予もないと急かす。

「カレン君。ダークウマ娘にも一定の効果を發揮出来ると、分かっただけでも十分だろう?」

それを聞いて快活に笑うダークバクシンオー。

「さすがは学級委員長! 花丸です! ではオグリンさんをいただいてかえりましょうか!

また会いましょうカフェさん! ウマソルジャータワー テープ アクシヨン2

開始!!!」

バクシンオーが高らかに宣言すると、オグリキャップはたちまち物欲しげなネコのうによだれを垂らし始める。

以前の大食い大怪獣に戻ってしまったオグリン。彼女は口から音波では無く、何と怪光線を放ち始めた。対音波兵装などもとより存在し無い。たちまち、あたり一面の警備員とウマソルジャーたちは強烈な疲労と眠気、目まい、そして怠さと空腹を遙かに超えた飢餓感に襲われる。更に後方に築かれていた知多半島の防衛ライン。これはダークバクシンオーによりズタズタに貫通されていた。

「.....」

こうして、タマモクロスは意識を失なってしまったのだった。

【スーパ―空飛ぶ炊飯器1号内部】

「ここは……どこや……。うわっ！ダークマンハッタンC！」

ベッドの隣にはカフェもといダークマンハッタンCその 怪ウマ娘が座っていた。

「大丈夫……？」

「助けてくれたんか……。何でや？ウチはウマソルジャーやで。」

「それは、カフェたつての願いだつたからなのだよ。感謝されても恨まれる筋合いはない。」

当て布だらけの萌え袖で現れたタキオン。どうやら案外その突っ込みは気にしてい
たらしい。カレンチャンも続けて姿を現す。更に後ろには元隊員、現カレンチャン親衛
隊がいた。

「カレンはファンになつてくれた人たちを見捨てないから。でも、全員は助けられな
かつた。次は必ず助ける！」

大変珍しく感情的になるカレンチャンをタキオンがそつと労る。彼女はファンを増
やしたいだけなのかもしれない。ただ問題は行き着く先が世界征服なのだ。

「カフェはオグリキャップ君に良くしてくれた君を助けたいと言つたのでね。そもそ
も、交渉する気もなかつたのだが。カフェの気持ちを蔑ろには出来なかつた。」

「あんた、ホンマにオグリンを助けたいんか?」

「カフエはそうだが? 君はどうかね? タマモクロス君。」

「当たり前や! ウチかて助けたいんや!」

「なら話は早い。オグリキャップ君も正気に戻すまでは共闘しよう。後はお互い流れで行動でも交渉でもするというのはどうかな?」

しばらく考えるタマモクロス。この様子では自分は囚われの身である。例えウソでも一時的には共闘せざるを得ないだろう。下手な通信など全て傍受されている。そう考えた方が妥当だろう。

更にダークバクシンオーによつて貫通済みの防衛ライン。本格化した大食い大怪物相手に再構築してとして、突破を阻止出来るとは思えない。そもそも、間に合わなかつたと考えるのが自然だろう。相手はあの葦毛の怪物だ。

その一方で、オグリンを助けたいのは本当の願いである。

「分かった。それでいこうや。よろしくな!」

互いに握手を交わすタマとタキオン。その上に手のひらを乗せるカフエ。

(最も、カレン君の力で世界征服が可能なら、それも悪くない。世界がカワイイで溢れていても。)

【ナレーションC】

「遂に動き出したダークウマソルジャーVのダークバクシンオー。恐るべきカレンチャ
ン、タキオン、そしてダークマンハッタンC！紆余曲折ありながら、タマモクロスはオ
グリンをオグリキヤップに戻したいと願う。そして、とうとうここに奇妙な共闘関係が
成立したのであつた！タマの明日はどうなることやら。」

（悪質なものと日夜闘うゴルシちゃんもよろしくな！）

次回。【大坂決戦！ USVJ（ウマソルジャーV JAPAN） 恐るべきダークウ
マソルジャーVの陰謀】

次回もみんなで見よう！」

続く。

第九話 ウマソルジャーV 最大の危機! まさかの出動不能 敵は常に身内にあり!

〔前回までのあらすじ!〕

(長距離バクシンオーはダークウマソルジャーだった!更にダークマンハツタンカフェCが元ダークウマソルジャーだった事など、数多くの新事実が判明した衝撃的前回!タキオン一派はタマモクロスとの共闘を画策し、タマはカフェの思いに答えることにしたのである!厳しい状況にもかかわらず、心あたたまる交流に癒されるタキオン。

「本当にそうなのかよ?」(ゴールドシツプ談)

しかし、オグリキャップはダークバクシンオーによって、大食い大怪獣オグリンへと逆戻りしてしまう。怪光線を放たれ、ウマソルジャー始め、全ての勢力が撤退するしかなくなってしまった。更にフジキセキとバクシンオーの裏切り行為が疑われ、府中のウマソルジャーVが緊急出動出来ない始末。

どうなる後が無いタマモクロス!どうするタマモクロス!大切な故郷、大阪の未来は君にかかっているぞ!負けるな!白い稲妻ソルジャー!タマモクロス!ナレーション

〔日本ウマソルジャー・トレーニンングセンター学園基地
応接室にて〕

ウマ娘省の高官と省直属の防衛隊、更に国家親衛隊隊長が学園基地に押しかけていた。事態は憂慮すべき展開を見せている。ウマソルジャーVの廃止を視野に入れたネチネチとした、しかしごく当たり前の質問攻めを受けるハメになっていた。

「貴女方も当然御存知のはず。Dr. マッドタキオンといい、ビワハヤヒデ事件といい、更には府中はここ数ヶ月間で不祥事が多発している。それどころか、栗東長官のフジキセキが反乱を起こしたという情報まで入ってきている。」

既にフジキセキ事件の管轄は我々防衛隊と国家親衛隊に移された。特にフジキセキ『元』隊員には国家反逆罪に該当する可能性がある！更にピンクバクシンオー隊員の裏切り行為の『可能性』により、知多半島の防衛ラインが壊滅してしまったのですぞ！如何お考えか？責任を如何にして取られるおつもりか?!」

「高官は明らかに苛立ちを隠さない。隣の国家親衛隊の隊長はヒシアマ長官やエアグルーヴたちトレセンビッグV (five) を睨み付けている。ナリタブライアンはビワハヤヒデ事件以来行方不明である。」

「このような緊急事態で会長閣下殿は何処におられ、何をされているのか、聞かれてはおられないのでしょうか?」

当然の質問を投げかけてくる親衛隊隊長。そして、背中に冷え汗をかくヒシアマ長官。会長は絶賛行方不明中である。

「ビワハヤヒデ事件じゃ、ヘリの一台もよこさなかつたくせに、良よくもそんな事が言え、」

今度は頭に血がのぼるヒシアマ長官。しかし、彼女の発言をエアグルーヴが遮り、背中に隠してしまった。ツカツカと前に進み出る女帝。

「現在トレセン学園基地が総力を挙げて通信手段の確立を目指しており、現在進行中で

す。また、フジキセキの反乱は現在未確認情報も多く、即断はかえって事態を悪化させるものかと。

更に、ピンクバクシンオー隊員については既にアリバイが証明されております。彼女はそちら側の呼称する『ダークウマソルジャー』なるウマ娘ではありません。ダーク因子分析の結果は数時間以内に判明いたします。

別件のDr. マッドタキオン事件に関しましては、完全に彼女の独断による行動であり、我々トレセン学園基地の信頼を裏切ったのです。むしろ、ビワハヤヒデ隊員と私たちは被害者です。」

できるだけ冷静沈着に反論する女帝 エアグルーヴ。ヒシアマ長官はこの手の舌戦に慣れていないので、後ろに下がらされていた。下手をすればコブシでタイマン勝負をやりかねないからだ。そうなれば即刻現行犯逮捕で府中が吹き飛んでしまう。

「つまり、この現状に対しては具体的な対応策も会長閣下殿の居所の当ても無いということですね。ウマソルジャーに関しては既に大阪が指揮権を持つ以上、もはや不祥事だらけの府中は不要。これからは大阪時代の到来というわけか。全く、我々防衛隊と親衛隊の身にもなっていただきたいものだ。」

女帝の反論を全く無視し、話題をずらすウマ娘省の高官。

「我々国家親衛隊は新しい兵器を開発中だ。君たちも御存知、『サイボーグ ミホノブルボン』だ。あれが実戦配備されれば個人の戦闘力及び経験に頼る時代もようやく終わる。高度に平均化されかつ量産されるサイボーグ戦士により、間もなく怪ウマ娘は駆逐されるだろう。もちろん防衛隊にも配備される。」

この世界の組織系統ははつきり言って非効率極まりない。お互いにバラバラなのだ。故に三つ巴となって相手の脚を踏んづけ合う間柄である。

しかし、国家三大勢力、その一角たる府中が今陥落しようとしていた。後は勝った方が最大の敵となるだけである。具体的にはウマ娘省防衛隊と国家親衛隊の権力闘争が幕を開けるのだ。下手をすれば内紛や事変に発展しかねない極めて不穏な情勢である。

「お言葉ですが隊長。今は戦力を少しでも早く、より多く近畿に出動させるべきです。このままでは戦力の逐次投入の愚策を起こしかねません。時間がただでさえ足りない

のです。第一、大阪に上陸するとなぜ明言出来るのですか？その根拠をお聞かせ願いたい。」

その発言を鼻で嗤うウマ娘省の高官。もはや府中など当てにするつもりは無いようだ。

「我々の作戦課と情報課との分析及び『協議』の結果だ。また、府中より派遣可能なのはせいぜい信頼のおけるウマソルジャー数名が限度では無いかね？無論、我々の信頼だが。これでもずいぶんと手緩い提案だと思ふのだがね。」

このように、府中のウマソルジャーたちはなかなか出動出来ない状態に追い込まれてしまっていたのだった。二人の人物と護衛隊が退室した後、エアグルーヴとヒシアマ長官が頭を抱えていた。

エアグルーヴ「しかし、会長はいつたいどちらへ？あの二人の高圧的かつ非協力的な態度といい困ったものだ。よほど会長が現れて欲しくないようだな。更に、本当にオグリンは大阪に現れるのか？」

ヒシアマ長官「会長は国民的英雄だからな。府中を潰すなら今しかないだろ。それよりも、オグリンは大阪には上陸しないって? そもそもこの戦いは単なる『タイマン勝負』とは違うって事だろ?」

エアグルーヴ「エアシャカールによると、『ダークウマソルジャーV』と名付けられた存在は『組織的』に行動している可能性が大きく。」

長官はその分析にかえって呆れてしまった。

長官「当然だろう。V (f i v e) と名付けられた以上はさ。」

女帝「本題はここからだ。彼女たち? の目的が依然として不明な点が気にかかる。そうなる場所を正確に絞り込む事は難しいな。なら、敢えて考えるとするか。やるなら大阪以外どこを狙うと思う?」

少し考えてみるヒシアマ長官。脚を組み直しながら、答えを出す。

「そりや東京だろう。いや、まさか、大穴で伊勢湾沿岸とか？既にあそこから大半のウマソルジャーは撤収しているはず……。それに、名古屋からそう遠くない所にこの国最大の巨大企業の本社と工業団地がある。」

それを受けて女帝が会長の発言を思い出す。そして、何かしらの可能性に気づいたようだった。

「会長は常々このように言われていた。『戦いではまずは相手の心を攻めよ』と。またこゝうも言われた。『いにしえの名将は九天に飛び九地に隠れる。実を以て虚を撃て』と。」

「つまり？」

如何にも会長らしい古い言い回しが分かりかねるヒシアマ長官。そこでエアグルーヴが身を乗り出して密かに告げる。

「オグリンは数多くのウマソルジャーの出身地にしてウマ娘省の虎の子の部隊が駐屯する北海道を狙うのでないか？」

それを聞いた長官は嫌な顔をして、ため息交じりに汗を拭うのだった。

「あそこは昔からウマソルジャーと防衛隊で何かと管轄区域で争ってるからな。この前はスーパークリークが何とかしたとはいえ。まだウマソルジャーも防衛隊も再編中で今はろくな連携も期待出来ないしな。東北地方から増援が入ってはいるが。もしもあそこが再び怪ウマ娘にでも潰されたらどうかな。流星に関東圏の本隊が北上するしかないってワケか。」

【スーパー空飛ぶ炊飯器1号内部】

「どうやら府中は動けないようだね。関東は事実上傍観。こうなると、近畿と我々だけでオグリンに対処しなければならぬ。つまりは彼女というO細胞の奪い合いだ。くつくつくつ。」

背中で腕を組み、愉快げに嗤うタキオン。盗聴により大方の会話はこちら側に筒抜けである。

「自ら私たちに時間を寄越すとは。実に頼もしい味方がいたものだ。そうは思わないか

な？タマモクロス君。」

一方、タマモクロスは心底うんざりし始めていた。大阪は彼女の大切な故郷である。それにもかかわらず中央は下らない内輪もめに忙しいようだったからだ。総力戦を挑まず、面倒な事をこちら側に押し付けたただけである。

「バカらしゅーていかんわ。呆れてものも言えへん。第一何なん？サイボーグ戦士 ミホノ・ミホノブルボン？それにな。○細胞ならカサマツでいくらでも取れるやん？わざわざオグリンだけに構う必要あるん？」

タキオン「目下の目的は活性化した個体を『独占』する事だろう。核兵器のように世界中に活性化に成功したコピーが存在しては困るのだ。

しかし、カサマツが落ちてから動くあたり、連中の腰の重さには困ったものだ。腰と頭が固すぎて、つけもの石にもならない。それとも、わざとカサマツで手を打たず、暴走でもさせて管轄下に権限を手に入れた方がいいが、知多で捕獲に失敗でもしたかな？だからこそ、フジキセキの一件を利用して権限を維持し続けようとしているのだろう。実にくくだらない。」

当て布だらけの萌え袖をフリフリしながら考えを述べるタキオン。

「サイボーグ戦士は会長不在の今こそ、全国規模で一斉に導入しようといった所か。不祥事を起こした某自動車メーカーの電気自動車を全国の郵便局に一斉に配備する程度には愚策も愚策。自分からノドに王水でも流し込まれたいのかねえ?」

さしもの黒の科学者 Dr. マッドタキオンも開いた口が塞がらないようだ。最もお互いに重要な情報を共有しないのは伝統文化である。そして重要な情報とは、大抵自分たちに不利な情報だ。大事にしよう報・連・相!

「カレンたちはこれからどうするの? ウマスタのフォローーさんたちが数万人規模で即応体制にあるけど。」

「行方不明のダークバクシンオーの搜索は君に一任する。オグリンの搜索はカフェに頼りたまえ。」

私には研究所の2号機が必要になった。対怪光線用のメカだ。いったんは基地に帰

投するでしょう。」

タマモクロスは密かに戦慄していた。カレンチャンが大勢のフォロワーを抱えている事は知っている。しかし、数万人規模が既に「即応体制」にあるとは！もはや小国の軍隊並みの規模である。

（この国。詰んどらんか？いや、詰んどるわこれ。）

思わずへこたれそうになる彼女。しかし、持ち前の負けん気根性でどうにか立ち直ろうとする。

（ちやうで！ウチにわざと聞かして揺さぶりをかけとるんやな。家族とウマソルジャーを守りたければ・・・裏切れと。）

しかし、もしも本当に情報が正しければ関東は関西を大食い大怪物のエサにするかもしれない。明らかに有り得ない程の異常事態である。ここで思い出されるのは大阪の家族みんなの事であった。

（ウチは・・・小さいときから苦労して・・・ウマソルジャーになつたちゅーのになあ。小柄でお下がりで散々バカにされて・・・それでも諦めなかつた結果がこれかいな・・・さすがに冗談きついわ。）

もちろん全てが作り物ではつたりの可能性も捨てきれ無い。しかし、防衛隊では無く鉄道警察が出て来るなど、既におかしな兆候は見られた。更にスーパードライバー空飛ぶ炊飯器1号は紛れもなくタキオンの管轄下にある。おそらくは2号機があるというのも本当の事だろう。「特撮」で使われるセットも模型もどこにもないからだ。

(カレンのヤツに催眠をかけられとる可能性も捨て切れん。先ずは・先ずは冷静になるんや。ウチ!)

それでも一筋の涙がタマの頬を流れそうになる。しかし、彼女は涙を流さない。この程度でへこたれるならば、ここにはたどり着いてなどいない。

(ウチ・・やれるんか? たった一人で。)

(これまでにも常にギリギリの戦いを強いられてきたのだ。しかしながら、今回は今までとは様々な意味でレベルが違う。そのことが彼女の心を確かに苛んでいた。こうして、孤独が独りタマモクロスを包み込んでいくのであった。) ナレーションC。

「タキオンの秘密基地 地下研究所にて」

「説明しよう！これこそが私の地下研究所だ！どうだ、素晴らしいだろう？くつくつくつ。」

確かに素晴らしい規模の巨大な地下空間が広がっていた。実は大戦末期に掘られた格納庫の跡地である。そして、その2番滑走路にはアイロンの様な巨大なメカが鎮座していた。全体が濃い緑色で塗装され、無骨な光を反射させている。

「これこそが対光線メカ、スーパー空飛ぶアイロン鏡2号君だ！」

「ネーミングセンスサイテーやな。あんた。どっかで頭打ったんとちやう？」

タマモクロスの容赦なさすぎる突っ込みに、思わず動揺するタキオン。

「わ、私のメカは名前で強弱が変わるわけでない。よって何も問題ない。」

しかし稲妻の如く反論する白い稲妻ことタマモクロス。

「搭乗者の士気と国民の支持に関わるんやで。そこら辺はやつぱ、秘密組織やな。良くも悪くも自由や。」

「そ、そういう事だ、タマモクロス君。よく分かっているではないか。」

しかし、カレンチャンは納得していないようだ。ずいっとメカの背後から姿を現し、抗議する。

カレン「カレンはもつとカワイイ名前がいいな。ギャップ萌え?」

タマ「それも悪くないやん。例えば何が候補やねん?」

カレン「タマちゃん」

タマ「それウチの名前やねん(ビシッ!)」

カレン「ネコだけど?」

タマ「ネコにしてはゴツすぎるわ。もうトラやろあれ。」

カレン「じゃあ、トラジロウで。」

タマ「し〇じろうかいな!(ビシッ!)確かにトラつながりやけどな!それは分かるけどな、し〇じろうの兄弟があれやつたらおやじさん何者やねん?サイボーグかいな。て言うか、子ども泣くで。母ちゃんからあれが出て来たら。てか、ジロウで次男でかぶってるやんけ(ビシッ!)」

カレン「かわいくドツキングするから問題ないよ(キラッ☆)」

タマ「それもう別作品やん←。ジャンル別やん→!もしかしたら、カワイイと見せかけて視聴者殺しにかかる系か!ほんま怖いわー。深夜アニメやんそれ。子ども向けちやうわ(ビシッ!)!そーういや、しまじろうつて長男なん?次男ちやうか?」

カレン「長男だよ♪」

タマ「1つ聞きたいんやが、ほんまに長男かいな?」

カレン「カレン。勘のいいタマちゃんは苦手かな☆」

タマ「こわ！ドッキング一家こわ！」

カレン「ありがとうございますー。」

タマ「漫才的な何かやったんか、これ（ビシツ）！」

それを聞いて微笑むカフェ。少し緊張が解けたようだった。すると、タキオンがコーヒー煎れてきたのだった。もちろん紅茶では無い。

【秘密基地内紛のカフェテリアにて】

「さて飲むといいカフェ。体が温まる。カレン君とタマモクロス君もどうかかな？他のみ
なも構わないね。」

カフェテリアには既に数人の幹部も集まっていた。

「いただきまーす！」

「も、もらつとくで。（ウチ苦いの苦手やねん。）」

（タマモクロス君も飲むのか。てつきり警戒して断るかと思つたが。フフツ。）

それぞれのペースでコーヒーを飲み干す一同。ちなみにタマは一番最後であった。

「では改めて作戦会議と行こう。我々は目下の所、東京が怪しいと睨んでいる。敵は必ず首都を攻めるはずだ。」

それにタマが異議をとなえる。スーパー空飛ぶ炊飯器1号で聞いた話と違うからだ。

「大阪はどないしたん? 話が違うやん!」

「もつと大局的な視点でモノゴトを見たまえ、タマモクロス君。私はダークウマソルジャーVの首領が必ず現れる場所について述べているのだ。」

「確かに東京は事実上の首都やけど。なら大阪は何やねん?」

「大規模な陽動だろう。」

「何やて! ウチの故郷が囮にされるんか! せやけど、防衛隊も国家親衛隊も本隊は関東に配置したままやろ? となると、関東から本隊を引き剥がす必要があるはずや。」

しばらく考え込むタマモクロス。すると、何かが彼女の脳内を駆け巡ったようだった。

「タキオン。あんた、以前知多半島は失敗したというたとたな。まさか、またやるんか? 名古屋辺りで。」

「私はその可能性を考えている。名古屋は関東と関西の間にあつて、大阪に抜けるにも好都合だ。わざわざ出張つてダークウマソルジャーと我々に一度面子を潰されたのだ。これ以上の失敗は彼等の座る席を無くすだろう。むしろ、関西と関東の本隊で挟み撃ちにするには好都合に見えるかもしれないね。名古屋には気の毒だが。」

それを聞いて冷え汗をかくタマモクロス。

（ほんまなら何とかしてみなに知らせなあかん。せやけど方法が……。いや、必ず何とかするんや。これまでもウチはそうしてきた！やるんやタマモクロス！あんたなら必ず出来る！）

タマを始め、数人と幹部の周囲を旋回しなかつた推理するタキオン。そして、最後にダークマンハットンCことカフエの方を見た。

「さて、カフエはどうしたいかな？」

【次回予告！】

（数々の思惑が交差する中、遂に大食い大怪物オグリンが再び姿を現した！タキオンのスーパークソダサネーミングメカが大活躍するぞ！しかし、一方で更に強くなった彼女に独りでは苦戦するタマモクロス。だが思い出して欲しい。君は決して独りでは無い事を！愛に飢えしウマ娘の救世主、スーパークリーク登場！ウマ娘の命は地球の命！）
ナレーションC

第十話 必殺、白き牛乳竜巻落とし！ タマモクロスの修行！ ヤエノムテキ登場。プリティーダービー?! レースに何の意味がある？ 困惑、ビワハヤヒデとナリタブライアンの変貌！

【前回までのあらすじ】

ナレーシヨンCがウマ娘プリティーダービーに接続出来ませんでした。代わってゴールドシップがお送り致します。

「みんな元気にしてるか？ ゴルゴダの丘から来たゴルシ様だぜ！ ゴルゴル星じゃないからそこんともよろしくもな！ 今日には凄いい土産を持ってきたから目を懲らしてよくみるんだぞ☆

覚悟はいいか。あたしは出来ている。ジャジャーン！

聖遺物『奇跡の残り香』エレナの聖釘！ こいつを心臓にぶっさせば、不死身の怪物になれるというお得なシロモノだあ！

さあ、もらった、もらった！なんでそんな心配そうな顔してあたしを見る？大丈夫だって、多分。ローマから怖い顔した人たちなんて訪ねて来やしないからさ！」

【日本ウマ娘トレーニングセンター 保健室にて】

「病床にて失礼する。私の事が分かるか？ビワハヤヒデ。」

落ち着いた雰囲気で尋ねる会長 シンボリルドルフ。それに対してビワハヤヒデは怪訝な表情を浮かべていた。

「会長閣下……なのですか？誠に申し訳御座いませぬ。伏してお詫び申し上げます。不敬をお許し下さい。何卒御寛恕の程を宜しく御願ひ申し上げます。」

無理矢理体を起こしてあまつさえ直立不動になろうとするビワハヤヒデ。ルドルフは慌てて押し止め、彼女をベッドに寝かせる。それを配慮と受け取ったハヤヒデは恭しく頭を下げるのだった。

「閣下はよしてくれ。体に障るような事はさせたくない。私は……その……そんなに怖いだろうか。」

「直言をお許し下さい。私の経験によると……その……その……今の閣下は以前の閣下程『鋭く』は御座いませぬ。むしろ、柔らかい印象を受けます。いつお戻りになられたのですか？何か重大な事情がござり、方針転換を図られたのですか？閣下。」

一事が万事この調子なので、流石にシンボリルドルフも肩が凝ってきてしまった。全ての会話が単なる敬語では無く、『儀式的』に行われるからだ。

(深刻な記憶の混乱状態にあるのだ。これではレースどころでは無い。今は幸いオフシーズンだが、彼女には治療と休養が必要だ。トレーナーはかなりのシヨックを受けるはず。何かしら配慮をしなければ。)

一方のナリタブライアン。いつものぶつきら棒さは相変わらずだが、やけに動作がキビキビとしている。背筋に鉄の棒でも入っているが如く、真っ直ぐなのだ。話す時は例の葉っぱも口から外している。

「レース? 何の事だ? 身体能力の定期検査を受けたばかりだ。年に何度も繰り返して走るだけに何の意味がある? 閣下。いつからそこまで腑抜けになった? 私を失望させないでくれ。」

信じられない言葉を受け、「会長」ルドルフの顔に影が指す。これだけでも普段ならば威圧感極まるのレベルだ。しかし、ピワハヤヒデの知ると言う「閣下」の鋭さには及ばないらしい。

ブライアンには懽然とした表情で返されてしまった。これにはルドルフも一度退室するしかない。今、雷を落とした所で余計事態が悪化するだけだからだ。

【生徒会室にて】

「と言うワケだ。二人ともかなりの精神的混乱が見られる。身体に外傷は一切見られないのだが。何かしら重篤な精神状態にあるのは確かだ。このままでは非常に危険な事態に直面する事となる。いや、既にしているのだが。」

深刻な表情を見せるルドルフ。彼女の疲れた雰囲気は女帝を心配させる。

「あのたわけが・・何という事を。」

彼女はブライアンの態度に困惑を露わにする。いくら病床とは言え、レースの意義そのものを蔑ろにする発言は恐ろしい。

そもそもブライアンは態度こそぶつきら棒だが、レースそのものを貶めるような発言はなかった。しかし、今は違うのだ。人格が変化してしまったかの様だ。

『今回は』無念だが学園ではもはや手に負えない規模の案件だ。理事長に掛け合い、早急に入院を申請しよう。精密検査が必要だ。それが当たり前だが、最善だ。」

「分かりました。さっそく手配します。」

退室する女帝。独り残されるルドルフ。彼女は自身の責任の重さを今更ながら痛感していた。

ブライアンの言う「レース」で、「皇帝」の座に君臨する彼女。その世界では一着こそが勝ちであり、二着は文字通り負けの一番でしかない。銀メダルと銅メダルは無い。勝ち星にも数えられない。故にレースの世界は過酷を極める。一着だけが「勝ち星」。ま

さにこの世界は修羅の道そのものだ。

その修羅の道を七冠ウマ娘として、彼女は大先輩の「前提」を更新したのだ。その為、今後は全ての前提がルドルフに置かれる事となった。故に彼女がこの世界で今後の主導権を受け継ぐウマ娘である。

後輩にどれだけの可能性があろうとも、怪物が現れようとも。七冠の壁は山塊の如く分厚く、富士山の如く高く、剣岳の様に険しい。彼女が五冠の記録を破った時、それ以外の可能性は無かった事にされたはずだ。

「しかし、そうでは無かったと？ シンザン前会長。」

はやり、写真の彼女は何も答えなかった。

（しかし、ゴールドシップの報告はまだか？）

「このあたしをお探しかい！」

あっさりとゴルシは現れた。

【タキオンの秘密基地にて 必殺！白き牛乳稲妻アタック！武術の修行】

「ウチ、強くなりたいんや。」

「ならば、この改造コーヒーか巨大化紅茶を選びたまえ！」

ワキワキした動きで器用に運ぶタキオン。

「やる気が無いより有るのは結構結構。」

さつそく素晴らしい実験ウマ娘がいたと上機嫌だ。

「いや、そう言う強化ウマ娘になりたいワケやないで。そもそも怪ウマ娘ですらないやん。ウチは白い稲妻やねん。自称するにはちと格好良過ぎるけどな。でもな、その二つ名に相応しい必殺技を習得したいんや！」

「白い稲妻か。私のネーミングセンスにはちと劣るか。」

「悪かった。イジリ過ぎたわ。」

決意表明と謝罪するタマモクロス。このタイピングでタキオン一派に頼るのはリスキーである。それは彼女自身も分かっている事だ。しかし、時間も戦力も足りない中、違法改造で無い方法で強くならなければ大阪に明日は無い。

「まあいい。武術だとカレン君は何か知っているかな？」

「その筋のフォロワーさんにたちに聞いてみるね。」

さつそくウマスタを操作し始めるカレン。するとさつそく彼女のフォロワーから大量の情報が入ってきた。タマはその速度と量に驚きを隠せない。

「カレンは武術も出来るんか？」

「合気道が少しだけ☆」

(本当は極めてるけどね。だからさつそく方面のフォロワーさんにも強いってわけ。)

「白い稲妻君。改造コーヒーと巨大化紅茶がダメなら雪印乳業の雪印牛乳無調整100%にでもするかね?」

「すまん。 (何かわざとらしいな。牛乳の宣伝かいな。ビシッ!)」

タキオンではなくカフェが出てきた牛乳を飲むタマ。その姿は勝負服も相まって、微笑ましいものがある。彼女に運動会の小学生の様だと言ったら怒られてしまうが。

「これほんまに美味いな! 全身から力が湧いてくるわ!」

元氣100%となったタマモクロス。その間にカレンがめぼしい情報を得ていた。

「金剛八重垣流の格闘術に対怪ウマ娘用の『真空竜巻落とし』という奥義があるみたい。」

「真空竜巻落とし? 何や。ゴツツええやん。カッコええヤン。連絡はとれるん?」

「ちよつと待ってね☆」

たちまち返事をもらうカレンにタマは内心思う。

(カレンチャン。おつそろしいヤツやな。下手したら

防衛隊や親衛隊にも大勢フォロワーがおると違うか? 「即応体制」なんて普通使わん

やろ。一応警戒はしとくか。)

「お孫さんの『ヤエノムテキ』さんなら通じるね。」

「そうなん。ならさつそく行かせてもらうわ。」

「カレン君。同行をお願い出来るかな。」

「分かったよ。カレンに任せて☆」

発進直前。カフェが牛乳パックを丸々一本手渡して来た。

「ありがとさん。修行して必殺技をひっさげてくるわ。」

(もつともカレンには見張られてると違うか?これ。)

こうしてスーパ―空飛ぶ炊飯器1号君に乗って、ヤエノムテキなる武術家に会いに行くのだった。

【日本ウマソルジャートレ―ニングセンター近辺の公園にて トウカイテイオーとウマソルジャー崩れたち】

トウカイテイオーはウマソルジャー崩れの不良に絡まれていた。肅清された旧シンボリシリウス派の元ウマソルジャー達だ。

「会長閣下様の腰巾着つてのはテメーか!」

テイオーに詰め寄るソルジャー崩れたち。テイオーはイヤそうな顔で逃走をはかる。

「逃げるって事はやつぱりあの噂話は本当だったのか。英雄様は俺たちを見捨てたと。」

「違うよー!お前たちが勝手に派閥を結成して暴走したからじゃないかー!」

「シリウス先輩はハメられたんだ。あのご立派で傲慢な閣下殿になー!この腰巾着め!」

テイオーは即座に逃げなかった事で取り囲まれてしまった。背の高いソルジャー崩れから襟首を掴み上げられてしまう。

「そ、そんな事あるはずない。それに、ボ、ボクでも全部は分かんないよ。苦しーよ……。」

「さては、会長殿とグルになって先輩を締め出しにかかったな!」

小柄なテイオーはそのまま引きずり上げられてしまった。

「ち、違う……よ。ボク……何にも……知らな……。」

「嘘をつくな!」

「助けてよ……カイチョー……。」

「助けに来たぞ。テイオーから……手を離せ!」

怒気をまとったブラックシリウス。まさに皇帝の神威に怖じ気づく不良たち。

「て、テメーは最近ウワサのルドルフモドキ!」

「モドキとは失礼千万だな。だが今はその様な事はどうでもいい。テイオーから手を離

せ!!!!

久しぶりに本当に腹が立った。」

ものの10秒と経たずに畳まれるウマソルジャー崩れ。テイオーは無事に救出され

た。

「ありがとうブラック!」

「構わないさ。当たり前の事をしたまでだ。共に帰ろう。」

しかし、背後から合流に遅れた最後の一人が襲いかかった。

「突っ込み空手チョップ！」

「ぐへっ！」

しかし、たちまちグリーンスズカに始末された。ウマソルジャーとしての活動が制限されている事もあり、ウマドルの練習をしていたのだ。

しかし、東の突っ込みソルジャーとしての腕は健在である。ちなみに西は言うまでもなく白い突っ込みこと（白い稲妻や！タマ談）タマモクロスである。

「危なかった。大丈夫？二人とも。」

「済まない。本当に助かったよ。まだまだ私は未熟だな。背後を取られるとは。」

反省してうなだれるブラック。突然は背中に抱き付くテイオー。

「どうした？」

「今度はボクがブラックの背中を守るから！」

「テイオー。ありがとう。未熟な私だが宜しく頼む。」

握手を交わす二人。すると、通信機で話していたスズカが帰ってきた。

「警察を呼んだから。帰りにハチミーを買って帰りましょう。」

現在、ウマソルジャーは出勤出来ない為、警察に頼るしかないのだ。

「わーい！ハチミー ハチミー ハチミー ハチミー！ハチミーをーなめーるとー♪ブラックもスズカも今度いっしょに走ろーよ！」

「テイオーは一足早く駆け出す。顔を見せず、背中に影を落としながら。」

その後は仲良く三人で並んで帰還する。検問所を通過し、今日は元気良く分かれたのだった。しかし、ブラックはテイオーが空元気である事に気づいていた。更に肅清されたというシリウスの事も気にかかっている。

「シリウスがいないと怪しんだが、まさかその様な事になっていたとは。この世界のシンボリドルフは秋霜烈日な性格なのか? しかし、幼なじみにあの様な取り巻きが出来るとは。シリウス……。」

他にも心配事は山ほどある。

「(どうにかして大阪に出られないものだろうか。元の世界に帰りたいが、このままではどうにも心許ない。)

様々な事で悩むブラックであった。会長ならばこのような重たい案件は全て自分の所に来るのだ。

「(この程度で怯んでは、あのシンザン会長を超えられるはずがない。)

こうして、少なくともプレッシャーを感じて帰宅したのだった。

【山奥のお寺らしき場所】

「(ここが奥義を伝承するつちゅー場所かいな。さすがに雰囲気あるわー。)

「さすがカレンのフォロワーさんだね。」

ツカツカと長い石段を登る二人。しばらくすると、大きな山門が現れた。両脇には美しい阿吽の木像が鎮座し、こたらを睨んでいる。

「お邪魔するで。ヤエノムテキ師匠はおるか？」

「はあつ！はつ！はあつ！」

道場からは誰かが稽古をしている声が聞こえてくる。キビキビとした掛け声が気持ち良い。

（中々気合い入ってそうなとこやな。気に入った！）

声に気づいたのか、道着を着た一人のウマ娘が出てきて礼をする。

「金剛八重垣流の流派を修行している者です。どのようなご用件でしょうか？」

「ウチはタマモクロスっちゅーもんや。関西でウマソルジャーをしとる。実はかくかくしかじかでな。」

「まるまるウマウマ娘というワケですね。私はヤエノムテキといいます。実はじいちゃ——、祖父母が正式な道場主で。私はまだまだでし・・・!!」

突然、固まるヤエノムテキ。口をパクパクさせて手が思わず遊ぶ。

（大丈夫かいなー。）

その慌てぶりに少しだけ心配になるタマ。

（カレンの方を見とるな。なんやあつたんか？）

「か、」

「か?」

「カワイイカレンチャン!!まさかこの私を直々にお尋ね下さるとは!ま、守らねば……。

(しかし・・私は。) さあ、こちらへどうぞ。ご案内致しますよう。」

「ヤエノムテキさんも私のフォロワーさんだったんだ。カレン、とつても嬉しいな☆」

「はいっ!」

こうして気持ちの良い値切り並に、スラスラと事が運ぶのだった。

(何やえらい顔が広いな、カレン。相変わらず油断出来へん。)

「金剛八重垣流には兄弟の様な流派があります。番田流格闘術と言います。その昔、怪

ウマ娘を倒す為、特別にその奥義を当流派でも特別に取り入れたのです。その技ならば

怪ウマ娘相手でも倒せるでしょう。」

こうしてヤエノムテキが師匠となったのだった。しかし、唐突にウマソルジャーの怪

ウマ娘センサー鳴り始める。

「こんな時までセンサーかいな。案外ポンコツなんやでこれ。」

タマはヤレヤレと言った様子でセンサーを打ち切った。

「では特別にさっそく技をお見せしましょう!しかし、この技には受け手が必要なので
す。」

「パイルドライバーかいな。いきなり奥義でやれるんか？」

「カレンがやらせてもらうね☆」

「いえ、カレンチャンさんに万が一の事があつては。私は腹を召さねばなりません。時間が私にもありませんから。奥義の会得に全ての力を注ぎます。」

「それはカレンが許さないっ！約束してヤエノさん。お願い☆」

カワイイポーズをとるカレンチャン。

「カレンのヤツは合気道を『極めて』るんや。何度か型を見取り稽古すれば、上手くウケられるやろ。（知らんけど。ここら辺でカレンの強さを見ときたいな。）」

「分かりました。ではさっそく行わせていただきます。」

幾度か型を見せ、確認の軽い組み手を行う二人。そして、場所を移して下に安全を確保した上で本番が行われた。

「金剛八重垣流改め番田流格闘術奥義！真空竜巻落とし!!!」

高所から回転して逆落としをかけるヤエノ。その技を受けつつ、途中で見事に離脱してみせるカレン。

「お怪我はありませんか？」

「カレンは大丈夫！」

（お互いなかなかのもんやな。しかし、本気で地面に敵をぶつけたらかなりの威力があ

るな。)

「よし！ だいたい分かった。今度はウチの出番や！」

こうして取り組みを始めた二人でしかし、タマモクロスはなかなか技を習得出来な
いでいた。

「筋は悪くないのですが。今日はこれまでとしましょう。客間にのご案内しましょう。」

「ありがとう☆」

「はいっ！ カワイイカレンチャン！」

【夜中、寢床にて】

その晩、タマモクロスはなかなか寝付けなかった。悔しさと焦りがあつたからだ。

(カレンチャン。恐ろしいやつちゃ。それに引き換え、このままではウチは顔向けでき
ん。それどころか、脱出する機会なんて到底掴めん。)

一方カレンチャンは隣でカワイイ寝息を立てて寝ていた。

(今の内といたい所やが、今の体でクソダサネーミングマシンであれだけかかった、あ
の大樹海を抜けるのは至難の技。いいとこ遭難するのがオチャ。真空竜巻落としとい
い想像以上に大変やな。)

【翌々日、夕方、道場の前にて】

「これで型稽古は概ね習得出来ましたね。本当によく頑張りました。後は岩場での真の

実戦あるのみですね。」

「ほんまに世話になつてしまったな。おおきに！ありがとーな！師匠！」

「はいっ！カレンさんもカワイイです！」

（こんな時までこれかいな。）

「とりあえず、その岩場つてのに案内してもらいたいねん。」

【道場から離れた岩場にて】

「ゴツツイいとこやなー。」

高所から眺めを楽しむタマモクロス。ついでに脱出経路を確認する。

「当流派でも最近は殆ど使わない場所ですから。」

「そらそうや。この高さやと、ヒヨドリ越えのサカ落としや。義経が強かつたんわやっぱウマ娘だったからなんやな。せやから人間では出来へん奇襲が出来たんや。頼朝に撃たれたんのもその力を恐れられたんとちやうか？」

「・・・単にそれだけではありません。先祖伝来の言い伝えによると、義経は晩年日本一の大天狗の所業で怪ウマ娘にされてしまったのです。頼朝が義経を討った様に、誰であれ怪ウマ娘は『安定化』の為に撃たれなければなりません。」

もつとも怪ウマ娘では無い範頼まで討たれているのだが、構わないだろう。そして、再びピーピーうるさく鳴り始める怪ウマ娘センサー。

(…またかいな。今度整備班に文句の1つでも言うたる。)

「気を付けて、ヤエノさんが!」

振り向くと、ヤエノムテキ自身が怪ウマ娘と化していた。

「ほんまやつたんかつ! てか師匠!」

「やあつ! 真剣勝負です、タマモクロス! もはや尋常に勝負する理由はありません。風瀟々として易水寒し。壮士ひとたび去りてまた帰らず!!」

(さん付けが吹き飛びよつた! あかん! 目が本気や!)

「真空竜巻落とし!!」

凄まじい迫力に押され、遂にそのまま奥義を食らってしまふタマモクロス。彼女は高所から拘束され、高速回転したまま地面に突っ込む。そのまま突き刺さり、ゴロリと地面に転がってしまふタマ。

「うう、…うっ!」

(なんやこれ…、あかん…ほんまにあかん。)

(口元と手の甲から血を流すタマモクロス。このままでは彼女は倒されてしまふ。頑張れタマモクロス! 君の戦いに未来がかかっているぞ!) ナレーションC。

「嗚呼、我已(や)んぬるかな(ああ、私はもうおしまいだな)と言うか! 白い稲妻!」

「古典なんぞ知らんわ! しかしなあ、白い稲妻だけは止めるつもりはない!」

(白い稲妻の脳内に稲妻が走る!!) ナレーションC。

(そうや、ウチにはカフエからもうた白い牛乳がある! 相手は師匠とはいえ怪ウマ娘。この際、全力全快で挑み、そして倒す! それがせめてもの恩返しや! いくで師匠!!)

地面が削れる程の力で拳を作り、遂に立ち上がったタマモクロス! その瞳は再び輝きを宿していた。

「はあ・・はあ・・。ここで・負けるワケには・・いかんねん! ウチには・・お父ちゃん・お母ちゃんちびたち、そしてあんたから受け継いだ熱い魂があるねん!」

「これ、受け取って!」

スーパー空飛ぶアイロン鏡2号君からカフエが牛乳パックを丸々一本投げて来た。

『成分無調整 雪印牛乳』! カフエ?! 何だか知らんけど助かったわ!」

牛乳を受け取ったタマモクロス。口を大きく開けるとこぼれるのも構わず、一気に一本飲み干してしまった。

「いくで師匠! 今度はウチの2つの白い浪花節を見せてやるで! ハアアアアッ!」

凄まじい形相になるタマ。喉が枯れそうな程声を張り上げ、全身から白い稲妻が放たれる。

「まぎか!」

「ハアアアッ!」

見事な構えを見せる彼女にヤエノムテキも驚く。

「パワアアアアアー全快ツ!」

白い稲妻の名に違わず、凄まじいダツシユでヤエノムテキに迫る。そして、彼女を抱え込むと一気に駆け上がった。

「テヤアアアア!!」

更に崖から飛び降りると一気に高速回転し、凄まじい衝撃と共に地面に突き刺す。その光景はまさしく「白い稲妻」だった。

「牛乳竜巻落とし!!!」

(成分無調整 牛乳おとし 「種類別」 牛乳 モォー!) ナレーションC。

静寂の中白い粉塵が舞い、タマモクロスは残心の姿勢を示す。遂に決着がついたのだ。

「どうやつ!ウチの勝ちや・・。」

土煙が晴れると、ヤエノムテキが姿を見せる。彼女は桜吹雪となつて、まさに消えようとしていた。

「よくいきなり奥義を会得しました。私は消えるべき存在です。これで良いのです。風瀟々として易水寒し。壮士ひとたび去りてまた帰らず・・。」

「師匠・・ほんまに・・ほんまに世話になり申した。しかし、何で師匠が・・。」

涙ぐむタマ。そんな彼女にヤエノムテキは優しく微笑みかける。

「これで良いのです。タマモクロスさん。よく聞いて下さい。この世界は宇宙の膜に浮かぶ一つの泡に過ぎません。奇跡に頼らず、ニセ預言者とニセ救世主に気をつけて下さい。私が正気を保てるのはここまでです。後の・・事は・・のよろ・・。」

「しいしよおおおとおつ！」

思わず絶叫するタマとカレンチャン。

「あ、そういうえばサインもらいたいのですけど。カワイイカレンチャン!!」

「感動の別かれちゃうんか! (ビシッ!)」

思わず突っ込むタマモクロス。もちろんカレンは道着にサインをしてあげたのだっ
た。

(今や! 師匠、ほんまにすまん・・。カフェ、オグリキャップはウチが今度こそ何とかしたるで。待つてな!)

その隙を見て、タマモクロスは脱出した。カワイイの求道者たるカレンチャンは自分のフォロワーさんにサービスせずにはいられなかったのだ。

「良かったのですか?」

その様子を密かにうかがっていたカフエとタキオン。しかし、タキオンは冷静だった。

「ここは三国志演義の孔明が孟獲にした七縦七擒の故事に倣おう。彼女は必ず私たちの元に戻ってくる事になる。皇帝陛下もおっしゃられた。英雄の心を得れば、出来ない事はそんなに無いとね。」

遂にタキオン一派から脱出したタマモクロス。彼女は一路、急いで帰還するのであった。

【次回予告!】

（こうして新しい必殺技を手にしたタマモクロス。彼女は急いで帰還をはかるのだった! 一方、トレセン学園には暗雲が漂っていた。どうする会長ルドルフ! 一方、トレセン基地ではブラックが幼なじみの悲報を知る。どうするブラック!

遂に始まるダークウマソルジャーVとの戦い。暗躍する親衛隊の科学班! 過熱するO因子の争奪戦! とうとう賽は投げられた! 次回、遂に上陸す 大食い大怪物オグリン! 『ウマ娘』の命 『は』地球の命! ナレーションC。

第十一話 大食い大怪獣 オグリンの逆襲 願いよ届け
！ カフエ & タマモクロスの戦い！

【前回までのあらすじ。】

「ベッドで目覚めたブライアンとピワハヤヒデ姉妹。しかし、二人はすっかり変わってしまった。そんな心配する『会長』ルドルフの元にゴールドシップが現れる。

一方、ブラックルドルフは『皇帝』ルドルフにより幼なじみのシリウスが粛清されたと聞き驚きと不安を隠せなかった。

その頃、タマモクロスはオグリンを助け出すべく、ヤエノムテキのもとで修行に励む。所がそのヤエノ師匠自身が怪ウマ娘だったのだ。壮絶な師弟対決を征したタマ。ヤエノ師匠は彼女に『ニセ預言者』と『ニセ救世主』に気を付けよと言いついでにカレンチャンのサインをもらって消えていったのだった。

一方師匠が消えた頃、大阪上空では異変が発生し、人々の耳目を驚かしていた！（ゴールドシップ検閲済）。「ナレーションC

【大阪の某所にて】

ようやく大阪に帰還したタマモクロス。彼女は驚くべきモノを目にしていた。空に

現れた目玉である。梅田辺りから神戸方面を凝縮しており、大変気味が悪い。

最近東京上空に現れたモノと類似しているらしく、関西の昼番組はこの話題で持ちきりだった。梅田駅周辺のビルには大勢の野次ウマが殺到し、しきりに写真や動画を撮ってはSNSに上げていた。その一方で、梅田に集まっていたデモ隊と衝突するなど、辺りは騒然とした雰囲気になっていた。

場末の漫才でさえ当然の如くネタにされ、かなり騒然とした状況になっている。

(いかな。だいぶ社会不安? つてのが蔓延つておるわ。このままやと治安が悪くなるかもしれない。警戒せーへんと違うか?)

頭を抱えながら急ぐタマモクロス。電車に乗って基地へと帰る。その『阪神及び大阪』基地は『兵庫県』宝塚市に設置されていた。何かしら言いたげな表記からゴタついた過去がうかがえる。その事に、タマは正直ウンザリしていた。

「戻ったで。長官のところに頭したいんや。事情は後で話す。みなに心配かけて済まん。」

検問所を抜けて基地に無事入れてほつとする彼女。すると、たちまち心配していた関西ウマソルジャーたちに囲まれてしまった。さっそくみんなに可愛がられるタマ。知多半島の戦い以来、行方不明だったのだから当然だろう。彼女は後輩への面倒見も良

く、人望があるのだ。基地のお祭りで、幼稚園児の着るスモッグを着せようとした先輩もいるぐらいである。

【阪神及び大阪基地 長官室】

「よー帰ってくれたな。まずは水でも飲みや。」

運ばれてきた水を飲み干すと、タマは事のあらましを語った。長官は驚き、ウーンと思わずうなる。

「にしても、府中から脱走したタキオン一派に潜入し、その情報収集にあたっていたとはホンマかいな？信用しとらんワケではないが、さすがにそこまで出来るんか？」

「そうなんや。長官！特に聞いてもらいたいコトがあるんや。」

タマモクロスは巨大な秘密基地、1号メカに2号メカ。

カレンチャンのフォロワーについて語った。

「酷いネーミングセンスやな。天才科学者も片手落ちや。そこまでは手が回らなかつたんと見える。ワイなら北千里とか十三なんてどや！ミナミの帝王でもええで。」

さつそく話が脱線しかけている。そこでタマは素早く乗り突っ込みで対処する事にした。

「あれは酷かったで。てっ、そこかいな！（ピシッ！）」

彼女は長官の変わらぬボケにある意味安心していた。なにせ最初の反応がクソダサ

ネーミングだったからだ。大事なものはそこでは無いのだが。

「あいつら、ウチらの想定以上にゴツツイ組織やで。正直、大阪だけでやるのはシンドイ。それに、オグリンもオグリキャップに戻さんといかんし。」

「しかしなー。基地の所在は不明。映像も破壊されて証拠も無いのがな。これ、市販の牛乳パックやろ。巨大な秘密組織がパック一本。まるでコントのオチみたいや。」

ワイはタマさんを信じたいが、上を説得するには具体的なもんが必要なんや。どこからそれだけの資金が流入しておるのかよく調べんと。

せやけどな、今は何よりオグリンやでタマさん。関東の奴ら、ワイラをけしかけておるんや。おまけにあのゴツツイ目玉が市民の不安を煽つとる。弱り『目』に崇り『目』とはまさにこの事やで。こちとらホンマに堪らん。」

困ったモノだと肩をすくめる大阪長官。タマが不在の中、色々とゴタついていたらしい。長官の顔にはたまった疲労が浮かんでいた。いつもは何かと元気はつらつたる様子と違う。

「オグリンに関してやが、『討伐』一辺倒や。中京の財閥と大企業群がえらい剣幕で怒つてな。」

「せやけど長官。ウマ娘の命は地球の命やなかったんか?」

「タマさん。中京だけやないで。次は大阪のワイんとこの財閥にけしかけてきよった。」

玉突き事故式に。ここ最近電話が鳴りっぱなしでな。ホンマに済まん。タマさん。堪忍してくれや。」

頭を深く下げる長官。言われた側から長官室の電話が鳴り、秘書も含めて慌てて対応に追われている。電話口からは「責任者出さんかこら!!」と怒鳴り声が漏れてきた。

その様子にさすがのタマモクロスはうなだれるしか無い。

カフェは本来敵である自分を助けてくれた。

しかし一方で、何としても故郷だけは守らねばならない。それさえ出来ないならば、もはや西の突っ込みウマソルジャーまでのし上がった意味不明など無い。

(オグリン・カフェ・おとん・おかん・チビたち……。こんなんやからタキオンは府中を出たんかな。)

こうして懊悩する白い稲妻であった。

【伊勢湾内にて

「なんだ・・・あれは?」

釣り船の男性が何か海を泳いでいるのを発見した。

大きさは10メートルはあり、銀色の長い尾が太陽光を反射している。

「??・・・船長さん。あれ何や? 見間違いかいな?」

「いや、ちよつと待ってな。」

急いで船室から何か本を抱え、双眼鏡とリーダーを見つめる船長。

「ムムム。いやまさか・・?しかし大きすぎる。まるでクジラだ。」

『ウマソルジャー名鑑 20×号』彼はその本片手にうなったのだった。

「あれは・カサマツにいた『芦毛の怪物』。オグリキャップか?!元祖アイドルソルジャーがなぜ?!」

さっそく海上保安庁と周辺海域の船舶に無線を飛ばす船長。オグリキャップが大食い大怪獣オグリンとなっていた。その事を船長はなぜか知らなかった。

【部隊配置状況説明】

ウマソルジャー部隊は大阪へ、防衛隊は阪神隊を中心に中国・四国の本隊、九州隊の一部を大阪へ出動させていた。関東の本隊と親衛隊は相変わらず動かない。

ウマソルジャー部隊は大阪へと追いやられていたのである。

しかし、親衛隊は科学班と実験部隊、護衛部隊が大阪と米原に出ばつてきていた。既に配置は完了し、大怪獣オグリンの上陸を待つのみである。名古屋近辺には必要最低限の防衛隊員しか残存していない。つまり、伊勢湾一帯は殆どが空きであった。こうして伊勢湾沿岸は大混乱に陥るのであった。

【中部国際空港・セントレア】

「全機に通達！大怪獣オグリンが伊勢湾内に出現しました。全便発着中止。待機中の便は近隣の安全な空港に着陸をお願いします。繰り返しします！大怪獣オグリンが伊勢湾内に出現！・・・」

空港内に不穏な空気が漂い、子どもたちは不安気に親の顔を見あげる。しかし、大人たちもオグリン再上陸に為す術は無かった。ただ抱きしめ、大丈夫だと声をかけるのが精一杯である。

「タキオン一派の秘密基地にて」

大食い大怪獣オグリンが伊勢湾岸を目指して泳いでいる。この情報をタキオンも無線傍受により掴んでいた。

「まずは名古屋からその近隣。そのまま米原辺りを抜けて京都から大阪といった所か。最終目的地がそのまま大阪なら、そこからアクション2の信号が出されているかもしれない。なら、こちらはあちらの出口をもう少し見物させてもらおうとしよう。発信地点をより絞り込むには更に情報が必要だ。」

しかし、ダークマンハットタンCことカフェは首を横に振る。

「これ以上オグリンを苦しめたくない。」

「ではカフェ。私たちはわざわざ敵前に現れるわけかい？それでは捕まる可能性が高

い。余り賢いやり方ではないな。」

「オグリンにこれ以上誰かを傷つけて欲しくないから。」

必死の抵抗を見せる彼女にタキオンは溜め息をつく。

「やれやれ。思えばあの改造治療以来、一蓮托生の仲だ。オグリキャップ君もその一人
と言うわけかい、カフェ。」

その通りだと今度は首を立てに振るカフェ。

「トレセン基地がダメなら、ここが最後の砦という事か。私がやりたいことがやれるな
ら、基地から追放されようとも構わなかった。ならば、今ある戦力でやれるだけやって
みるとしよう。それで構わないね、カフェ。」

ありがとうとうなずくカフェであった。

「ジェットモグラに拡大念波自走砲を積み込め!カレン君は伊勢湾周辺のフォローに
極秘回線で暗号を流し、秘密裏に動員をかけるように。」

「お願いしてみるね。でも無理強いはなしだよ☆」

「それで全く構わない。志願者が一番練度が高いからな。」

「分かった!」

タキオンはテキパキと指示を出し、基地は整然とした一つの機械のように動き出す。
彼女は瞳を怪しげに輝かせてこう宣言した。

「さあ、実験の始まりだ！」

【名古屋港 金城埠頭近海にて】

遂に大食い大怪獣オグリンは殆ど無抵抗で上陸をしようとしていた。辺りの漁船群を物欲しげに眺める大怪獣。

海上保安庁の船舶が急行するも、たちまち怪光線によって飢餓状態にされてしまう。操舵不能に陥ってしまう保安庁の乗組員たち。

その横をオグリンは悠々と泳いでいくのだった。

本能のまま美味しそうな食べ物求めて。もはや彼女の暴走は誰にも止められなかった。

遂に名古屋港 金城埠頭に接近する大怪獣。その周辺を固める警官隊と残存していた防衛隊員。しかし、余りにも数が足りずジリジリと後ずさる。

「機械式の誘導メカはどうした？」

「既に、スクランブルをかけてます！後3分こらえて下さい！」

懸命に立ち向かう隊員たち。どうにか自前のレーションを火にかけ、オグリンをしばらく立ち止まらせる。

すると大空に轟音が鳴り響き、遂に飛行メカが登場したのだった。心強い味方の登場

に喜ぶ隊員たち。次々と小型の誘導メカが発射され、オグリンの行く手を阻む。ケムリに包まれる大怪獣。

「後は砲雷撃戦でしとめてやる!」

喝采を叫ぶ隊員たち。しかし、突如として耳を聳する巨大な轟音が鳴り響く。

「ヤツの腹が・・グーグーなって・・やがる!」

お腹を大きく鳴らすオグリン。その音波を受けて飛行メカと誘導メカが狂ってしまった。墜落する機体から次々とパイロットが脱出する。

更に一際背伸びをすると、大食い大怪獣は怪光線を乱射し始めた。隊員は大食いで食い溜めをしてこなかった為、次々と倒れて気絶していく。日頃のどか食い気絶耐性の無さが仇となったのだ。これは予算不足のせいである。

「・・・。」

気合いと根性で意識を保つ隊長。

周りを見渡すと、隊員たちは既に全滅していた。腕にはナイフが突き刺さり、一筋の血が流れている。足に刺したら動けなくなるからだ。更に太ももの内側には太い動脈が流れている。

(通信機器全般が不通だと? 対EMP用のハンヴィーもか。三次大戦でさえ乗り越えたはずだが・・。)

絶望的な表情を浮かべる隊長。オグリンは高高度の大气圏外核兵器の電磁パルスよりも強いのだ。

(ならば、・・せめて。)

最後の気力を振り絞り、発煙筒を炊く。これが金城埠頭より発信された最後の信号となつた。

食事の邪魔をする者達を泳ぎながら排除し、疲れてしまったのだろうか。オグリンはそのまま埠頭にどつかりと腰を下ろすと、お腹撫でながら

「ほーほー。」

と鳴くのだった。

(幸い大規模に市街地を巻き込む範囲では無い。しかし、街中で彼女がお腹を鳴らせば大変な被害が出てしまう。その前に何がなんでも止めなければならぬ!) ナレーションC。

【名古屋港 近辺の空き地にて】

ここは名古屋港近辺の空き地である。突如としてその地面が盛り上がり、ドリルモグラが姿を現した。

「やれやれ。また先ほどの攻撃が来たらまずいね。地下でお寝んねする所だった。推定規模は中といった所か。カレン派はひとまず温存しておいて正確だったな。」

辺りを見回すタキオンとカフェ。二人は念波拡大自走砲に乗り込むと、埠頭に向かうのだった。

一方、タマモクロスは高高度の飛行メカからスカイダイビングをしていた。大阪からイの一番に急行したのである。

まさに白い稲妻通りに芦毛の髪をなびかせ（人間は短くしておこう。）、天空より地面に降り立つ。そこからは折りたたみ式自転車で金城埠頭に向かうのだった。

【金城埠頭にて】

（一人銀輪部隊やな。ウチは白い稲妻やから、一人白銀部隊と言うわけや。）

見事なコーナリングでウマ娘専用の自転車を駆る。その速度は優に120キロを超えていた。あつというまに到着したのも当然である。

「あれは・・牛肉竜巻落としをしかけるにはデカ過ぎるやんけ・・。」

巨大化したオグリンを見て悔しがるタマ。ヤエノ師匠に恩返し出来ないかもしれないかもしれないと、顔を歪めた。

すると、それを聞いたタキオンが嬉しそうに声をかけてきた。

「ならば、君も巨大化すればいい。さっそくこの巨大化コーヒー牛乳砂糖入りを飲みたまえ。タマモクロス君。」

「タキオン! それにカフェか・・。せやからコーヒーは苦手やって言うたやん・・てっ、

すっかり対策済みかいな。ほんま妙な処まで気がまわるな。」

タマはカフェにはバツが悪いのか、目をそらしながら頭をかく。

「当然さ。君は貴重な素体なのだから。」

「せやからDr.『マッド』タキオンなんやで。」

「それは進歩を無料と履き違えた愚か者の妄言に過ぎない。」

継ぎ接ぎだらけの萌え袖をフリフリしながら上機嫌だ。

「ウチはな・怪ウマ娘をとっ捕まえる為にウマソルジャーになったんや。自分が化けたら本末転倒もいところやで。チビたちにも世話になった人にも顔向けできへん。」

「私に世話になった事は君の勘定には入っていないとは残念だ。」

「にげるには仕方がなかったんや。」

少し歯切れが悪いタマモクロス。それを見たタキオンは更に畳みかける。

「大阪上空の目玉だが、あれはヤエノムテキ君を君が倒してしまった時とほぼ同じ時刻に出現している。何らかの相関関係を疑うべきだ。悪い意味でまた結果が出てしまった。」

「なんやて!?!。」

「私は常々忠告してきた。怪ウマ娘は倒すだけで良いのかと。環境ホルモンのバランスの観点から研究し、捉え直すべきだと。しかし、誰も耳をかたむけなかった。みな継ぎ

接ぎだらけの『ヒーロー劇場』を望んでいたのだ。そして、理解出来ないからと言って無闇に遠ざけた。将来の事も考えずに。しかしまあ、三次大戦の後遺症だろうね、こういうのがぶり返してきたのは。」

それを聞き、思わず押し黙るタマモクロス。タキオンの袖を見て渋い顔をする。

「『継ぎ接ぎだらけ』の萌え袖はあんたなりの風刺やつたと言うことかいな。タキオン。」
「好きに解釈したまえ。それもまた生きる醍醐味だ。」

タマは考えてしまう。脇目もせず駆け上がったきたヒーロー劇場への舞台袖。そこに胡散臭い点もある事は分かっはいた。

「それでもウチはな・・せめてウチぐらいはヒーローでありたかつたんや。」

「ならばなりたまえ。自己犠牲はヒーローの性だ。もうすぐオグリンが活動を開始する。時間は無い。」

巨大化コーヒー牛乳砂糖「増し増し」入りを差し出すタキオン。それをじつと見つめるタマ。それからふと、南極観測船の白瀬の方を見た。大食い大怪獣も同じ方向をチラチラと見ている。

「ウチ・・決めたで。」

「何を決めたのかな?」

「こうするんや!」

その場で背後の謎空間からお好み焼きのセットを取り出すタマ。

「時間稼ぎとはいただけじゃないな。それこそ時間の無駄遣いだ。」

「カフェ！ 済まんが頼む。名古屋港水族館の大型液晶パネルを復旧させて欲しい。あんたんトコから逃げたクセしてえらく都合のええ事を言うとするのは分かつとる。でもな、ウチはオグリンにこれ以上させたくないや！ ほんまに頼む。」

カフェに拝み倒すタマ。カフェはそんな彼女をじつと見つめるのだった。

「力をかしてあげて。オグリンを助けたい。お友達もみんな怖がつてる。このままだと暴走するかも。」

「……」

しばしば思案するタキオン。彼女はカレンチャンに連絡する。

「カレン君。済まないが、名古屋港水族館のシヤチとイルカの様子をパネルに投影してくれないか。事情は後で説明しよう。」

「了解だよっ☆」

タマはタキオンとカレンの会話に驚きを隠せない。

「そこまで分かつてたんか?!」

「もちろんだとも。君たちがあそこで遊んだ事は分かっている。後はカフェと念波拡大

自走砲の出番というワケだ。いずれもせよタマモクロス君。君には必ず薬を飲んでもらうよ。今回は果たしてどうなるかな?」

「決まってるやろ。今は飲まん!今はな。」

オグリンは名古屋港水族館に大量の魚がいた事を思い出したのか、巨大パネルの映像に誘われて動き始めた。

「投影完了だつて!後はタキオンさんにお任せするね☆」

「了解した。では実験開始だ!」

タマモクロスはオグリンに呼びかける。

「オグリン!覚えとるか?ウチと水族館行った事。シャチやイルカと遊んだ事。今あんなの音波で苦しんどるんや。もうええやろ。オグリン。友だちを傷つけたらあかん。カフェもそう思つとる!!」

タマは名古屋港水族館の思い出とシャチを守りたいと叫ぶ。その叫びをカフェがオグリンに念派拡大自走砲で直接脳内に照射する。

「カフェ...。オイシソウ...ジュルリ。マルマル フトツテ マルマルウマウマ...。ワタシ ハ オマエ マルカジリ。」

「それだけはあかんでオグリン!カニバリズムやんそれ!!」

遂に強烈な突っ込みを入れる事に成功するタマモクロス。そのおかげなのか、本能と

思い出が葛藤し始めたのか、少しづつ後ずさるオグリン。口からよだれが、目から涙がこぼれ落ちる。

「目を覚ましてくれんかオグリン！みんなを喜ばせたい、守りたいとウチらはウマソルジャーになったと違うんか！カサマツのみんなの事はもうわすれたんか？違うやろ、カサマツの元祖アイドルウマソルジャー オグリキャップ!!!」

「オグリン！」

カフエも共に叫ぶ。大食い大怪獣は頭をフリフリしながら尾をバタつかせていた。

「……。（出力不足か？）焼き付いても構わない。エンジン全開！フルスロットルだ。」

更に強力な念波をぶつけらるオグリン。ついに埠頭から

海に転落すると、そのまま姿を消してしまった。カフエは疲労でそのまま座り込む。

「カフエ！」

タマモクロスは直ぐに彼女に駆け寄ると助け起こす。タキオンは素早くカフエを寝かせるのだった。

「カフエ。お疲れ様。あれだけ巨大な食欲にこんな小さな小さな体で立ち向かったのだ。ゆっくりと休んでくれ。カレン君も撤収だ！君のフォロワー君たちにはヨロシク伝えておいてくれ。」

(分かったよ。カレンからありがとう! って伝えておおくね☆)

「今更防衛隊が伊勢湾に封じ込めようとしても無駄だろう。水中での速度はあちらが上だ。さてタマモクロス君。今度は君が私に協力する番だ。カフェはしばらく動けない。」

「何をすればいいんや。」

顔を上げて覚悟を決めるタマ。

「データの分析が終わったら、そこに我々の露払いとして潜入してもらおうか。いいね。何かあれば遠慮なく薬を飲みたまえ。目的地は薬の隠し場所に分かる。それでは。」

こうしてタキオンたちは突然現れたドリルモグラに乗り込むと、素早く地中深くに消えるのだった。一人残されたタマは気絶している隊員たちを助けていた。

(一つ言い忘れとったな。港で穴掘って大丈夫なんか?)

カフェの身を案じる彼女だった。

【次回予告!】

(全力を尽くしてオグリンを避けたタマモクロスたち。タキオンは遂にとある場所が怪しいと睨む。仮装して極秘裏に潜入した先には驚くべき光景が広がっていた! 更にとあるウマソルジャー帰環のしらせが全国民に流れ、国中が混乱状態に。更なる激突と激動の次回にご期待下さい!) ナレーシヨンC。

第十二話 商店街のエール 頑張れ ナイスネイチャ！
奇策炸裂！大阪にワープ？ ニセマツクイーン再び現
る！

【前回までのあらすじ！】

「大食い大怪獣オグリン 再び伊勢湾に現る！意表を突かれ、恐るべき怪光線により蹂躪されるウマ娘省の防衛隊員たち。タマモクロスは大阪から急行するも、余りにも巨大化した為手が出せない！」

そこに颯爽と登場したタキオンとカフェ。タマは2人とカレンチャンの即応部隊との協力を決意する。両者の連携により、オグリンはどうにか海へと帰っていったのだった。しかし、タマは協力の代償としてタキオンに潜入捜査を約束させられてしまったのだ。

ナレーションC。

【国営放送特撮番組 正義の味方 キャロットマン！】

レッドペガサスは暇であった。自慢の必殺技「キャロットマンキック」を朝に三千昼

に八千行い、そこから中を穴だらけにしてしまった程ではある。

「次は何を蹴るつもりだ!」

当然、ヒシアマ長官に怒られてしまった彼女。掘った穴の埋め戻しをなぜかシンコウウインディと共にやらされる。なんでも日頃の行いが災いしてしまったとのことだ。

実に11000もの穴を埋め戻した2人。すっかり疲れた体を癒す為、お気に入りの映画を見て暇を潰していた。「劇場版 キャロットマン イノシシ仮面の脅威!」である。イノシシ仮面はキャロットマンが作ったニンジン畑を繰り返し荒らし、柵を破壊する「悪い奴」である。

物語の中盤、遂に農家のおじさんがケガを負ってしまった、悲しむキャロットマン。怒りに燃える「正義の味方」。ヒーローは人間界と自然界、そして人間社会で生きるモノと野生で生きるモノとの業を背負い、壮絶な対決をする。それが基本的な筋書きである。「イノシシ仮面にも言い分はあるけどさ。でもなー。ニンジン畑荒らしておじさん襲うなよな!」

正義の味方には守るべきモノがある。そのモノに縛られるからこそ、力は無制限には振るわれない。強者の自制なくして平和はないからだ。振るわれた剣は必ず鞘に収まらなくてはならない。故に鞘に収まらない剣は味方からも「危険」と判断される。そし

て、最後はへし折られるのだ。

攻撃を止めない相手に対抗するにしても、その行いは勝利の後に、自己回復が可能なレベルだろうか。徹底的な破壊はかえって悲劇の連載を招いてしまうのだろうか。

物語終盤、イノシシ仮面は同じ様な仲間が山には大勢いる事を告げて爆発する。こうしてもはや避けようも無い全面対決を匂わせて、映画は幕を閉じた。

この後、元気になったレッドペガサス。彼女はシンコウウインディとヒーローごっこをして、体が鈍らないようにするのだった。

【商店街にて】

マーベラスサンデーとナイスネイチャ。2人は同室と言うこともあり、いつも仲が良くて一緒にいる。というわけでもなく、ネイチャがマーベラスに気に入られて、度々マーベラス空間を体験するハメになっていた。

朝五時、マーベラスはそのまんま「マーベラス☆」と言って起きる。ネイチャはそのたびにどこかビクリリとして目を覚ましていた。しかし、悪気がない事は分かっている。また、どこか自己評価が低い彼女はある意味マーベラスが眩しく見えた。

自分は所詮、鈍い色の銅でしかない。かつてはピカピカに光っていた十円玉も、いつしか似ても似つかぬ姿に変わり果ててしまう。更に金属臭くて如何にも鈍くさい。500円が金色で一着なら銀色の100円玉は二着、3着は言わずもがな100円玉であ

る。

「なんか、共感しちゃうんですね。」

商店街のガタイの良いおっちゃん相手に駄弁る彼女。庶民的で話しやすい。よく言われる事で、自分でも良くも悪くも自覚はある。10円玉も財布に殆ど必ず入っていてどこか気安く扱われる。そんな所が、自分に似ているのかもしれない。くすんだ色も、かつての輝きを失った自分を見ているかのようだった。

「出来たばかりの新しい10円玉をみると、これって以前夢見ていたアタシかもしれない。そう思っちゃいますよ。そのうちサビてその他大勢に埋もれてしまっつて。」

ネイチャ自身はいつも通りの表情でいたつもりだった。しかし、耳は伏せられ、尾は力無く垂れ下がっている。彼女が本調子で無い事は明らかだった。

最近は気晴らしも無く、親衛隊から圧力をかけられている。更にメカブルボンなるメカウマソルジャー部隊が投入されるといううわさ話も聞いた。このままでは自分のソルジャー生命が絶たれるのではないか。彼女は焦りと絶望を感じていた。

「あはは・柄にも無い事言っちゃたかな、アタシ。辛気臭くしてごめんなさい。もう行くね。」

どこか気まづくなり、その場を去ろうとする彼女。それをおっちゃんは呼び止める。「ネイちゃん。これを見てみな。」

取り出したのは錆びた10円玉だった。それにコップとレモンを持ってくる。「まあ見てな。」

固いはずのレモンを片手でそのまま握りつぶすおっちゃん。それから、下のコップに溜まったレモン汁にしばらく10円玉を浸す。

「それ、知ってますって。簡単にサビが取れる方法ですよ。小学生の自由研究とかでやる。」

今日のネイチャは相手が気安く話せる事もあり、スレてしまった部分が露出していった。しかし、すぐに思い直して謝る。

「ご、ごめんなさい。アタシ・・・お世話になつてゐるのに何て事を・・・」

自己嫌悪に陥つてしまう彼女に、おっちゃんは首を横に振る。

「お互い寄りかかつて生きていける。それがオレたちなのさ。いいつてことよ。それにな、コレはオレの勝手な解釈だ。単なる独り言さ。」

そう言うと、店主は取り出した10円玉を磨きながら語り出す。

「こんな事は小学生でも知つてゐる事だ。だけど、オレは思う。レモンは酸っぱい。錆びたコインがもう一度ピカピカに光るには、こういう酸っぱい経験がかえつて役に立つ事もある。絶対なんて事はないけどね。」

そうして磨いて磨いて、元通りピカピカの光を取り戻した10円を見せるのだった。

「これはオレなりの10円玉とレモン汁への解釈なのさ。人生は解釈の積み重ねだと思っている。単なる事実の積み重ねじゃない。それだけなら世の中こうはなっていない。

過去は変えられないけど、未来は変えられると良く言うよね。でも、オレは現在には常に過去と未来の重なり合う場所だと思っている。だから、未来には実は現在と過去も含まれている。確かに過去に起こった事実は変えられない。でもその事実も、もしかしたら更に前の自分と周りの人の解釈が関わって起こった事かもしれない。

そういう感じでオレは自分なりにこう考えた。どうして過去に対する解釈を変えずに、今までの解釈のまま現在も未来も変えられるのだろうか? 解釈が変わらなければ、結局は過去も現在も未来も同じ様なものではないか。例えば10万年生きても解釈が何も変化しないなら、果たしてそれは知能を持つ生き物が『生きた』と言えるのだろうか。

現在で踏ん張るには左脚は過去、右脚は未来も含めて乗っかっているのね。オレたちは確かに2本の脚と地面を物理的に歩いて移動出来る。おっちゃんもそれだけならずいぶん歩いたり、走ったりしたよ。でも頭の中身も一緒に走らせなかつたら、どれだけただで移動したって結局は同じ何じやないかって。

何かワケの分かんない変な独り言を言っちゃったね。ごめん。今日はコレを持ってつてくれや。オレの気持ちさ。」

「そ、そんな・・・とんでもない。」

慌てて手をバタつかせるネイチャ。しかし、おっちゃんはそのまま串を何本か紙袋に包む。それから、ネイチャに手渡さすのだった。

「ようは、既にネイちゃんはレモン汁に浸かつてるかもしれないわけ。それなら後は磨くか磨かないかだとおっちゃんは思うな。そして、磨くならどうやってどこまでやってみるか。まだトレセン学園基地にいる。その間だけでもさ。」

それから、済まないけど、しばらく留守にして店は店員に任せる。また、帰ってきたら美味いつくね食わせてやつからな！」

ガハハと豪快に笑う様子に、ネイチャも少し元気が出て来た。

商店街を帰る彼女は店主のおっちゃんに言われた言葉を思い出していた。

「後は磨くか磨かないか、か・・・結局は地道な作業をするって事わけか。でも・・・。アタシ・・・本当はこのまま終わりたくない。ホンモノの黄金にはなれなくても、磨けば銅だって！」

商店街を出てわき道にそれると、すぐ隣にマーベラスサンデーが現れた。

「今のネイチャ、とつてもとつてもマーベラス☆いいよ！いいよ！」

「うわっ。て、いつからいたの?!」

慌てて驚くネイチャ。突然現れちゃのだから当然の反応である。マーベラスはマー

ベラスに手をバタつかせながら、グイグイとネイチャに迫って来る。一方、ネイチャはその様子に少し気圧されていた。

「さつき!今のネイチャがとつてもマーベラス☆だったから来ちゃった!」

「それで来られるのね・・・。(ますますアンタの事、分かんなくなつたわ。まあマーベラスがマーベラス☆って言うてるし、悪い感じはしないかな。)一緒に帰ろつか。」

こうして、2人は仲良く並んで帰るのだった。しかし、国家親衛隊の見張り役が詰める検問所で、つくねは没収されてしまう。

「どうしてですか。食べ物を持ち込みは禁止されてなかつたはずですよ!」

『既製品』以外は持ち込み禁止だ。このヤケに丈夫そうなクシはなんだ?先端ヤケによく磨かれて、実に鋭く尖っているではないか!武器に成り得る。どこで入手した?全て没収だ!近場の監視無しの外出と罰が無いだけずいぶん手緩いと思えっ!」

「それはささくれてお客さんがケガをしないようにって、ふざけないで!」

しかし、必死の抗議も虚しくつくねは乱暴に没収されてしまう。この事に、ネイチャは少なからずショックを受け、うなだれてしまった。

(ネイチャのマーベラス☆が奪い取られた。)

マーベラスサンデーは悲しむネイチャをなだめながら、親衛隊員を感情の無い目で見つめるのだった。

一方、没収した親衛隊員たちは検査と称して新兵にまずは毒味をさせる。そうして、安全を確認してから自分たちが頬張るのだった。

【トレセン学園基地 地下の秘密の部屋】

「この様な所があったとは。私は何も知らされていなかったが。」

ブラックドルフとエアグルーヴは開かずの扉を開いて、そこにいた。

「第三次大戦時、地下鉄だけでは足りずに無数の防空壕が勝手に掘られたからな。親衛隊でも全てを把握する事など物理的に不可能だ。ましてここは『秘密の部屋』と呼ばれる場所だ。口外はおろか、あらゆる形で記録に残す事が厳禁されている。」

「万が一、その規則を破った者はどうなる?」

「少し特殊な記憶処理を受けるだけだ。なに、心配はいらない。大戦末期は『どんな実験』も国費では無い、出所不明のマネーロンダリングされた資金でやりたい放題だったからな。結果はお墨付きだ。」

「.....」

ブラックはとんでもない代物に触れてしまったとようやく認識したのだった。

「なぜあらかじめ教えてくれなかったという顔をしているな?この部屋以外、盗聴されている可能性があるからだ。だからこそこうするしかなかったのだ。恨んでくれて構わない。私は副会長としてやらねばならない事をするだけだ。全ての責任はこの私に

ある。」

エアグルーヴはあくまでも毅然とした態度に取る。その為、ブラックもひとまず引き下がるしかなかった。

「話題を変えよう。なぜ『秘密の部屋』と呼ばれているのか? 秘密保護の観点からしてもずいぶんと露骨な呼称では?」

何せ、わざわざ「ここに秘密があります!」と自白している様なモノだ。

「第三倉庫のように何の変哲も無い呼び方に変えては?」

「我が基地の伝統なのだ。悪いがそこは目をつぶって欲しい。個人として意見そのものには同意するが。」

困った先輩方だと首を振る女帝エアグルーヴ。ブラックもヤレヤレといった様子で部屋を眺めていた。

「だがわざわざそうした呼び方をされるだけの理由がある。」

「では、その理由とは?」

ブラックは改まった態度で女帝に尋ねた。その問いに、しばしば沈黙が地下空間を支配する。しかし、その重圧をもともせず、彼女は答えを堂々たる態度で待ったのだ。た。

「さすがは会長を追いかけるウマソルジャーだ。私の目に狂いはなかった。答えよう!

基地に危機が訪れた時、この部屋で何か面白い事をする、『救いのウマ娘』が現れるのだ！」

ブラックはヒューツという寒い風の音を聞いた気がした。その後、先程の沈黙とは別の意味の沈黙が空間を支配する。

「副会長。私はあなたの下らない冗談には付き合いきれない。ウマ娘選ミスだな。では。」

余りにもバカバカしい答えに即刻立ち去るとする彼女。エアグルーヴは慌てて引き留めようとする。

「本当の話だ。私も個人としてはバカバカしいと思う。しかし、会長も前会長もそう言われたのだ。」

「前会長が・・・？それは本当なのだろうか？」

「本当だ。」

即答する女帝。態度も言葉遣いも真面目で深刻なだけに、まるでちよつとしたコントの様になっている。

「私はいつでも本気だ。ブラックルドルフ！今府中で動けるウマソルジャーを関西に密かに送る。大阪のタマモクロスから極秘通信が伝書鳩で来た。」

「それはもひよつとしたらギャグで言っているのか? そうだろうな!」

笑顔で女帝に迫る「未来の皇帝」。思わずエアグルーヴは気圧されてしまう。そして、「むむむ」と唸るブラック。

「いくら検閲を避ける為とはいええ．．．ずいぶんと古風なやり方をするな。いや、これもひよつとしたらギャグ．．．」

「違うブラック。全て本当だ。私は一度もウソなどついていない。」

必死になり、珍しくウマ娘前で焦る姿をさらす女帝。お互い真面目な堅物同士だけに、かえって会話がかみ合わない。全てのやり取りが真剣そのもので行われているだけ、どこか滑稽な印象も受けてしまう。

「背に腹はかえられないか。そうだな．．．」

しばしば何か面白い事を考えるブラック。ふと頭を上げて、渾身のネタを放つ。

「ブルーのバイクがブルーブルー。」

エアグルーヴのやる気が下がった。思わず頭を下げて額に手をあててしまった。

「．．．。ブラック。お前はそういう所まで会長になりたいのか。その熱意は認めよう。身に染みてよく分かった。本当に真剣に目指しているのだな。しかし、そこまで真似する事も無いだろう。」

「そもそも私はニセマックイーンでもニセルドルフでもない。真正正銘、本物の『シンボ

リルドルフ』だ。唯一無二にして国土無双を目指している『シンボリルドルフ』だ！」
ブラックは相変わらずニセモノ扱いされていた。かの七冠ウマソルジャー『皇帝戦士』シンボリルドルフ。彼女に憧れる余り、完全コピーを目指していると。こうして、すれ違いコント染みたやり取りが続くのだった。

「まあ及第点つてとこだな。会長さんには劣るがな。」

突然、地下空間に誰かの声が響き渡る。ブラックはその声に聞き覚えがあった。

「ニセマックイーン!!」

「○○○様だつての！まったくよー、何度言ったら分かんたかな。まあいいや。取り扱
い○○○○ワープでタマモクロスの元まで連れて行くぜ！席は隣と後ろだ。早く乗
な。」

何もない空間をバンバン叩くニセマックイーン。まるでそこに、高級スポーツカーの
ドアでも存在しているかの様な口振りと動作だ。

「いや、そもそも席がどこにも何もないのだが・・・。」

「このV12気筒が奏でる魅惑のサウンドが聞こえないのか？熱い魂の持ち主なら、ほ
ら 聞こえるだろ？」

ほっほっほっ。ゴルゴル星を信じる者は救われる。アタシを信じな。それとヒシア
マ長官とグリーンズカも連れて行くぜ。長官の同行はそっちで何とか隠蔽してくれ。

スーパークリークは後で送り届ける。それから一言コメントの時間だ、こらあつ! スズカはこのまんまだとスピードの向こう側に行きかねない。以上終わり。」

最後にさらりと不吉な言葉を残す彼女。

(スピードの向こう側とは?)

ブラックはそれを訝しんだ。

「それと変装をしてもらうから、そこんところよろしくっ!」

こうしてヒシアマ長官、グリーンズズカ、ブラックドルフの3人がニセマックイーンの愛車?なるものに乗って大阪にワープするのだった。

【大阪市内某所にて】

「ウチ・・・やってもうた・・・。」

とある貸しロッカーにあったタキオンのメッセージ。文字はホツカイロであぶり出され、しばらくするとそのまま読めなくなってしまう、特殊な代物だった。更に三分するとボロボロに崩れてしまい、タマは残りカスを密かに処理したのだった。

結局、彼女はタキオンの指示に密かに従って伝書鳩を送ってしまった。なにせそこにはタマモクロスが目の敵にし、同時に密かに憧れていたレジャー施設『ウマソルジャー

パーク』に潜入せよと書かれていたからだ。裕福な家庭で育ったワケではない彼女にとつて、まさに渡りに船とはこの事である。入場券は同封されていた現金で、わざわざ自分たちで買うように指示されていた。

なにせその入場料金はそこそこ高い。一方で大戦以後の経済政策の失敗により、中間層は没落し始め

だ。治安も徐々に悪化した。その為、安心安全に楽しめるレジャー施設は需要があるのだ。

実際、施設クルーによるサービスの質は高い。その為、大好評で海外からわざわざ渡航する者も多い。クルーは殆ど休み無しの大変な激務である。しかし高給取りかつ施設内の様々な恩恵受けられる事もあり、経営企業の面接会場は常に超満員だ。その為、ウマ娘・人間共にその支持率と結束は極めて固い。俗にパーク一家と呼ばれるほどだ。

「せやけど、仮装でいつもより安く入れる期間限定キャンペーン中わけやな。経営悪化してるとちやうんか？ほんまにあほらし。」

さっそく突っ込みを入れるタマ。遠くから駅前広場を見ると大勢の失業者が集まり、デモ行進を行っていた。それに対して警官隊と防衛隊が押さえ込みにかかっている。

「ウチは絶対ウマソルジャーでいるんや。せやけど・手柄上げなクビにされてまうかもしれへん。今の長官もいつまで大阪にいてくるか正直もう分からんようになってしまった。今はどうにかなくても、メカブルボン?が配備されたらなあ。

それだけなやい。後輩が心配や。みんないい子たちばかりや。あの子らを守れるだけの権力を持つ為にも、危ない橋は渡れる時に渡るしかないんや・・。」

覚悟を決めて道を歩むタマモクロスであった。すると、背後から今まで聞いた事の無いエンジン音にヘッドライトが近づいてきた。

「タマモクロス駅へ、タマモクロス駅へ。お降りのお客様は忘れ物にご注意下さい。次は、トレセン学園でございます。アタシは常にアタシの味方だ。そういうわけで、お助け料 12億円。ローンも可。」

「ウチは駅かいな!てか、なしてみんなそろって空気イスやねん!12億なんかもつとらんわ。てか何なん・・。誰なん?もう・・突つ込み切れんわ・・。」

「アタシかい?世界全部がおつまみのウマ娘、〇〇〇〇〇〇ツ〇様だい!」

(その時、白い稲妻の脳内で稲妻走る!) ナレーションC。
(ニセマックイーン?なんか関西のおっさんみたいなしやべり方とボケかましそうやな。「パクパク」とかいそうやん。知らんけど。)

「てか、ほんまにあんた何ウマ娘やねん?実在しとるんか?」

それを聞いたニセマックイーンはニヤリと笑う。

「ほーほー。とうとう『あの』『實在』に手を出すとは。あーあー、やつちまつたなあ。」
「なんやて!」

正体不明のウマ娘に呆れられて、ついつい乗せられてしまうタマモクロス。

「なら、まず自分自身が『實在』してるか証明してみな。」

「現にウチはここにおるやん。過去の記憶も他人がもつとる記憶も記録も後輩も第三者の証言もある。何なら監視カメラの映像でもええで。警察もそれで犯罪を捜査するんや。これでしまいやな。暇ならいくらでも調べたらええで。」

へへんと胸を張る彼女。しかし、ゴールドシップは懐疑を呈する。

「その記録やら記憶が『實在』してるとどうやって証明する? 書類の内容は他者に認識されて初めて『正確』だと認識される。しかし、その認識はそもそも対象と完全に一致しているのか? 書類作成の見落として怒られているウマソルジャーが大勢いるのに? 完璧なレースはこの世に存在し得ない。なんでかってか? 認識が完全にアタシたちの身体と一致する事など有り得ないからさ。」

常に見落としの可能性を完全に排除出来ないが以上アタシたちの認識能力は対象と完全に一致している保証はどこにもない。過去の記憶もそうだ。なら何がその記憶も証明してくれる? 全ての物事は単独では存在し得ない。常に何らかの関係性に内包さ

れている。こうしてひたすら遡れば究極的に何がタマモクロスが『実在』していると証明してくれる?」

「な、なんやあんた。いきなり訳分からんこと言いよるな。結局、ウチがいると思えばウチは実在するんや。ウチがやれると思えば必ずやり遂げる。信じる心が大切やで。疑つても何もええことあらへん。それより行動あるのみや。」

「信じる者は救われる。いや、自力救済信仰だから正反対か。まあいいや。なんか飽きたし。じゃなあ。」

しかし、鬼気迫る表情でニセマックイーンの帰還に待ったをかけたウマソルジャーがいた。ブラツクルドルフである。彼女は凄まじい追い込みでニセマックイーンを捕まえる。

「今、トレセン学園基地ではなく『トレセン学園』と言つたな!!!今度は冗談ではないな!!!」

しかし、ニセマックイーンは「ほっほっほっ」と笑うとこう返す。

「世の中にはお互い知らない方が幸せな事もあるんだぜ。じゃあな!」

キツキリ固めたはずのブラツクから彼女はあっさり抜け出した。こうして謎多きウマ娘とその愛車は姿を消したのだった。

【大阪市内某所にて、その2】

「何やこれは!?!」

「仮装・・みたいね。」

「なぜこのヒシアマ長官が・・。」

長官は魔法少女の格好でご丁寧に魔法のラブリーな杖まで付属していた。タマモクロスは幼稚園児のスモッグである。

「ウチは園児ちゃうで！ほんまにちやうで！」

「お、落ち着いタマモクロスさん。」

スズカになだめられるタマ。しかし、恥ずかしさの余り顔が赤い。

「西の突っ込みソルジャーなんやろ？もうポケ倒しや、こんなん。」

「もう、突っ込み切れません！」

余りにもカオスな登場にカオスな仮装。もはや、東西の双壁ソルジャーがそろった所で、どうにかなりそうになかった。

【次回予告！】

「ニセマックイーンの活躍より、遂に大阪に集結したブラックたち！タキオンが怪しいと睨んだUSVパークへの潜入を試みる。ひと通りアトラクションをすっかり楽しんでしまう一行。しかし、その地下に隠された秘密施設がブラックルドルフを戦慄させる！果たして恐るべきUSVパークの正体とは！次回に続く！」ナレーションC。

194 第十二話 商店街のエール 頑張れ ナイスネイチャ! 奇策炸裂!大阪にワープ?
マックイーン再び現る!

続
く
!

第十三話 大阪決戦！ 潜入！ 無いはずのモノがある！
ブラツクに衝撃走る！ 深まるウマソルジャーパークの謎。
マツドタキオンのウマ娘探求譚 深まるウマソウル
の謎！

※UAがとうとう2000まで突破しました。本当にありがとうございます。

【前回までのあらすじ！】

ナレーションC

「商店街で思いを吐露するナイスネイチャ。そんな彼女に馴染みのおつちゃんは10円玉とレモン汁を人生に例えて諭すのだった。つくね串をもらい、彼女はそのまま終われないと決意を新たにす。

マーベラス☆なネイチャに喜ぶマーベラスサンデー。しかし、親衛隊の弾圧により無惨にもつくねを踏みにじられてしまうのだった。

一方大阪に出動すべく、副会長にして『女帝エアグルーヴが密かに動く。同行する

ブラックルドルフ。所が、辿り着いた『秘密の部屋』は余りにも唐変木な場所であった。何と『面白い事』をすると、『救いのウマ娘』やってくるという、何の根拠も無い空っぽの部屋だったからだ。

怒るブラックは押し問答をするが、かえってそれが功を奏する。『救いのウマ娘』とは『ニセマックイーン』の事だったのだ。彼女の見えない愛車に空気椅子のる3人。グリーンズスカ・ブラックルドルフ・ヒシアマ長官である。

こうして大阪の某所に〇〇〇ワープして到着した一行。そこでヘンテコな変装と言う名のコスプレをさせられてしまう。

ここでブラックルドルフはニセマックイーンより『トレセン学園』なる単語を聞く。何事かと迫るも、『お互い知らない方がいい事もある』と逃げられてしまうのだった。

【潜入! ウマソルジャーパークの闇】

【大阪の市街地にて】

「かわええな子やな。アメちゃんいる?」

「ありがとな!」

幼稚園児と間違えられて、大阪のおばちゃんから飴玉をもらうタマモクロス。

一方、隣のブラックルドルフは大人びた洒落たスーツ姿だった。その為、タマの若い母親と勘違いされたのかもしれない。

(これがクリークやったら、別の意味でどえらく注目集めとったやろな。なんせ、この前のイベントで完全に買い物途中の『若奥さま』やったからな。大して年も変わらんのに、なんでこうも違うんや。小柄なんて、ウマソルジャーじゃハンディキャップにしかならんわ。ほんま。)

生まれながらの体格差、欲を言えば大人びた色気皆無の自分。彼女はヒシアマ長官も見て思う。魔法少女と中身がしつかりと「ギャップ」を演出しているのが羨ましいと。一方、自分はコスプレですらない程、完成度が高いのだ。

(まあ、一番潜入に向いとるのがウチやと思つところか。実際その通りやし。その通り過ぎやけどな。)

過ぎたるはなお、及ばざるが如し。ヤエノムテキがいたらそうコメントするかも知れない。

かつて、一大商業都市として大企業が本社を構えていた大阪。しかし、その殆どが東京に移転してしまった。以前は賑わった中心街もシャッターを下ろした店が目につく。バブル崩壊と共に開発中だったビルディングもテナントはスカスカだ。おかげでエンパイアステートビルでは無く、エンプティ・ステートビルと揶揄される始末。

更に隣接する神戸港は災害を期に取り扱う貨物量が減少してしまい、今では港町も閑散としてしまっている。目立つのは川崎重工の博物館ぐらいだ。

一行はそんな斜陽大都市圏を抜けて、再開発に成功したウマソルジャーパークを目指すのだった。なぜか目立つ仮装行列のまま。まるでチンドン屋さんである。

【ウマソルジャーパーク行きの私鉄にて】

（関東と比べてるとやっぱ寂れとるわ。悔やしゅーて、悔やしゅーてならん。昔は大阪時代なんてもんがあつたとか。）

第三次大戦後、東京の人口を大阪が抜いた時代があつた。それを第二大大阪時代と呼ぶ。第一大大阪時代は戦前の事だ。しかし、現在高架から見下ろす街並みはそうでもない。沈む夕日によく馴染みそうなトタン屋根や古いモルタルのビルがチラホラと目につく。

（ウチはウマソルジャーになって、這い上がるんや。そこで家族に楽しめたい! せやから、どんなときでも歯食いしばって進まん。）

故郷を見て、決意を新たにするタマであつた。しかし、ルドルフは深刻な表情浮かべる彼女を心配していた。

（明らかに追い詰められているな。なにかしら力になれば良いが。）

こうして様々な思惑を乗せて、電車は決戦の地へ進んで行くのだった。

【ウマソルジャーパーク門前にて】

ウマソルジャーパークは幾つかの施設が複合して出来ている場所だ。複数のテーマ

パーク・ショッピングモール・屋内プール・国際展示場・動物園・植物園・博物館などが集まっている。

また、隣接して国から委託運営されている大規模な訓練施設がある。

「そこで、西日本中のウマソルジャーが合同訓練をやるんやで。」

「そうだったのか。私は初耳だな。」

「府中は関東やからな。それに最近入ったなら知らなくても不思議やない。気にせんでええよ。」

パークの門前には仮装をした行列が出来ていた。ブラック一行はその中に紛れ込むようにして進む。実はタキオンの用意した仮装によつて、認識疎外・指紋・眼球の毛細血管・声帯認証が誤魔化されている。まさに「マッド」タキオンの腕の見せ所だ。

待ち時間を潰す為か、大道芸が催されていたり、他に野外のミニコンサートまである。おかげで退屈せずに開園を待つ事が出来るのだ。

入園すると、スタッフが丁寧なサービスを提供する。刈り込まれた植木にちり一つ無いコース。道も緑色に綺麗に舗装されていて、無骨なアスファルトでない。更に独特の形状を照明したが目を引く。上空にカラスやハトは1羽も見かけない。代わりに雰囲気を出せる音楽が、

テーマ毎に別の曲が流されていた。

「このヒシアマ姉さんも一度は行ってみたかったけど、こんなに凄いとはないなあ。もう、普通の遊園地じゃ満足出来ない体にされちまったよ。」

ヒシアマ長官ものつけから圧倒されていた。ブラック一度もこうしたレジヤー施設に関心を示した事がなかった。そのせいか、比較対象が無いので凄さが分からない。耐性が無かった彼女はパークの雰囲気戸惑っていた。

タマはテンション高めでキャラメルポップコーンを買っていた。その容器も映画館で使われる安い紙製品ではない。プラスチック製のキャラクターのデザインがあしらわれた凝った作りのモノだった。

「美味いでこれ! サックサクの出来たてや! ブラックも食べるか?」

はしゃぐタマに、彼女は少し安心していた。先ほどの思い詰めていた様子は微塵も見られない。見た目も仮装も相まって、完全に園児のそれである。

(微笑ましい光景だな。いつしか私ももしかしたら・・・)

ブラックは今では思いもよらなかつた未来に思いを馳せる。

「幾つかもろうとしよう。ありがとう。タマモクロス。」

「ええつて事よ! ウチの金や無いし。」

(大阪基地から支給されたという事か。予算は使い切らなければな。)

「せっかく来たんだ! どんどん『調査』するとするか

！」

「長官……。目的を履き違えている気がするのだけれども。」

心配するスズカ。しかし、他の3人パークの雰囲気にも飲まれてしまっていた。

「最近出来た『占い師の国』に行こうや！」

「よし来た！行くぞキツネ仮面。」

「また巻き込まれてる……。」

因みにグリーンズカは緑のキツネの仮装をしていた。

さすがのようにしてブラックを見るが、こちらはタマモクロスと仲良くポップコーンを

ほおぼっている始末。彼女は

「もう、突っ込み切れません！」

と心の平穩の為に退避するのだった。

【ウマソルジャーパーク 占い師の国にて】

「まるで雪国に来たようだな。それにどの建物も奇妙な立ち方をしている。あの神社はどこのお社だろうか。どこ北国の名のある神社の拝殿を再現したものだろうか？」

物珍しさにキョロキョロするブラックにタマが説明する。

「ある映画の作品世界を丸ごと再現しとるんやで。あのでっかい神社は高さがおよ

そ48メートルもあつてな。その映画の舞台なんや。屋根の雪もホンモンそっくりでよー出来とるわ。なんでも古代の杵築大社の本殿をモデルにしとるらしいで。たいしたもんや。」

しばらく歩くと、敷地の一角に人だけが出来ていた。思わず吸い寄せられる一行。そこには小さなお社があつた。

「神社の巫女さんが占つてくれる店か。面白そうじゃないか。巫女さん陰陽師もタイムマン勝負をするかねえ。」

「映画じゃ決闘があつたはずや。お辞儀卿が決闘の礼儀にうるさいヤツでな。」

「気に入つた!! タイマンだ!」

「長官。本当にタイムマンしないでくださいね。相手は普通のウマ娘か人間のはずですから。」

またまた心配するハメになるスズカ。それにはブラックもうなずく。

「長官。ここは抑えて欲しい。代わりに私が行こう。」

「え、待ちや! ウチもウチも!」

こうしてブラックとタマが行くことになったのだった。

一方、スズカとヒシアマ長官は他の範囲を探索する事となった。

道端のマジックショーで暇を潰す事15分。ようやく入店すると、歴史を感じさせる古風な内装に、所狭しと細長い箱が山の如く積み上がっている。古びた椅子には1人のウマ娘が座っていた。装飾多過で巫女さん風の格好をした奇妙な出で立ちのウマ娘である。

「ハッピーカムカム 福が〜?来ませり!!」

彼女はお祓い棒をふりながら、水晶玉に何かを祈っていた。ムニヤムニヤと何か呪文らしきモノを唱えている。

他にも客がいて、明らかに何かを待っていた。ブラックはこれから何が起きるのかとタマに質問する。

「店内の客から1人だけ、あのお祓い棒に選ばれるんや。雰囲気もイベントもほんま堪らんわこれ。」

待ちきれずにソワソワする彼女。一方、ダルマを背負ったウマ娘は相手を見透かす様な目で周囲を見渡す。すると、何かハツとした表情を浮かべて1人の客も招いた。

「凄いやん!羨ましいわー。ウチが選ばれとつたらなあ。」

選ばれたのは何とブラックルドルフだった。

「普通 最前列で愛想良くしとらんと選ばれんと・・・。」

タマが独り言を言う中客の間をすり抜け、ようやく魔法使い役の前に立つ。すると、

彼女は「ホンニヤラナマラコンニヤクラー」と言いながら、何本かのお祓い棒を渡してきた。

さつそく手渡された棒を握る。しかし、どれを握っても何も起こらないし、何も感じない。とうとう何も起こらないまま『七』本目となってしまった。

すると、握ったトタン、棒から強いエネルギーを感じたのだ。同時に一陣の突風が辺りの箱を吹き飛ばし、机からランプが落ちて真つ暗になってしまった。

その様子を他の客は一言も発さずに見つめている。ブラック自身は気づいていなかったが、いつの間にか「皇帝の神威」を発動していたのだ。当然、何の変哲も無い客にスマホも使う余裕など全く無い。完全に肝をつぶされてしまったからだ。

奇妙なウマ娘は椅子から立ち上がると、予備の口ウソク立てに火を付けた。それから、手を胸に当てなが深々と頭を下げる。更に片膝までつこうとしたので、慌ててブラックは引き留めた。

「店員の方にそのような事はさせられない。どうかそのままお座り下さい。」

しかし、相手はあくまでも片膝をつき、真正銘本物の敬意と畏怖の表情浮かべ、彼女を恭しく見つめてくる。

『陛下』あああ! な、何と。お、恐れ多い! ありがたや、ありがたや。』

彼女は手を合わせながら、ただだけを言うと『七度』も頭を垂れたのだ。もはや到底単なる演技のレベルではない。さすがのブラックも薄気味悪くなってしまい、敢えて質問をする事にしたのだった。

「私は本物の『皇帝』でも『国王』でも無い。まだレースで『絶対王者』となつた訳でも無い。なぜ私の事を『陛下』などと呼ぶのだ？他の客の面前にて大變失礼だが、これはあくまでも演出なのだろう？」

ブラックは訝しんだ。

「わたくしは誠に僭越ながら、これまで清めさせていただいたお祓い棒の全てを記憶しております。シラオキ様が神託を下されたのです。」

彼女はゴホンと咳払いをしてからたたずまいを正した。

「このお祓い様にはある偉大なウマソルジャーの尾が一筋使われておるので御座います。そのウマソルジャーの尾を使って作られた杖がこの世にもう一本のみ御座います。誠に畏れ多い事ですが、あなたがこの由緒正しいシラオキ様のお祓い棒を持つとは。」
ブラックはただならぬ様子に思わず問い返す。

「では、質問させてもらえないだろうか？。そのもう一つのお祓い棒を持つ者とは誰の事か？」

しかし、そのウマ娘はひたすら頭を下げたままだ。

「何卒、何卒 平にご容赦の程を『陛下』。ですが、間違いなくあなたは何か偉大なことを成し遂げられるでしょう。シラオキ様がそのような神託を下されたのです。あの方も既に偉大なことをなされました。今後は更に恐ろしくも、更なる偉業を成し遂げるでしょう。」

そのまま占い師の店はお開きとなつてしまい、ブラックはポカーンとしたまま出て来てしまった。それをタマが素早く物陰に誘導する。

「えらいことやで! まさかブラック。あんたが選ばれるとはなあ。柄にも無く興奮してしも一たわ。」

2人はそのまま人目を避ける様にして「占い師の国」

を後にするのだった。

一方、占い師は密かにどこかの誰かと連絡を取り合っていた。

「全てはシラオキ様のお告げのままに・・・。」

【ウマソルジャータワー付近にて】

「結局何にも分からなかったな。」

「そうですね。ヒシアマ長官・・・。」

ジツトリとした目でスズカは長官を見る。おかげで色々なアトラクションに連れ回

さるハメになったからだ。とあるイベントでスズカは特等賞を獲得した。その理由が、空気抵抗が無い理想的な体格をしていたおかげだったというのだから何とも言えない空気がとなっていた。

「まあ良いじゃか。温泉旅館の宿泊チケットだ。今度、息抜きで行ってきな。このヒシアマ姉さんが許可する！」

どんと来いとばかりに胸を張るヒシアマ長官。

「何だか上手くかわされてしまった気が・・・」

「お待ち遠さん。さっきは相方がずいぶんと手柄を立てたで！あれにはウチも驚かされたわ。」

何かしら結果が出たと分かって、ホッと胸をなで下ろすスズカ。ヒシアマ長官も一安心といった様子だ。

「何か掴めたつて事か？タマモクロス。」

「それがな。何とあの占い師の国の名物イベントで大当たりしたんやで！何と皇帝仕様のシラオキ様直伝お祓い棒に当たったやわ！ほんまに大した運の持ち主や。」

思わず顔を見合わせるスズカとヒシアマ長官。

「それはつまり・・・2人して遊ぶだけ遊んで何にも成果を上げられなかった。つて事だよな？..な？」

「それは私たちも同じだと思っけど．．．」

「それもそうか。まあいい。とりあえずひと休み入れて、計画の立て直しだ。」

結局、ウマソルジャーパークを満喫した4人であった。

4人の背後には巨大なウマソルジャータワーが立つ。ちようどタワーが日陰となつてベンチには涼しい風が吹いていた。

「このタワーは誰をかたどっているのだろうか? 私の大先輩、シ○ザン会長か?」

「かの方は前会長さ。何度も繰り返しそう言っているだろう? あれは現会長『皇帝』と称されるシンポリルドルフ陛下さ。」

「ブラック」ルドルフは訝しんだ。なぜそこまでして巨大なタワーが立てられたのだろうか? 余程の理由がなければ予算が付くまい。

「そりゃ、我らが会長は第三次大戦の国民的英雄なのさ。ウマソルジャータワー部隊の部隊長で、世界中からでかい勲章をもらつてるよ。」

「なんだか私、体を動かしたくなつてきた。せつかく『ここ』に来たし、訓練施設に寄つていかない? テイオーがいたら喜んで走つたはず。」

「ここ」とは一体何の話なのか? ブラックは訝しんだ。そういえば、ウマソルジャーパークには訓練施設が併設されていて、西日本のウマソルジャー達が身体測定をする。そう

タマモクロスから教わった事を思い出した。

「私も訓練施設なら見てみたい。この目で確かめるのも悪くない。」

【ウマソルジャーパーク 併設訓練施設にて】

「何だ・・・これは・・・。」

ブラックは自分の目を疑っていた。初めて「日本ウマソルジャートレーニングター学園前」に来た時以来、いやそれ以上の衝撃を受けていた。完全に固まってしまった彼女を3人は心配する。

「何があったんや？ただの訓練施設やんか。今日はほんまに驚いてばっかの日やな。休み取ろうか？なあ？まぢいや。」

しかし、ブラックはタマの声が聞こえていないのか、フラフラと危なっかしくスタンドを降りていく。スタンドの観客席には大勢見物人がいて、中には何か紙切れを握り締めている者もいる。

「ここは・・・どう見ても中山レース場ではないか・・・。この世界にウマ娘のレースは存在しないはず。だが・・・なぜ・・・？」

ふと下を見ると、施設のパンフレットが落ちていた。見たくない気持ちと逸る心がぶつかり合い、しばしば沈黙が訪れる。しかし、彼女は事実の確認を決意した。

(この時、歴史が動いたのである！) ナレーションC。

パンフレットには以下の内容が記載されていた。

『特別認定法人 日本ウマソルジャーパーク 併設訓練施設』

【※この施設は国から委託管理運営されています。】

「府中徒競走訓練所 東京レース場 中山レース場 中京レース場 阪神レース場
大井レース場が再現され、

有馬記念、天皇賞春秋 宝塚記念 日本ダービー

スプリンターS 高松宮記念 JBCスプリント JBCクラシックダートレース

などの各種『イベント』が開催されています。開催日時は以下の一覧表を御覧下さい。

※雨天中止または延期の可能性が御座います。その際は掛け金は払い戻させたいいただきます。詳細は窓口までお問い合わせ下さいませ。」

ブラックは更に極めて強い衝撃を受ける。確かにヒシアマ長官の言う通り、「日本ウマ娘トレーニングセンター学園」なる施設は存在しない。

しかし、「府中徒競走訓練所」とは一体全体何の事だろうか?この場所こそがこの世界におけるトレセン学園ではないだろうか?しかし、ここは大阪のはずである。にもかかわらず、日本中のレース場の名までが冠された『訓練施設』なるものがあるのだ。

（私はウマソルジャーを止めて、元の世界に帰るまで、この訓練所でレースの訓練生となった方が良いのではないか？）

ふと、ブラックの脳裏にそうした考えさえ浮かぶ。この場所こそ、本来そして今でも目指している場所にもっとも近いのだからだ。

（しかし……）

この世界ではトレセン学園が存在しないはずにもかかわらず、違う名前で一部は賭け事として行われている事に憤っていた。ウマ娘のレースは真剣勝負だからこそ神聖なものなのだ。賭けの対象では断じて無い！

それだけでは無い。テイオーを始める、ウマソルジャーの仲間達がいるのだ。この大変な状況下において、自分一人夢の為に彼女たちを置いていけるだろうか？

既に答えは決まっていた。目の前の圧倒的現実に対抗すべく、彼女は全身からその答えを絞り出す。頭はクラクラし、呼吸は荒く、脂汗が滲み出る。

（しかし、あの大先輩を超えるのだ。ならば、やらなければならぬはずだ。いや、これこそが私の『霸道』だ。）

（私は……）

その時、突然大型の液晶スクリーンに広報用の映像が流れ始める。観客はみな立ち上

がって国民的英雄を称え、拍手送った。

「突然濟まない。私はシンボリルドルフだ。ウマソルジャーパーク訓練施設とは! ウマ娘が走れば必ずぶつかる宿命を乗り越えてつきすすむ場! 宿命を乗り越える。それは目的ではない。過程なのだ。」

私は極めて厳しい戦いを課していると自覚している。だがしかし、走りたいならば必ず宿命と正面から対決する事となる。それがウマ娘! それがレース! ならば我々は乗り越えて『魅せよう』ではないか! 戦い続けるウマ娘にこそ道は拓かれる!」

敬礼を終えて再びスタンド席には着こうとする観客たち。しかし、今回はいつもとは違う一文が付け加えられていた。騒然となる訓練施設のウマソルジャーたち。レース中にもかかわらず、思わずあつけにとられてペースを乱す者さえいた程だった。その追加部分とこうである。

「今後公表すると約束しよう! 長年極秘とされてきたウマ娘の宿命を! ウマソウルの秘密を! 不当な弾圧を打ち破らん!!!」

【タキオンの秘密研究室にて】

タキオンは顕微鏡を覗いていた。レンズからは次々と複製と分裂を繰り返す細胞が見える。そこにカフェがトピラをノックしてからふらりと姿を現した。タキオンは彼

女の方に椅子を回して向き直ると、とりあえずひと休みを始める事にした。

「カフェ。ヒトが繁殖以外の目的無くして生まれるならば、『走ると言う目的』が『あると言われる』ウマ娘とはいったいどのような存在なのだろうね？」

問われたカフェは分からないとクビを横に振るしかなかった。

「人間の女性の染色体はXX 男性の染色体はXY。男性の染色体の片方、すなわちY染色体はX染色体が変異したモノなのだ。つまり、原型は女性の染色体XXの方という事になる。これが生物学の一大常識だ。

所がウマ娘はこのXX染色体が変異した生き物なのかというと、説明出来ない矛盾が生じてウマ娘の染色体とはならない。では人間と全く別の種族かというと、家族でウマ娘であるモノとそうで無いモノがいるのだから有り得ない。それはサトノ家の長い家系図を参照して確認済みだ。

そこである宗教の異端を信仰していた科学者が逆の実験を行ったのだ。すなわち、ウマ娘の染色体から男性の染色体XYに変異させ、更にそこから女性の染色体XXに変異させる事に成功したのだ。この研究は学界では完全に無視されたが、この人物は『ウマソウル』なる概念モデルを提唱しているのだよ。」

ウマソウル。ウマ娘の間でまことしやかにささやかれている、一種のオカルトじみた学説である。学園基地は公式には否定的声明も肯定的声明も発表していない。

「ウマソウルは物理的に存在しない。『有』を基底に発展して来た西洋の近代医学では捉えきれないものだ。一方、東洋哲学及び医学は古代インド哲学の空の影響を受けつつ『无（無）』を基底としてきた。」

原因が物理的に捉えられるならば西洋医学が、捉えきれないならば東洋医学が。ならば私は東洋医学の観点から『氣』への研究を応用して『ウマソウル』について研究したい。だがその望みは叶わなかった。」

頭の固いお偉方は彼女をマッドサイエンティスト扱いし、あまつさえ抹殺しようとした者さえた。だからこうしてカフェと基地を出て来たのだ。

「例えば経絡はリンパ管だと言われる事もあるが、本当はそうでは無い。だから解剖で見つからないのは当たり前なのだ。そもそも発想が違うのだから。」

そこを履き違えてた者は西洋医学か東洋医学、どちらか片方のみを理解ではなく『信仰』する事となる。もはやそれは科学的態度では無い。」

タキオンはそこで話をやめ、再び顕微鏡に向き合う。

（カフェ。君のお友達は明らかに従来の単なる物理現象では無い。これが何を意味しているのか分かるね？そう、何らかの形でウマソウルと関係していると睨んでいたのだよ。それよ、私が君を助けた理由の一つだ。）

【次回予告!】

「遂にウマソルジャーパークに潜入したブラックドルフたち。そこで当初はすっかりレジャー施設として楽しむ一行。しかし、ブラックを陛下と崇め奉る謎のウマ娘と出会った。皇帝シンボルドルフは第三次大戦の国民的英雄として崇められ、巨大なタワーが建設される程だった。

だが、真の驚愕すべき真実は驚くべきものだった。この世界に存在しないと思われてきたレース場とレースがほとんど全て存在していたのである！

驚愕の余りシヨックを受けるブラック。しかし、更なる衝撃がウマソルジャーを襲う！遂に『皇帝』シンボルドルフがウマソウルの秘密を公表すると言うのだ。更なる激動の時代にブラックたちは情け容赦なくまき込まれていく。次回に続く！」ナレーシヨ
ンC

続く！

第十四話 決意を新たに。ルドルフ遂に覚醒か！ 異常

事態連発！ シン・オリシリウス登場！ 下天は夢か？

国U軍総本部 全ては分厚い岩盤の下で。 シン・

ゴールドシップ登場

〔大深度 地下 国U軍総本部基地内 U字教大聖堂にて〕

国際ウマ娘連合軍。通称国U軍の総本部は分厚い岩盤をくり抜いた、地下深くに存在した。全面核戦争対策の為である。太陽の光が一切射さぬ場所だ。その為、無神論者からは、神の光のみが届くと揶揄されていた。

そうした特殊な場所にエアシャカールとファインモーションはいた。シャカールは情報ウマソルジャー将校として、ファインはア○ルランド特命大使として来ていた。

エアシャカールは背後でSPと共に周囲を警戒している。彼女は北米大陸バージニア州ラングレーからの帰路、この場所でファインと落ち合ったのだ。

（ああ、クソ。）

シャカールは2つの意味で機嫌が悪かった。最大の理由は殿下サマことファイインが真剣に心配する程、世界情勢が悪化してしまったからである。彼女は当然ながら日本から本国へと帰国していた。その事が案外面倒見の良いツツパリウマ娘を更に苛立たせていた。

もう一つは自分の生まれた国の体たらくである。第三次大戦前後、ウマ娘とその協力者たちの力でユーラシア大陸で次々とウマ娘国家が誕生した。その後、急激に勢力を増し、今や世界全体の覇権を握りつつある。

所が、日本はその流れに見事に乗り遅れて経済的に失敗国家となった。故に東アジアのアルゼンチンと揶揄されてしまっている。シャカールが様々な意味でムシヤクシヤするのにも当然だった。

(とりあえず大人しく、皇帝サマの顔でも立てときや良かったもよをッ！)

せつかく皇帝シンボリドルフという逸材をもちながら、それを腐らせてきた残念振り。英雄となった彼女を遠ざけて外交で遅れを取り、海とガラパゴス化した職人芸で謎のプライドを保ってきたのだ。人材を使い「こなさない」か「酷使して使い潰す」事に定評のある祖国あるあるネタである。

海は確かに「最終的」には國を守った。しかし、同時にその目を覆い隠し体感を忘れさせる効果も持っている。その効果と付き合うのが絶望的にヘタなのだ。これにはさ

すがのシャカールも参っていた。

(ウマ娘は国外遠征もするから視野も広い。だからパスポートを当たり前に取得して
るっつーのによ。必要ないならそこらの権利全部寄せせ!)

宝の持ち腐れもあるあるネタであった。

一方、ファインモーシオンは大聖堂内部で祈りを捧げていた。彼女の故郷、アイルラ
ンドは聖。パトリックが現在のU字教聖母派を伝えたと言われる地である。その為、この国
は緑色と三つ葉クローバーを象徴としている。

(・・・どうか皆さんをお守り下さい・・・)

ひざまずき、祈りを捧げる彼女。その先にはU字を背景に聖母マ○アに抱かれる救世
主の石像があった。ミケランジェロの一大傑作『ピエタ』である。大戦勃発の際、遠く
イタリアのローマから運ばれてきたのだ。

その石像の女性には長い耳と尻尾が見える。そう。彼女は『ウマ娘』である。救世主
が飼う葉桶で寝かされた理由である。それ故にウマ娘は聖母派で非常に重要な存在と
見なされている。

また、日本の太陽神もウマ娘であり、「原始、ウマ娘は太陽であった」という標語とし
て良く知られている。更に信仰の対象となった聖徳太子の母もウマ娘だ。

2人が大聖堂を出て来ると、円形の広場に出た。そこには三女神様の像が建立され、

祈りを捧げているウマ娘と人々がいた。

かつて悪魔に怪人化された人々は三女神信仰に頼っていた歴史がある。その為、人間の間でも信者はいるのだ。しかし、最重要事項はその像ではないだろう。

「本当に広いね、シャカール！」

クルリと回って可憐に微笑むファインに、シャカールも渋い顔をようやく崩す。まるで可憐に咲く花とそれを見守る園丁のよう。その様子をSP隊長は部下と共に優しく見守っていた。

皆がいる円形広場には四つのファサードが設けられている。そして、それぞれの入口が「四つの巨大宗教」の拝殿へと通じていた。

U字教聖母派（大秦帝国・南米大陸「北米北欧・東欧は除く」）・砂漠預言者教諸派（中東帝国・北印度国・印洋諸国）・高山仏教（大清）・印教諸派（印南王国・印洋諸国）の連合を示す場所である。

『人類』史上始まって以来の異常事態がここでは実現してしまっていた。スペイン風邪に次ぐ防疫対策の記録的大失敗。それによって引き起こされた世界大恐慌、群発する大災害、遂に勃発してしまった第三次大戦。黙示録の四騎士こと、ダニエル書の四ウマ娘の内、三者は既に到来したのだ。

一連の「最悪の事態」を「何一つ」防げず、有効な対策を実行出来なかった人間を「人

間自身」が見限るには十分過ぎた。その後数々の紛争と衝突を経て「安定化」の確立目指した結果が今の体制である。

過激な人間至上主義者は次のように信じる事で「精神の安定化」をはかっていた。ウマ娘が主体となって積極的に陰謀を巡らし、世界単一政府の樹立を目指したというのだ。

陰謀家の世界観では連発した事件の原因も対策が失敗したのも全てウマ娘が悪いと言うのだ。しかし、彼等の言う事は極めて都合の良い「願望」に過ぎない。

現実には更に無惨で残念なモノだったからだ。彼等の言うような希望など何処にもありはしない。大変残念な事に、リアリズムとは現実追認や日和見では無かったのだ。この真相は「人間に絶望した人間自身」こそが現体制の最大の支援者である。しかし、ウマ娘側のファインにも思う所はあった。

(本当にこれで良かったのでしょうか?)

彼女はふと不安げに呟きかけた。その直後、素早く左右を見て自分が声に出していない事を確認する。幸い、その呟きはお供のSPにさえ知られる事無かった。

余りにも急減に変化していく国際情勢と連発される対応策。それには、さすがの彼女も疲労感を覚えていた。久しぶりにシャカールと会えた事が最近唯一の楽しみだ。

だが、今やお互いに国家の重要な立場にある。それこそ呟き一つで命の火が消される

かもしれないのだ。その心労は並大抵のモノでは無い。

(バベルの塔はこの地下で既に完成していたのかも・・・)

かつて、塔の如きチャーシュー麺を見た時、彼女はそう思った。しかし、今や別の意味でその言葉を使っている。だが、言葉に出来ない不安は虚空へと消えてしまったのだった。

(ボンヤリとした不安を残して。) ナレーシヨンC。

【裏庭のゴールドシツプたち】

「で、どうよアタシ? やれっか?」

ニセマックイーンことゴールドシツプが問いかける。サングラスをかけていない、大変お淑やかなゴールドシツプに向かって。

「ごきげんよう、ゴールドシツプさん。キレイなお空でお散歩日和ですわね♪」

白い上品なワンピースに白い日傘が脇に置かれている。とてもゴールドシツプとは思えない存在がそこに居た。周辺はイングリッシュガーデンとも中国の庭園とも日本庭園とも取れる、奇妙な空間が広がっている。

お淑やかなゴールドシツプは白い東屋風の建物で、紅茶をたしなんでいた。それをサングラスゴルシはまじまじと見つめている。

「メジロのアタシさんよ。なんつーか、いつ会っても違和感がすげーよ。ホントに誰だよ?」

なぜかいつもサングラスを掛けている方は気味悪がっていた。サングラスゴルシがこのような反応を示す相手は彼女ぐらいのものだろう。

「香港黄金さんの血がそうさせるのでしよう。私はメジロ家の血が強く現れたようですから」

そう言うと、メジロゴルシは清らかに微笑む。

「その如何にもな雰囲気が悪手なんだよ。選りに選ってアタシだけ。堪ったもんじゃないね。」

思わず肩をすくめる黄金ゴルシ。しかし、冗談はここまでだとキリツとした表情に改める。

「奴は×年×月×日に×××に現れる。これは確実な情報だ。今は例のウマソルジャーとこつちの『アタシ』に目を光らせている。だがやつこさん、『メジロさん家のゴルシちゃん』はノーマークだ。露払いは既に済ませた。後は任せませ、アタシ。魔王から世界を救うとしよっか。」

「宜しく任せましたわ、私。」

互いに情報と行動計画を確認し合うと、2人は別れた。プランBなら既にある。しか

し、今はプランAの実行を待つのみだ。

「さてさて。串カツでも食ってしばらく寝るか。」

こうしてサンングラスゴルシはフラリと飲食店街に消えていったのだった。

【ウマソルジャーパーク 併設訓練所にて】

「私は・・・大丈夫だ・・・」

ブラックは動悸で息切れを起こし、横になって休んでいた。それを他のウマソルジャーたちが囲んで見守る。タマモクロスは歩哨に立っていた。

「いや、どう考えても大丈夫には見えないね。しばらく寝てな。」

ヒシアマ長官がしばらく安静にしているよう促し。しかし、興奮冷めやらぬ様子のブラックは無理矢理身を起こそうとした。

「あかんで言われとるやる。ブラック。今は休んどき。後でいくらでも動く事になるやろ？長官。」

「ああ、おそろくな。」

歩哨に立っていたタマモクロスが何事かと戻ってきてしまった。しかし、ヒシアマゾンはブラックの安静を優先する事にした。彼女はそれだけ事態を深刻に捉えていたからだ。

(ブラックは明らかに「何か」を見た。そして、その何かを知っている。アタシが基地に
来た時間聞いた事はこの話のコピーだと思ってはいたが……。どうやらそう単純明快で
はないようだね。)

長官はグリーンズズカにも目くばせして今は落ち着かせろと命じる。

(精神的に錯乱寸前だった。詳しい事は後で。)

(分かりました。)

コクリとズズカはうなずいた。あくまでも長官は自分自身の勘を信じるつもりだ。

(アタシのタイマン勘が言っている! 事態の核心を突いたとね!)

「私一人のせいだ、皆の脚をひっぱるとはな。情けない。まだまだ未熟だな。」

「ならそんな未熟者は完熟するまでアタシらの世話になつてな。」

長官は敢えて彼女の言葉を否定しなかった。その方が余計なやり取りをしなくて良
いと思ったからだ。中途半端な慰めなどブラック自身が受け付けられないだろう。なにせ
「皇帝」ルドルフの背中を追うウマソルジャーなのだから。

(作戦行動中に倒れた事で、強く責任を感じとるんやな。クリーク印のアレが役に立つ
かもしれない。)

タマは長官に何かを見せ、ヒシアマゾンはずなず返す。許可をもらったタマは団子
を見せた。

「旨いで〜これ。一口どうや。クリークお手製の吉備団子やで〜!」

しかし、ブラックは自分がもろうワケにはいかないと、一度断ってしまった。

「これはな、クリークが皆を笑顔にしたいって一生懸命作ったもんなんや。食べて損はない。ウチが突つ込みウマソルジャー生命をかけて保証する。」

そこまで言われるとさすがのブラックも断り切れない。結局、一口サイズの吉備団子を食べるのだった。

「・・・しかし・・・分かった。濟まない長官、タマ、スズカ。少し・・・私は休ませて・・・」

吉備団子を一口食べたブラックは再び眠りに入った。

「クリーク印の吉備団子。凄まじい効力だな。おつかないぐらいだ。今更だが本当に副作用は大丈夫なんだろうな?これ。」

「ウチは今から赤ちやんにされるつちゆうえげつないシロモンやからな。副作用はそれぐらいや。て、何言わしとるんや(ビシッ!)。」

「タマ・・・。ノリツツコミ(苦勞)。」

なぜか長官から哀れみの表情を向けらるタマ。

「タマちやんさん・・・。」

スズカがポツリと容赦ない追い打ちかける。本当にタマモクロスはスーパークリークのスーパー揺りかごに入れられた事があったのだ。

黒歴史を現在進行形で掘り起こされる彼女。思わずウワ、ア、ア、アと、濁点だらけのだみ声をあげてしまう。

「ウチは・・・歩哨にたつとる。ええな!」

タマは顔を真つ赤にして立ち去ってしまった。

「いじり過ぎたな。反省反省。」

長官は思わず団扇で自分をおおぐ。一方、ブラックは夢を見ていた。優しい声が自分を包み込んでいく。揺りかごに揺られている様な、心地良い安らぎが訪れていた。

その直後、彼女は空を駆けていた。靴のサイズからして、幼い頃の自分らしい。いつの間にか、隣にはシン・オリシリウスがいた。2人はどこまでもどこまでも駆ける。本当にどこまでも。閃く光を浴びながら。

【夢の中で・・・】

「シ〇ウス。ここにいたのか。今までどこに行っていた。私は・・・私は本当に心配して。レースに参加出来ず、日々がただ無為に過ぎて行く・・・。正義の味方も悪くはないのだ・・・。」

それでも2人は小川で水を掛け合い、時には転んで笑われた。しかし彼女はルドルフの頬に着いた泥を、ハンカチで拭き取ってくれる。その行為にいつもはリードするはずのルドルフも項垂れてしまう。

(私は・・無力だ・・。3年しか時間がないというのに・・。)

「知っているだろうシ〇ウス。この世界のウマ娘はレースに興味が無い。いや、自分自身が勝つ。それだけが全てなのか？勝つとは他人の人生を・・。もしもウマソルジャーでいるならば、私は逆にねじ曲げられた他人の人生を。もしかしたら、救えるかもしれない。一体全体どうすればいい？」

ふと、一陣の風が吹く。どこか生暖かい気流がシ〇ウスの髪を後ろに流していく。その背後には燃え上がる基地があった。

「なら、両方やってみな。覇道と王道。前会長を超えるならそれぐらいしないとな。違うか？」

「シ〇ウス・・?」

ふと、流れる様な雲が大空を走る。まるで大勢のウマ娘が走っている様にも見える。草原の草木が駿馬の如くざわめき立つ。

「私は・・私はしのぎを削り切る圧倒的な結果をこの脚で刻み込みに来たはずだ！ミスターシービー先輩を倒し、無敗の三冠ウマ娘となる。あのシ〇ザン会長さえ超えて!!」

シ〇ウスは少しずつルドルフから離れていく。なぜか腰には剣をはき、ウマソルジャー用のニンジン型テザー銃のホルスターがあった。

彼女はどこか所在なき気に大空を見渡していた。

「シ〇ウス・・待て、待ってくれ! 私は・・私は一体どうしたら? どうしたらいい?」

しかし、シリウスは悲しそうな表情浮かべ、幼いルドルフを抱き締める。いつの間にか、彼女は自分と違って背が伸びていた。

「夢の続きは起きてからだ。じゃあな。」

ふと、ルドルフは視線を移した。シ〇ウスとは反対の方角を。小川の向こう側で誰かが泣いていた。

「カイチョー・・どこ行っちゃたの? ボク・・良い子にするから・・。」

次の瞬間、ルドルフは会長ルドルフとなっていた。背が伸び、シ〇ウスと対等に並び立つ。その様子を見たのか、先ほどまでどこかしら険しかった表情が柔らいだ。

「シ〇ウス・君では無く・私が、私こそが行かなければならない。そうだなシリウス。そうなのだな。」

ようやくシリウスはいつもの斜に構えた表情浮かべてうなずいた。ルドルフは小川

を渡ると、うずくまるテイオーを慰めに行く。

「もう大丈夫だ。テイオー。私はもうどこにも行かない。」

「カイチヨー？ ホントにカイチヨーだ！ カイチヨー！」

慌てて飛び付いてくるテイオーを今度はルドルフが包み込んだ。なぜか自分を『皇帝』ルドルフと間違えているが、わざわざ否定出来る余裕はなかった。しばしば静かな時が訪れる。

「こんな事を頼むのは正直しやくに触るけどよ・助けてくれ。」

彼女はそれだけを呟くと、急速にその姿が遠ざかり始めた。しかし、もうルドルフは追えなかった。未来の七冠バの脚でさえ、過去にさかのぼる事は出来ない。時は無情に流れ去る。

「シ〇ウス！ どこだシ〇ウス！」

らしく無い事を言い、シ〇ウスの姿はかき消えてしまった。途方に暮れるルドルフ。しかし、今はテイオーを守らなければならない。

（二バを追う者は一バをも得るか・・。シ〇ウス。必ず見つけ出す！ 必ずだ!!）

彼女は苦い決意と共にテイオーを護る。それから二・三分程で次第に辺りの景色が変化してきた。

周囲は見渡すと、深い霧に包まれていた。テイオーは黙って自分にしがみ付いている。突然、パカツパカツと音を立てて、大きな何かが近づいてきた。

それは4本脚に縦長の顔を持った不可思議な生き物だった。顔には三日月型の流星が見える。

凄まじい覇気に思わず圧倒されそうになるルドルフ。しかし、テイオーを護る為に死力尽くして立ち向かう。シリウスの為に、ここは負けられなかった。

一瞬にして数百通りの視線が交錯する。だがどうにかしてルドルフはそれを凌ぎ切った。いつの間にか勝負服はボロボロだ。

「カイチヨー? 大丈夫?」

心配して背後から覗いてくるテイオー。ボロボロの服を見ると、小さな体で精一杯ルドルフを護ると立ち塞がった。

睨み合う両者だったが、ふと視線が和らいだ。

「自分に着いてこいと言うのか?」

ルドルフは何となくそう思った。この偉大な存在が自分たちの事をひとまず導いてくれる気になったらしい。いつの間にか勝負服は制服へと変わっていた。どこも痛みのない、新品同様の制服だ。

「大丈夫なの?」

「ああ。もう何もするつもりは無いらしい。」

怯えるテイオーをおんぶすると、彼女は後を追いかける。深い霧はまるで墨を流した様な濃淡に変わっていた。奇妙な事に不思議と気持ちが悪く落ちていくルドルフ。テイオーは「もう大丈夫だから」と自分の脚で歩き出した。

どこからともなく誰かの子守唄が流れてくる。その方向に三者は進んだ。ボンヤリとした灯りを目指して。2人はお互いに助け合いながら共に歩む。どこまでも。。「おや、お目覚めかい？少しは落ち着いたか？」

【ウマソルジャーパーク併設訓練所 某所】

ヒシアマ長官が『ルドルフ』の額に手を置いた。

「熱は特に無し。おかしな汗もかいていないな。」

ルドルフは一筋の涙を流していた。しかし、長官は敢えてここでは何も問わなかった。

（タマをやつ、良い夢見れると言ってたが・・・）

そこにちょうどタマモクロスが現れた。長官は急いで制止しようとしたが、もう遅かった。

「おお、ブラック。おはようさん。もうこんばんはやけどな。いい夢見れとったか? ク
リークが言うにはな・・・。」

「あちやー。」

珍しく空気が読めないタマに長官は頭を抱えてしまった。しかし、彼女も一筋の涙の
痕を認めると、思わず口をつぐむ。

それを見たルドルフは大丈夫だと手で合図を送った。

「大事な・・・とても大事な夢を見させてもらった。礼を言わせてくれ。本当にありが
う。」

わざわざ身を起こして深々と頭下げる彼女にタマは慌ててしまう。

「ウ、ウチは・・・その、ほんま済まん。気づかいが足りなかった。」

彼女は謝るタマを逆にだめるのだった。

「ブラックさん。貫禄がついた様な気がします。それに、右手の長い毛は何でしょう?」

ふと自分の右手を見るルドルフ。彼女の手には一筋の毛が結われてあった。

「普通科連ちゃんカレンチャン。」

いきなり意味不明な駄洒落の出来損ないを言う彼女。これにはさすがの東西両横綱
の突っ込みソルジャーも突っ込み切れなかった。余りにも唐突過ぎたからだ。

(ブラック、やつばあかんとちやうか?)

(も、もう突っ込み切れま・・・。)

(あかん、今度はスズカに負荷が!)

(まだしばらくは休みを取った方がいいみたいだな・・・。)

こうして一行は一晩、密かに休息を取った。

【翌朝、トレセン基地 秘密の部屋にて】

ルドルフ一行は無事にウマソルジャーパークから脱出していた。結局、例の謎ゴルシカーに救われたのだ。そうしてあつという間にトレセン基地に帰還したのだ。

そこでルドルフはさっそくテイオーを見付け、抱き締める。くすぐりたいよと、戸惑うテイオー。彼女自身は何も知らないようだった。

しかし、それでも良かったのだ。大切な存在が生きてさえいれば。それ以外は何もいらない。彼女はテイオーを抱き締めながら、そう思った。だが、その為には戦わなければならぬ。かつて彼女の幼なじみが戦ったように。

(私はこの狂った世界を正さなければならぬ。シリウスを必ず見つけ出さなければならぬ!!この世界の『私』は・・・彼女を・・・。許さん。『絶対』に許さんぞ、『皇帝』。いや、『狂』帝ルナティック・ルドルフ!!)

彼女は決意を新たにする。そこでさっそくミカン箱の上に立って、所信表明演説を始める事にした。

「私は恥ずかしながら、これまで自分自身が何者なのか分からなかった。まさに隔靴搔痒、忸怩たる思いを抱えて過ごして来てしまった。」

「ちゅーことは自分が何モンか思い出せたんやな。めでたいなあ。さすがクリーク印の吉備団子や。」

タマモクロスはホッと胸をなで下ろす。

「実は今も分かかっていない。」

「分かかってなかったんかい! (ビシッ!)」

思わず突っ込んでしまうタマ。因みにスズカは稼働していない。現在突っ込み機能を修復作業中である。

「私は自分自身が何者かと問うてきた。しかし、今は違う。運命に対する態度を私から示さなければならなかったのだ。」

「それってどういう事?」

テイオーが難しい顔をして問いかける。

「つまりはこういう事だ。私たちが運命に問いかけるのでは無い、運命が私たちに問いかけているのだ。お前は一体何者なのだ。」

その問いに私たちは答えなければならない。この世界に迷い込んだ事を悔やむだけでは何も前には進まない。私は、私たちは運命に対して如何なる態度を取るのか模索し続けなければならない。私たちは自身を実存的存在と敢えて定義づけるのだ。」

「もー、ブラック。ボクワケが分からないよー。カイチョーみたいな小難しい話をするんだもん。」

テイオーは混乱していた。

「ではブラック。既に運命が定められていたとしたら、既に決められていたとしたらどうする?」

女帝 エアグルーヴが問いかけた。

「既に決められていたとしても、主体的に自ら運命に参加する意志を持つ。それが私の今の回答だ。」

「そうか。(ブラック・・・。一体何をするつもりだ?)」

彼女は怪訝な表情浮かべて、ルドルフを見るもの

一方、ルドルフ幼なじみを思い、しばしば黙祷を捧げていた。

(シ〇ウス、見ていてくれ。ウマ娘のウマ娘たる由縁は単なる事実を超えていく事にある。君が倒れても私がそれを受け継ぐ。無数の見えない蹄鉄の跡が、それが出来ると教えてくれる。そうだろう、シリウス?)

【大深度 国家親衛隊総司令部 地下壕にて】

コツリコツリと冷たい足音が防空壕に響く。

国家親衛隊の隊長は待つていたのだ。伊勢湾防衛戦・大阪防衛計画により、カレン派の隊員をあぶり出す為。その為に敢えて本隊を関東に貼り付けたままにして置いたのだ。

「我々もそこまで愚かでは無い。カレンとやら。」

今度こそオグリンを討たねば後が無い親衛隊。三度大食い大怪物が上陸する前に、逆徒を拘束し、信頼の置ける隊員を集結させなければならぬ。

(所属階級と権限の剥奪・追放・軍事裁判にかけようではないか。奴らと引き換えにカレンチャンとやらをおびき出すのも良いが、官邸に反徒がここまで浸透した露見するのは大変不味い。我々の沽券に関わる問題だ。出来るだけ秘密裏に処理したいのだが・・・) 　しかし、そんな事はもはや不可能である。情報将校の副官には分かっていた。

(もうそうした段階に無い事がまだお分かりにならないのか。この組織、完全に終わったな・・・。カワイイカワイイカレンチャン!!)

そこで情報将校はコツリと隊長に耳打ちする。もちろん権限の逸脱を回避する為、特例措置は既に対策済みだ。

「隊長殿。意見具申願います。先ずはより確実に我々の味方と確認出来る戦力を配備すべきです。そこでメカブルボンの実戦配備を提案致します。」

人間及びウマ娘の隊員は敵のシンパか否か『仕分け』が必要です。その為には膨大な尋問をこなさなければならず、作戦開始までに間に合わせるには到底不可能でありません。

が、メカブルボンはプログラムにより常に制御及び監視が可能です。その後、再編成した信頼の置ける航空隊、機甲部隊、機械化歩兵隊及び特別任務遂行の為の特集部隊を本格的に投入致しますよう。

現状のオグリン上陸ペースに合わせるには、ただ今申し上げた作戦案が妥当かと思われます。何卒ご検討の程、宜しくお願い申し上げます。隊長殿。」

むむむ、と思わず唸る隊長。

（メカブルボンは依然として実権段階にあり、最終審査を通過していない。新兵器を第一陣として投入する。これだけは絶対に避けなければならない。）

しかし、最悪部隊丸ごと寝返る可能性がある。防衛隊とは握手を交わしながら互いに足を踏み合う間柄だ。）

「メカブルボン部隊は必要最小限度に抑え、通常戦力を関東より抽出する。餅は餅屋、

『火消し屋』は火消し役に任せる。」

こうして事態は更なる危険な段階へと突入するのであった。

【ルドルフ一行不在の北関東某所】

スタスタはウマソルジャー候補生の一人である。

褐色のよく日焼けした肌がどれだけトレーニングを積んできたのか、何より雄弁に物語っていた。勝負服はさわやかな緑色で良く映えている。だが、彼女の気持ちは重苦しく沈んでいた。

彼女はかつて将来を有望視されていた候補生だった。候補生時代の正規隊員を打ち負かした事さえある程だ。

ところが、故障した後は成績がなかなか残せずだった。三番止まりがせいぜいといった所である。その上、現在ウマソルジャーは出動を厳しく制限されてしまっていた。彼女はこれまでの自分の人生をことごとく破壊されたと感じている。少なくとも彼女はそう思った。

突如として怪ウマ娘センサーが反応する。

「それでも・・・、それでも行かないや!」

ジャラジャラは検問所を無理矢理突破すると、現場に急行した。

(例えどんな結果になつたとしても、ワタシ。今までの自分にウソをつきたくないから。)

そんな彼女を親衛隊が追跡したのはなぜか。それが彼らの仕事であり、命令を受けたからであつた。

【次回予告】

「遂に動き出す国U連。ファインモーシヨンの不安は果たして外れるのか？一方、幼なじみとの再会により、決意を新たにした『ルドルフ』は『皇帝』ルドルフへの戦いの意志をにじませる。そんな事とは露知らず、テイオーはますますブラツクルドルフに懐くのであつた。

そんな中ルドルフ一行が不在中、スタスタは検問破りをして緊急出動する。一般人が人力で怪ウマ娘に勝てないのは当然だからだ。被害者が出る前に、怪ウマ娘自身がこれ以上苦しまない内に、何よりこれまでの自分自身にウソをつかない為に。

彼女は自身を焼きながら走る！

更なる怒濤の展開を見せる次回。諦めない事は救いか、それとも……。乞うご期待！」